

「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学」

鹿児島大学生涯学習憲章への道 —大学と地域をつなぐ架け橋—

I 部 「鹿児島大学生涯学習憲章策定」 ワークショップの記録

平成 25 年 9 月

国立大学法人 鹿児島大学

鹿児島大学生涯学習憲章

鹿児島大学は、大学憲章の理念に沿って、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざしており、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

鹿児島大学は、全構成員が生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 地域の発展の基礎となる多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。
4. 鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、進取の精神を養い、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 柔軟で闊達な組織づくりに努め、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

※「進取の精神」とは、自ら困難に果敢に立ち向かう態度です。

はじめに

大学の歴史的使命が問われる時代になった。人生における学習は、単に幼年期から青年期だけのものではない。学習を生涯にわたって継続することは、よりよく、よりやさしく、よりおだやかに生きていくための必要条件となったことを意味する。

鹿児島大学は全国の国立大学に先駆けて生涯学習憲章を制定した。鹿児島大学に生涯学習教育研究センターができて 11 年が経ち、これまでの経験と実績を検証する必要に迫られたこともある。しかしそれ以上に、鹿児島大学において、地域貢献の精神を明確に宣言する必要があると考えたからである。

大学の生涯学習の役割は、まず第 1 には、職業教育という意味で言う技術革新が非常に激しい中で、新しい知識を常に身につけなければならないという要請に応えることである。第 2 は、より高い自己実現のために、市民としての力量をつけ文化性を身につけるための教養教育の機会を提供することである。

今日、大学の使命は教育研究とともに地域への貢献がとりわけ重要になっている。歴史のなかで、世界の窓口となって文化を形成してきた鹿児島の地において、地域と切り結びながら鹿児島大学としての学問形成を図っていくことが求められている。

平成 25 年 9 月 19 日

岩元 泉 生涯学習教育研究センター長

目次

鹿児島大学生涯学習憲章.....	1
はじめに.....	3
第 I 部 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの記録	
1. 全体会.....	7
2. 分科会 1.....	19
講師問題提起.....	21
事例報告 1.....	28
事例報告 2.....	34
事例報告 3.....	38
各班の発表.....	42
講評.....	62
3. 分科会 2.....	63
講師問題提起.....	65
事例報告 1.....	74
事例報告 2.....	79
事例報告 3.....	82
各班の発表.....	84
講評.....	106
4. 総括.....	109
分科会 1 総括.....	111
分科会 2 総括.....	113
分科会の主張（要点メモ）.....	115
アンケート集計結果.....	116

資料

1. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ名簿.....	121
2. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップアンケート結果（全回答）	125
3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯.....	132
4. 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会の概要 起草委員会の開催状況.....	134
鹿児島大学生涯学習憲章第1次案（学内意見照会）	136
鹿児島大学生涯学習憲章第2次案（パブリックコメント）	139
5. 刊行物・新聞記事.....	142
6. 公開シンポジウム「地域とともに描く、生涯学習の近未来像」.....	146
7. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ運営スタッフ.....	148
あとがき	149

<別冊>

第Ⅱ部 「鹿児島大学生涯学習憲章」起草委員会の記録

1. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯.....	6
2. 起草委員会の開催状況.....	8
3. 第1回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	13
4. 第2回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	31
5. 第3回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	51
6. 6月1日ワークショップ前の臨時起草委員会.....	79
7. 第4回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	89
8. 第5回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	105
9. 第6回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	113
10. 第7回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	123
11. パブリックコメント.....	129
あとがき	135

「鹿児島大学生涯学習憲章」策定

ワークショップ

日時：6月1日（土）

13：00 開会～17：00 閉会 （※17：30～懇親会）

場所：鹿児島大学 共通教育棟2号館1階

全体会：211 教室 分科会：212 教室 213 教室

第1部：全体会

13：00-13：10 挨拶 前田 芳實 鹿児島大学学長
合田 隆史 生涯学習政策局長

13：10-13：30 文科省の取組み 及び 趣旨説明
高井 絢 生涯学習推進課 課長補佐
岩元 泉 生涯学習教育研究センター長

休憩・移動（10分）

第2部：分科会

13：40-14：00 講師の問題提起
14：00-14：30 事例報告 3本
14：30-16：30 各6班に分かれてワークショップ
16：30-17：00 分科会まとめ

第3部：全体発表会・懇親会 ※会場：鹿児島大学生協中央食堂

17：30-18：00 全体発表会

18：00-19：30 懇親会

本ワークショップは、「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学」として
鹿児島大学と文部科学省と共催したものです。

開会あいさつ

前田 芳實 鹿児島大学長



本日は、土曜日であるにもかかわらず、「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップに、たくさんの方にご参加いただきありがとうございます。主催者として大変嬉しく、心強く思っております。本日は共催者である文部科学省からも合田隆史生涯学習政策局長、高井洵生涯学習推進課課長補佐、および船木茂人係長にもご列席頂いております。厚く御礼申し上げます。

さて、鹿児島大学では、平成 19 年に「鹿児島大学憲章」を定めました。これは、先の吉田学長のときにつくったものですが、私も当時、理事として策定の責任を担いました。また、平成 22 年には、学生の手によって「鹿児島大学学生憲章」を定めました。本日の「鹿児島大学生涯学習憲章」

は、本学では 3 番目の憲章となりますが、これは、鹿児島大学が、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学として、今後本学が、地域の方と一緒に、どのように大学づくりを進めていくのか、その理念を定めるものとなります。

本日のワークショップは、文科省との共催で、プログラムにありますとおり、「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島」として、文科省には支援をいただいております。

のちほど詳しくご説明があるかと思いますが、日本をとりまく危機的状況は、ここ鹿児島でも例外ではありません。少子高齢化やグローバル化の進展は、一層激しさをましており、地域の暮らしを支える産業や地域社会のきずなを強化していくことが求められております。鹿児島県に立地する大学として、地域の方々と一緒にこれらの問題に取り組んでいくことが、本学の責務であると認識しております。

鹿児島大学は、平成 22 年に始まりました、第 2 期中期目標・中期計画の中に、「生涯学習に対する全学的な取組を推進する」と明記しました。生涯学習は、大学の持てる資源を地域に開放する活動であり、鹿児島大学はこれまでも、生涯学習教育研究センターを中心に、9 学部、10 研究科、14 の学共施設が、それぞれの特色を活かした生涯学習に取り組んできました。

また、私が学長に就任し、これまでの重点研究領域である島嶼、環境、食と健康に加えて、新たに水、エネルギーを本学が取り組むコアプロジェクトに位置づけました。これはいずれもが、本学が、豊かな自然と厚みのある歴史と文化をもつ鹿児島に立地することの強みであり、我々が誇りとするものです。

今後、地域とともに社会の発展に貢献する大学づくりを推し進めるには、本学の教職員と学生が一丸となって取り組める生涯学習の指針が必要です。今回策定します「鹿児島大

学生涯学習憲章」が、その指針になることを期待しております。

鹿児島大学生涯学習憲章が策定されますと、これは日本で初めての試みとなります。フロントランナーとして本学が、今後生涯学習のメッカになることに大きな期待を寄せております。

本日は、生涯学習の第一線でご活躍中の北海道大学の亀野淳准教授と新潟大学の西原亜矢子講師にワークショップの講師としてお越しいただきました。また、参加者として、教職員と学生以外にも、卒業生や遠くは与論町から行政関係者や漁業者の方にもお集まりいただいております。

この場に集う皆さまの熱意に負けないように、大学としても支援していけるよう努めて参りますので、どうぞ大いにご議論いただくことを楽しみにしております。

終わりに、本日のシンポジウムの開催にご尽力いただいた文科省の皆様をはじめ、ご後援いただいた関係者の皆様のご協力に深く感謝を申し上げますとともに、ご参加いただいた皆様方のご健勝を祈念し、ごあいさついたします。

開会あいさつ

合田 隆史 文部科学省 生涯学習政策局長



「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学」、そして「鹿児島大学生涯学習憲章」策定のワークショップの開催の機会を得られましたこと大変嬉しく思っております。開催にご尽力いただきました鹿児島大学の皆様方に心から敬意を表し、感謝を申し上げたいと思います。

私のところによく大学の学長先生はじめ大学関係者がお見えになりますが、その際には必ず、大学というところは生涯学習機関でございますからそのことをお忘れなく、と申し上げます。そうするとたいてい一瞬きょんととして、「まあそういわれてみればそれもそうだなあ」という表情をされるのが普通です。しかし、私どもの担当

から、鹿児島大学が生涯学習憲章を策定されるということを聞きましたときは、今度はこちらの方が驚いて、そういわれてみれば今までそういうのがなかったな、考えてみればもっと早く日本の大学でそういう取り組みが行われていてもおかしくなかったではないか、コロンブスの卵とはこういうことなのかなと思いました。本当に素晴らしい発想であり、心から敬意を表しています。

さて、私どもが大学の生涯学習の取り組みについて、ここ二年あまりですけれども、非常に重要な課題として取り組んでおります文脈について簡単に触れたいと思います。

ご存知のように大学改革という文脈では、大学の機能として教育研究に加えて地域貢献や社会貢献が言われるようになりました。ただ、今までは、大学の教育研究にくさびを打つとか、そのようなことを通じて地域に貢献することが大事な役割のひとつだという程度の位置づけでした。しかし、知識基盤社会と言われるように、社会のあらゆる経済的な活動や制度に至るまで非常に高度の知識技術、またそれを支える人という知的基盤の上に成り立つという状況の中で、大学の社会貢献が強く期待をされるようになりました。逆に言うとそういうことを通じて、社会からの支持、国立大学に対して社会全体としてそれを大事に支えていこうという盛り上がり無しには、大学の存在そのものが継続的に維持できない、そういう状況になりつつあります。そのような大学改革の文脈が一つあります。

一方、社会や地域の側から見ても、今非常に深刻な問題がたくさんあります。今回の第二期教育振興基本計画の中で基調としてありますのは、少子化や高齢化、グローバル化、また雇用の問題、地域社会の変容の問題など、この国が非常に危機的な状況に直面しているという現状認識です。そういった問題を一人ひとりが、あるいはそれぞれの地域が、自

立をして自ら取り組む。そしてその時にそれぞれバラバラに取り組むということではなくて、いろいろな違う立場の人と、違う意見や能力をもった人と協働して取り組んでいく。新しい自分たちなりの答えを作りだしていくということが求められているということです。加えて、学習需要も高度化しています。そういうことから、教育振興基本計画の中では、危機に直面しているこの国がその危機を乗り越えて持続的な発展につなげていくためには、自立・協働・創造とういうものを可能にする生涯学習社会を作っていかなければいけないという文脈になっています。

そういういわば大学改革の文脈と、そして生涯学習の学習需要や社会の必要性というものが交差するところに大学における生涯学習の役割があるということだと思います。またそういったことで2013年度からこれまですでに18の大学とご一緒に地域と大学の協働に関するいろんな取り組みを進めさせていただいております。

鹿児島大学におかれましても、既に鹿児島大学憲章の中で、地域と共に社会の発展に貢献する総合大学ということを掲げておられると伺っております。本日のワークショップでは、教職員や学生さん、さらには自治体の職員さんなど地域の方々も含めて、これだけ大勢の方々が参集されて、どういう憲章をつくっていくのかについての検討や、具体的な行動実践への提言が行われると伺っております。おそらく今日のお集まりの方々の議論の成果が、日本中の大学のこれからの生涯学習の取り組みを考える際の、一つのベンチマークと申しますか、目標になってくるものだろうと思っております。本日の内容が充実したものになりますように、心から祈念いたしまして御挨拶とさせていただきます。

文部科学省の取組み

高井 絢 文部科学省 生涯学習政策局 生涯学習推進課 課長補佐



文部科学省の高井と申します。地域と大学の協働に資する取組について文部科学省としてこれまでどういう取組みをしてきたかについて簡単にお話したいと思います。

文部科学省では、本日実施する大学による地域と協働を促進するワークショップを平成23年～24年にかけて18か所で開催してまいりました。今年の5月10日には、その総まとめとして文部科学省において18の大学の方に集まっていただき「地域と協働する大学づくりシンポジウム」を開催しました。そして、大学と地域の一步進んだ関係づくりをしていくという観点から、今回、全国で初めて生涯学習憲章を策定することとした鹿児島大学と協力してワークショップを行うこととなりました。9月には、滋賀大学で

も実施する予定です。

本日配られている資料の中に第2期教育振興基本計画の答申の概要が掲載されております。4月25日に中教審から答申を頂いたところです。そのなかで、今後の教育行政の方向性として4つの基本方針が示されておりますが、4番目に絆づくりと活力あるコミュニティの形成がございます。人口減少が進む中でいかに地域の活力を高めていくのかということがますます重要になってきています。より詳細は、次の頁の8つのミッションの8番目に書かれておりますが、大学が中心になって取組みを強化していくことの必要性についても記されています。

さて、これが先ほど紹介した大学による地域との協働を推進する「地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議」を実施した18の大学です。大学には、地域や社会の知の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な主体の活動を支え、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造への積極的な貢献が求められています。



大学によるこうした取組を継続することで、大学と地域が共に支えあう良い関係を構築していくことにつながっていくと考えられます。文科省では、大学が地域との共生・協働関係を発展させる取組を支援し、大学間ネットワークの構築により、全国的に「地域と共生する大学づくり」に向けた意識の共有及び機運の醸成を図ることを趣旨に取り組んできま

した。

これが、今年実施した5月10日の「地域と協働する大学づくりシンポジウム」です。平成23年から24年度の実施を総括して、各大学における取組の成果や展開について共有し、実施大学の間で更なる人的ネットワークの形成と大学と地域の更なる協働の推進を目的に開催しました。シンポジウムには、大学関係者等214人が参加しました。主なプログラム

としては、地域と連携・協働する大学の在り方についての行政説明、東京学芸大学と広島修道大学から、これまでの取組の成果や大学による地域貢献に関する取り組みなどの事例報告、パネルディスカッション、最後には、パネルディスカッションの議論を踏まえた全体討論とミニワークショップも実施しました。またフロアには、18の参加大学がポスター等を用いて地域貢献に関する取組等の報告を行うポスターセッションもありました。

当日行ったアンケート結果を紹介しますと、「地域の人びとの学習機会の拡大に大学が加わること（公開講座）について、あなたはどうかお考えですか」という質問に対しては、非常に有効、あるいは、有効だと思うを合わせると95%、また、「地域の人々同士による学習活動（公民館活動等）促進やきっかけ作りを大学が担うことについて、あなたはどのようにお考えですか」に対しても、90%以上の方が非常に有効、もしくは、有効と回答しています。複数回答でお尋ねした「地域と大学が協働することは、どのような効果があるとお考えですか」については、学生の教育効果が89.4%と一番高く、次いで地域の人々への学習機会の拡大が、

57.6%、地域の人々の地域活動の契機・活動促進が54.1%、自治体との連携の創出が55.3%となっています。また、「地域と大学が協働することの課題としてどのようなことがあるとお考えですか」に対しては、次のような分析結果になっています。

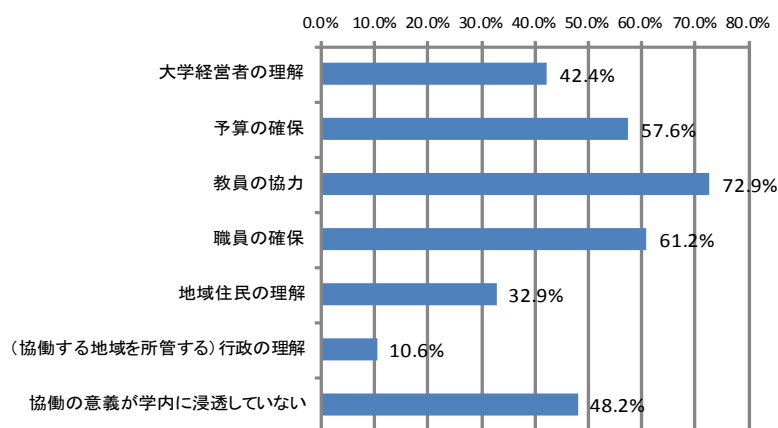
以上、簡単ですが報告とさせていただきます。

主なプログラム

○パネルディスカッション

パネリスト
大宮 登（高崎経済大学地域政策学部教授）
門川 大作（京都市長）
中西 茂（読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員）
藤江 昌嗣（明治大学副学長・社会連携機構長）
藤田 公仁子（富山大学地域連携推進機構生涯学習部門教授）
ファシリテーター
上月 正博（独立行政法人国立高等専門学校機構理事、前文部科学省大臣官房審議官）

（コメント(例)）
・大学は、地域との協働を進めるに当たり、相手に何かを求めるのではなく、自らが率先して変革していく必要がある。
・関係者全員が主役となる場を設けることが重要であり、その場を取り持つプラットフォームとして大学は重要な役割を果たす可能性がある。



趣旨説明

岩元 泉 鹿児島大学 生涯学習教育研究センター長



みなさんこんにちは。鹿児島大学生涯学習教育研究センター長の岩元です。本日は多くの方にお集まりいただきましてありがとうございます。

私の方からは「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの趣旨の説明をさせていただきます。実は私は昨年四月からセンター長になりましたがその時に、鹿児島大学も地域貢献推進をどういう風に進めていくかという課題がある、センターが2003年に創立されて、本来ならば10周年の総括を行う時期ではないかという議論をしました。そのためには全学が集まってシンポジウムか何かをした方がいいのではないかと結論に至ったのですけれども、そういうものを思いついたのがちょっと遅くなってしまいまして、10周年に間に合わなくて

11周年になってしまったところなのですが、その際生涯学習といっても色々な形態があるし、大学の社会貢献としての生涯学習の意義は大きいということもありました。それで、生涯学習憲章というのを策定して全学のものにするという、そういうシンポジウムを開こうということになりました。それから各学部にお邪魔していろんな方々に話を伺うと、私たちが当初想定していた以上に多彩な活動が学部で展開されているということに気づきました。そこには単に社会に対して大学の授業を公開するとか、公開講座をやるとかだけではなくて、社会人や大学院生もそうですが、学生が地域に出て行って学生自身が社会と交わりながら学んでいく、そういう活動が色々な学部で行われていました。そういうものを生涯学習憲章の中で位置づけられないかということが、今回の憲章策定の趣旨であります。

この冊子の最後のページに、生涯学習憲章の考え方があります。このワークショップは憲章そのものの字句をこういう風にしようというものではなくて、その中身を考えて作っていく、そういうワークショップにしたいと考えております。この生涯学習憲章の考え方の骨子については、起草委員会でつくっています。これから憲章の考え方に沿って分科会で議論して頂いていただきますけれども、この全体会の後にそれぞれの分科会のファシリテーターと起草委員会の方々とに集まっていただき最終的にこの生涯学習憲章の案をまとめまして、その後学内外のパブコメにかけたいと思います。

かいつまんで内容を説明しますと、前文のところは、第一段落では鹿児島大学と生涯学習との関係であります。第二段落が、鹿児島という地域について、鹿児島大学がどういう地域にあるかという地域性を強調したところであります。第三段落では、地域の持つ生活知と大学が持っている知との結びあい、そういった関係のところをぶつかりあいと言って

おります。その次に定義としているものがあるのですが、定義と言うのを憲章の中に入れるかどうかはまだ議論がありまして、必ずしも必要でないのではないかとということもあるのですが、憲章の素案では一応定義も含でおりますので、読み上げます。

ここでの生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育の場を準備し、学習者が成長していく全過程を意味します。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことも含みます。わたしたちは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義します。

一応生涯学習憲章としては、5本の柱を建てようということになっています。一番目が、青年を対象とした教育、いわゆる学生教育。二番目が、職業教育、教養教育すなわち専門の技術を高める教育と人格形成あるいは知的好奇心を満たすための教育の調和を図るということ。三番目は、地域の人たちと向き合う、専門知を鍛え直し、社会に還元する。四番目が、学生憲章との関連として課題解決能力を育むために学生が大学で修める学問を基礎に、地域と向き合うそういう機会を保障する。五番目が、地域に貢献する鹿児島大学の生涯学習活動を通じて、世界に発信できる地の拠点形成を目指すということです。

こういった方向で生涯学習憲章を策定しようと言う風に考えておりますので、これを基に各分科会で議論をしていただく、そしてまた後ほどコメント、ご意見でも頂けたらと言う風に思います。簡単ではありますが、これで憲章の趣旨の説明を終らせて頂きます。ありがとうございました。

鹿児島大学生涯学習憲章の考え方

■前文

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学と定めた、大学憲章の精神を受け継ぎ、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していくための大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地に存立する強みを生かして、生涯学習を全学で取組みます。そこでは、多様で厳しい自然のなかで、たくましく生きてきた人びとの知恵を継承し、厚みのある歴史に学びます。

地域のもつ生活知と経験知は、大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であるとの認識のもと、現場の人と教員、学生、職員がともに学び合い、教え合う関係から互いが成長し、知の循環を促し、学ぶ喜びを分かち合っていくことが、知的拠点としての鹿児島大学の目指す生涯学習です。

■定義

ここでいう生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育の場を準備し、学習者が成長していく全過程を意味します。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことも含みます。わたしたちは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義します。

ここでいう地域とは、大学を取り巻く人々の暮らしや生業（なりわい）、意識の総和としての現場であり、同時に、歴史が形成した文化、および、そこに存する自然のすべてを意味します。

■鹿児島大学生涯学習の基本方針

1. 青年を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障します。
2. 職業教育と教養教育の調和が保たれた教育の機会を用意し、激動の時代を生きる地域

の人々が、共に支え合い、暮らしていけることを支援します。

3. 大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにします。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。

4. 鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域ともに成長できる機会を保障します。

5. 地域に根ざし、地域に貢献する鹿児島大学の生涯学習活動を通して、世界に発信できる「知の拠点」の形成を目指します。

鹿児島大学は、ここに生涯学習の理念を定め、これらの実現に向けて大学の総力を結集します。

第2部 分科会1

テーマ：社会の要請と学生教育の充実（質向上）
地域社会とのかかわりが相乗効果をもたらす本学の教育目標の実現

コーディネーター 酒井佑輔 生涯学習教育研究センター講師

13：40-14：00 講師の問題提起
亀野 淳 北海道大学准教授

14：00-14：30 事例報告
報告1 佐野 雅昭 水産学部教授
報告2 澤田 樹一郎
大学院理工学研究科(工学系) 准教授
報告3 大脇 哲洋 大学院医歯学総合研究科教授

14：30-16：30 6班に分かれてワークショップ

	1班	2班	3班	4班	5班	6班
チーム	混合	教員	教員	職員	学生	卒業生
論点	学生と地域社会がつながる各々のメリット、デメリット	学生を実社会で教育させることの難しさ	学生にとって本当に必要な力とは何か	職員が学生のニーズを知り、応えていくために	実社会とのかかわる教育機会をよりよくするために	卒業生から大学教育に求めること

16：30-17：00 分科会まとめ
講評 船木茂人 文科省生涯学習推進係長

分科会 1 問題提起 『(大学) 教育と(職業) 能力』

亀野 淳(北海道大学 高等教育推進機構 生涯学習計画研究部門 准教授)



皆さん、こんにちは。先ほどご紹介いただきました北海道大学の亀野と申します。このたび、ワークショップにお招きいただき、皆さんの前でお話しができるという場をご用意していただきまして感謝申し上げます。

ワークショップの問題提起ということで、気楽に聞いていただければと思います。どこまでこの後のワークショップの問題提起になるかという自信はないのですが、日頃私が考えていることをお話できればいいかなと思っております。

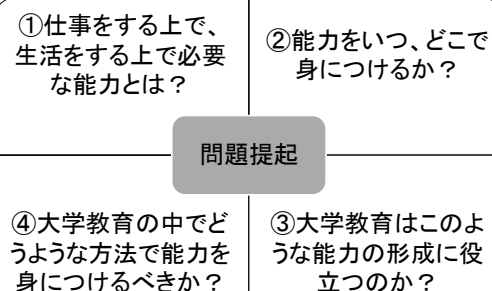
簡単に自己紹介させていただきます。なぜこんなことを言うかという、今日は自分の考えもかなり盛り込んでお話を

したいと思うのですが、私はちょっと変わった経歴を持っています、ずっと大学にいる人間ではありません。最初役所にて、昔の労働省、今厚生労働省になっていますが、9年間霞が関で勤務をしていました。その間2年ほど経済企画庁という役所に出向して仕事をしていました。こういう役所での経験とそれから民間のシンクタンクと言われる業界で5年間ほどいまして、2001年から今北海道大学で勤務をしています。そこで、キャリア教育とか労働政策とか教育と労働の関係などを研究したり、大学内でキャリア教育とかインターンシップを担当しております。こういう人間だということをご理解の上、話を聞いていただければと思います。

私が大学勤めてもう十数年経ちますが、よく言われることとして、大学で勉強したことは社会に出れば役立たない。大学では勉強なんかせずに、友だちを作ってアルバイトして、そういうのがいいのだということをよく聞きます。それから2番目はどちらかというと大学の関係者がよく言いますが、大学は就職のためにあるわけではない。本来の大学の目的はこうなんだ、というような意見も聞きます。そういう面は確かにあるけれども、でも本当にそうなのかなとクエスチョンマークをつけました。ここからスタートして、少しブレークダウンした問題提起を4つ挙げております。

1. よく言われる大学教育について意見

- ① { **•大学で勉強したことは社会に出れば役立たない？**
- ② { **•大学は就職のためにあるわけではない？**



1 番目は仕事をする上で、あるいは生活する上で必要な能力とは何だろうか。2 番目は、そういった能力というのは、いつどこで身につけるのがいいのか。3 番目は、大学教育はこのような能力の形成に本当に役立つのかどうか。それから 4 番目は、大学教育の中で、どのような方法で能力を身につけるべきなのか。そういったことで、4 つの問題提起を掲げさせていただきました。

まず 1 番目の問題提起ですが、仕事をする上で、あるいは生活する上で必要な能力とは何かということですが、実はこういう議論というのがここ数年盛んになっています。

一番上の社会人基礎力というのは数年前経済産業省が言い始めた言葉ですが、この言葉を聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。それから文部科学省では、学士力という言葉ですね。似ているところも似ていないところも若干ありますが、文部科学省もこういう言葉を使っています。でも実は日本だけではなく、世界的にみてもこういった議論というのはかなりここ最近進んでいまして、OECD ではキー・コンピテンシーとか、また、いろんなところでジェネリック・スキルという言葉を使ったりして、こういう議論が盛んになっております。厳密にいうといろいろ違いがありますが、どういう能力が重要になってきているのかということに関して、最近議論されているのが、汎用的な能力ということで、どういう仕事をするにあたってにも必要になるであろう能力というものが重要だという議論が、ここ 10 年ぐらいだと思っておりますが、非常に盛んになっております。

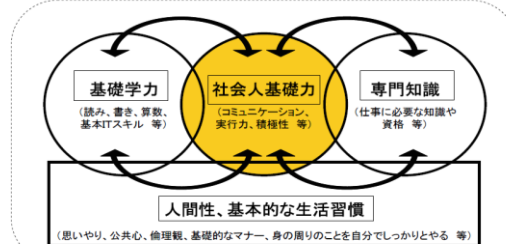
〔問題提起1〕仕事をする上で、生活をする上で必要な能力とは？

- ①能力論
- 社会人基礎力(経済産業省)
 - 学士力(文部科学省)
 - キー・コンピテンシー(OECD)
 - ジェネリック・スキル など
- 汎用的な能力(Generic Skill)の重要性

◇「社会人基礎力」＝「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」

(職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力について)

※それぞれの能力の育成については、小・中学校段階では基礎学力が重視され、高等教育段階では専門知識が重視されるなど、成長段階に応じた対応が必要となる。



経済産業省「社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」」(2006年)

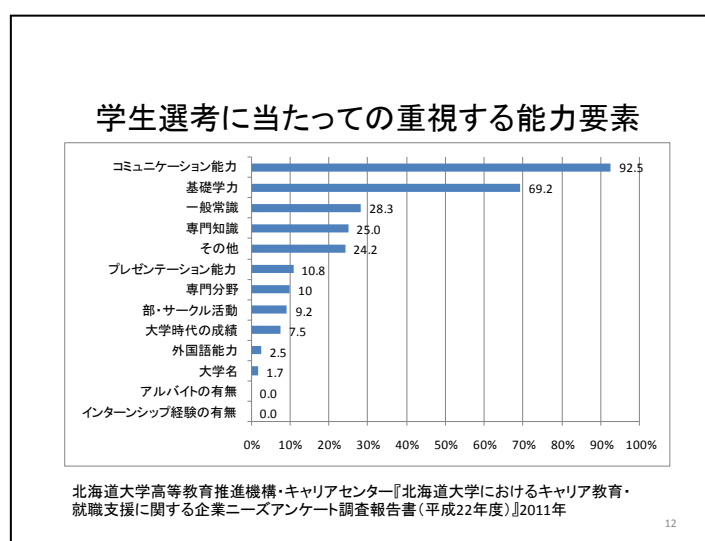
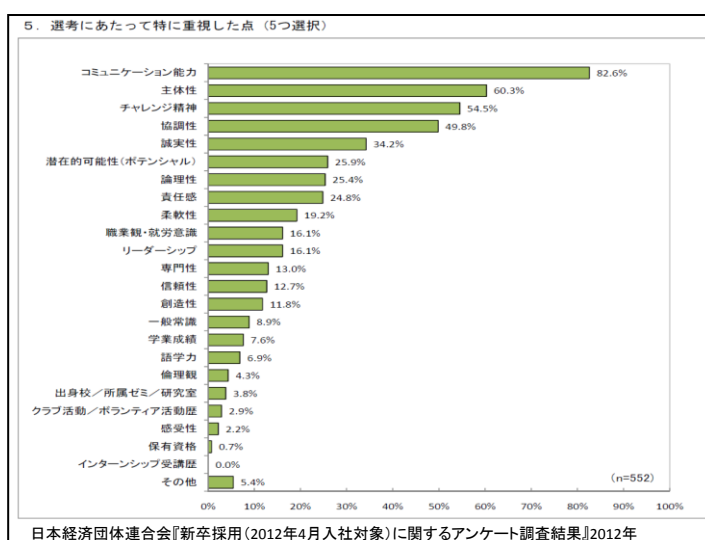
8

このスライドは、社会人基礎力っていう先ほど申し上げました経済産業省が言い出した概念です。資料にはその具体的な例示が 15 挙がっております。これまでの教育というのが、基礎学力、これは初等・中等教育で中心だったわけです。それから右の方の専門知識というのが、ある仕事をする上で必要な知識とか資格ということで、これは大学の教育の中で、例えばお医者さんになろうと思ったら、医学の知識が要る。弁護士になろうと思ったら、法律の知識やその資格が必要だ。これは分かりやすいのですが、そういったものだけではなく、どんな仕事をするにあたって必要なものとしてコミュニケーション能力とか実行力とか積極性とかが具体的に挙がっています。

それからいろんな経済団体などで、若い人、特に学生を採用する時に、どんなことを重視したのかという調査も実は数多く行われています。ここに挙げているのは、日本経団連の 2012 年の調査でございます。この一番上がコミュニケーション能力であり、学業成績というのは 7.6 パーセントで非常に少ない。上の方にいわゆる経産省のいう社会人基礎力であったり、ジェネリック・スキルというようなものが挙がっているということでございます。

これは数年前に北海道大学が北大の学生を採用している企業を対象にした調査でございます。1 番はコミュニケーション能力、基礎学力と一般常識、こういうものが続いています。

これらの調査結果から見て、コミュニケーション能力とか主体性とかチャレンジ精神などがあればいいのかと言われます。確かに必要だと思うのですが、これだけでいいのかという疑問が一つあります。もう一つよく言われるのですが、コミュニケーション能力と言われますが、実際どんなものなのかということです。特に就活しているような学生からよく聞く言葉なので、こういうものが重要だということは知っているけど、ではコミュニケーション能力をもう少しブレイクダウンすると



どういう力だと思いますかと聞くと、学生はまず話すのが上手と言うんですね。確かにコミュニケーション能力の1つではあるでしょうが、別にテレビのアナウンサーになるわけでも、お笑いタレントになるわけでもないで話すのが上手というだけでいいのかどうかという疑問があります。

知識基盤社会という言葉がございましたが、そうした社会の中でコミュニケーションを取るというのは、例えば人の話をしっかり聞かなければならないし、人の話をしっかり聞いて自分なりに頭の中でその考えをまとめて自分なりの意見を作って、それを分かりやすい言葉で相手に応じて論理的に話をするというということが本当は必要になり、その繰り返しになるわけです。そうすると話を聞く能力であったり、論理的に物事を考える能力であったり、それを分かりやすく発する能力であったり、本当はいろんな能力が必要になるのですが、1つのコミュニケーション能力という言葉で片付けられているので、非常に分かりにくいという面があるのではないかと思います。

問題提起の2が、能力をいつどこで形成するかということですが、1つは初等・中等教育という場所があり、それから高等教育という場所がある。高等教育の中でも授業もあるし、授業外というものもある。それからその中間的なものもあるかもしれません。それから仕事についてから職場で、ということもあるし、いろんな社会の生活の中で、ということもある。さらには、仕事に就いた後、また社会人としてどこかの教育機関、もちろん大学もあるでしょうし、別の所もあるかもしれません。このようにいろんな所で学ぶということがあると思います。先ほど言った、たぶん基礎学力のようなものは、初等・中等教育が中心となり、専門的な能力はたぶん高等教育の側面が非常に強いのではないかと思います。

では、先ほど言った、社会人基礎力やジェネリック・スキルというものは、どこでどうやってということを考える必要があるということでございます。特に大学と社会

【問題提起2】能力をいつ、どこで身につけるか？

①能力を育成する時期、場所

- ・初等・中等教育(小学校、中学校・高校)
- ・高等教育(大学)
 - ・授業
 - ・授業外
- ・職場
- ・教育機関(社会人として)

③考え方

- ・特に、大学と社会との役割分担をどのように考えるべきか？(【問題提起3、4】とも関連)
- ・社会に出てからできることは社会に出てからやるべきではないか(会社などで)？
- ・会社でもできることは大学ですべきではないか？(もっとほかにやることもある)
- ・大学でしかできないことを大学でやるべきではないか？

【仕事する上での重要な能力、不足している能力、北海道大学で育成すべき能力】

①重要であり、不足しているの、北海道大学で育成すべき能力

- ・「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」

②不足しているわけではないが、重要であり、北海道大学で育成すべき能力

- ・「分析的に考察する力」
- ・「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」

③重要度では上位ではないが、不足しており、北海道大学で育成すべき能力

- ・「外国語で書いたり話したりする力」

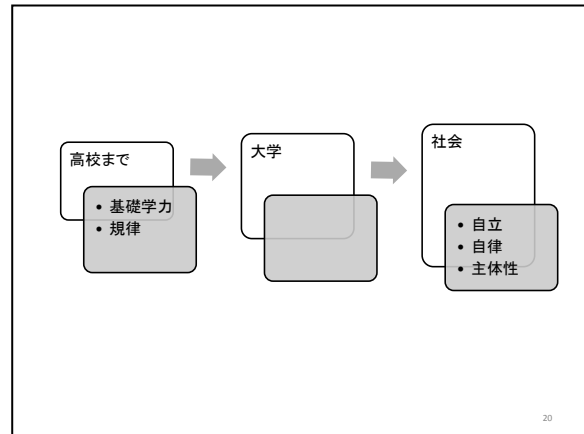
との役割分担をどのように考えていくべきなのか、ということが必要になってくると思います。私は社会に出てからできることは社会に出てからやるべきではないか。会社でもできることは、大学ですべきではないのではないか。もっと他に大学でやることがたくさんあるのではないか。それから大学でしかできないことを、本来大学でやるべきではないかというのが私の考えです。

これは北大の採用した企業に対して、「仕事する上での重要な能力、不足している能力、北海道大学で育成すべき能力」に関してアンケート調査を取ってみて、いくつか出したものです。北大でやってほしいというのものもあるし、重要だけど、これは大学でやる必要ないのではないかな、というものもいくつかあります。

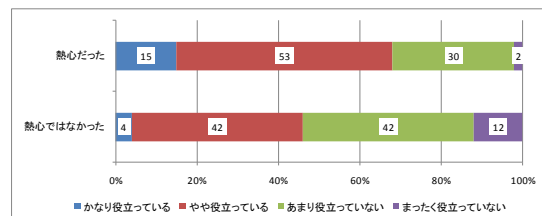
これはどういう考え方かという、実は高校までというのは、基礎学力をやり、比較的規律正しい生活をする。一方社会というのは、自立あるいは自律というものが重要になってくるし、仕事をする上でもいろんな主体性というのが重要になってくる。大学というのは、空欄にしていますが、この中間にある。私は、大学は社会への重要な移行期間ではないかと思っています。注意しなければならないのは、今高校までの教育の延長線上で大学の教育が行われ過ぎているというような、私は少し危惧もあるのです。これは前から意見が分かれるところで難しいのですが、そうした学生が一気に社会に出ていって、不適合を起こすというのは当たり前じゃないかなと思います。大学はこの移行期であるということも少し考えないといけないのかな、という問題提起でございます。

それから3番目は、大学教育は役立つのかということです。これはアンケート調査をやりまして、あなたが大学で学んだことが現在の仕事に役立っていますか、という北大の卒業生にやった調査です。

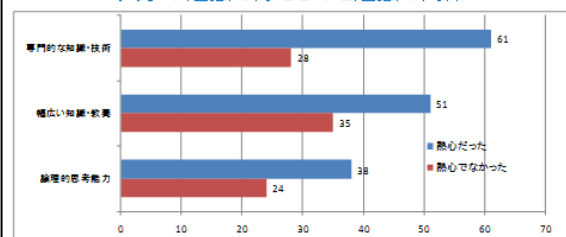
学部卒と大学院卒ではやっぱり違ってきます。これは当然ですが、意外と役立っているというのが多いですね。問題は、勉強



「勉強の仕事への役立ち度」と「勉強の熱心度」との関係



大学の勉強で得たものと勉強の関係



を熱心にやったというグループとそうじゃないグループを分けて見ると、熱心にやったというグループの方が役立っているという人が多いですね。つまりどういうことかという、勉強を熱心にやったという人が役だったと回答した人が多いということは、やっぱり何らかの形で役立っているのではないか見ることはできるのではないかと思います。それから勉強を熱心にやったという人の方が、専門的なものだけではなく、幅広い教養であるとか、論理的思考能力というのも大学教育で得たと答えている人が高くなっている。これも1つ大きな特徴かなと思います。ですが、卒業生調査から見た課題ということで、熱心度の違いとかこういうことがあるのですが、これらは意識調査なんですね。そうするとどうやって実際の能力が形成されたのかは本当は分からないのではないかと思います。例えばプロ野球の選手に、どうしてそんなに速い球が投げられるのですかと聞いた時に、高校時代の投げ込みがよかったからという人もいるだろうし、走り込みがよかったという人もいるかもしれませんが、本当のところは分からない。教育もこれと同じではないかなということです。

最後に、大学の教育の中でどうやって能力を身につけるのかということで、分かりやすいのは専門的な能力で、これは大学の授業かなと思うのですが、では、汎用的な能力、これも学生に聞いてみると、アルバイトが重要ではないかと答えます。確かにアルバイトもあるかなと思うのですが、例えば

コミュニケーション能力が重要と言った時に、コミュニケーション能力概論とか論理的思考能力基礎なんて講義はたぶんないでしょうから、ではどうやって身につけるのかというようなことですね。私はいろんな大学の教育の中で、例えばゼミで発表するとか、卒業論文を書くとか、また、今回のテーマであります、地域とのいろんな関わり方でこういったものは養われていくのではないかなと思っております。

こういった地域連携型の教育、産学連携型の教育、PBL、WIL（ワークインテグレイテッドラーニング）などで育成されるということがあります。それから他の手段との関係というものをやはり考えていかなくはない。従来の講義というもの、もちろんそれは不必要だとは思いません。問題はそれが代替関係なのか、補完関係なのかということです。代替だったら、講義をもうやめにして、こういうものをやろうと

【問題提起4】大学教育の中でどのような方法で身につけるべきか？

- ①専門的な能力
→大学の授業など
- ②汎用的な能力
→?????
アルバイト？
「コミュニケーション能力概論」？
「論理的思考能力基礎」？
- ③人間性など
→?????

地域連携型教育、産学連携型教育、PBL、WIL(Work Integrated Learning)と能力形成

- ・ 目的、効果
 - ・ 職業意識の醸成(中等教育との役割分担)
 - ・ 汎用的な能力の育成(他の手段との関係)
 - ・ 専門的な能力の育成(他の手段との関係)
- ・ 他の手段(講義、ゼミ、卒論など)との関係の考え方
 - ・ 代替か補完か？

ということですが、私は補完関係ではないかというかその地域と連携した教育というものと、従来型の講義というのをどうやって結びつけていくかということもしっかりと考えていかなければならないのかなという問題提起でございます。

その視点として目的を明確化するとか、相手側のメリットというものをどうやって提供できるか。お互いウィンウィンの関係にあるということが重要だということです。

少し時間オーバーしてしまいましたが、これで私の問題提起ということで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

地域連携型教育、産学連携型教育などを拡充するための視点

- 目的の明確化
- 他の手段との関連性
- 効果の把握
- 相手側(企業、自治体など)にメリットを提供できるか？

まとめ

大学で勉強したことは社会に出れば役立つ？

- 直接的ではない面もあるが間接的には役立つ

大学は就職のためにあるわけではない？

- 大学の教育は就職にも役立つ

分科会1 事例報告1 『学生を実社会で教育する実践とその意義』

佐野 雅昭（水産学部 水産経済学分野 教授）



始めにお断りをしておきますけども、今回私の経験を話してほしいということですので、あくまで私のケースを話させていただきます。「いや、それは違うよ」という方もたくさんおられると思います。私の考えを押しつけるつもりはございませんので、議論の材料として皆さんのまな板の上に載せていただければと思っております。

まず私は水産学部ですので、水産学部の話を始めに簡単にさせていただきたい。後で学部長から怒られるかもしれないですが、これは私の解釈です。水産学とは実学です。だから水産業の現場から遊離したような考え方、そういう態度を取ったとたん、我々の存在意義はなくな

ると思っております。社会に貢献する事で初めて我々水産学部は社会の役に立てる、社会貢献こそが水産学部の使命だろうと思っております。では、どうやったら水産学部が社会

に貢献できるか、というと「有用な人材の輩出」こそが我々水産学部の社会への最大の貢献だと思っております。もちろん研究というものもありますが、なによりそれよりもやはり人材育成が優先されるだろうと、うちの学部は考えています。ですから、そうした有用な人材の育成に役立たないような研究とか教育は教員の自己満足であって、そのようなものはプライオリティがどうしても低くならざるを得ない。やはり人材育成のところに「優先度」を置いた活動を教員はすべきだという風に思っております。

ここから先は私の個人的な考え方になります。先ほど水産学は実学だと申しました。だから人材育成をやらなければならない。では人材育成とは何か。端的に言うと、入学してきた高校生つまり「子ども」をきちんと「大人」にしてやることだと考えております。「大人」にするということはすなわち「社会人」にしてやるということだと思います。「社会人」というのは何かというと、社会の中で有用である人物だと考えます。ではどういう人が社会の中で有用かということ、まずきちんとした賃金を得られるだけの「能力、スキル」があるという人。それからもう1つは、「社会貢献に対する意欲」がある人だと思っています。自分のために働くのではなく、やっぱり社会のために働くという意識を持って初めて「社

1. 水産学教育と産業現場との関係性

1. 実学である水産学は、水産業の現場から遊離した途端、存在意義を失う。
2. 水産学を通じて社会に貢献することが水産学部の使命である。
3. 水産業界への有用な人材の輩出こそが水産学部の最大の社会貢献である。
4. そうした人材の育成に役立たない研究、教育は教員の自己満足である。

会人」として有用になるんだと私は思っております。

さて、そういう意欲のある人を作るためには社会との接点が必要ではありません。大学という特殊な世界に学生を隔離していたのでは、現実的な社会への貢献意識など持ちようがありません。今私のやっている教育活動の中での社会との接点を考えてみると、大きく分けて3つぐらい

2. 教育における実社会との接点

1. 卒論研究：現実社会の中から問題意識を発見し、社会的意義のある具体的研究目的を設定し、現場での実態調査から目的に接近し、その成果を現場にフィードバックする。
2. 現場体験：将来の就業に関わる現場で、可能な限り長く、多様な体験を積ませる。
3. 実習：食料の生産から消費まで、フードシステムを俯瞰できるような現場を体験させる。

あるように思います。1つは卒論なんですね。卒業論文はもちろん大学の講義を受けてきた中での最終仕上げの段階ですが、その最終仕上げ段階では現実の中から問題意識を見つけてきて、社会的意義のある研究目的を設定しろと指導しています。それはアカデミックでなくていいんです。社会の中に自分なりの問題を発見し、その解決に役に立つ新しい事実の発見や解決策の提案を研究の目的として設定させます。そして現実の実態調査から問題の深層を明らかにして、そこで分かった事や分析結果を現場の産業界にフィードバックしなさいと言っています。こういったことを全ての学生に要求しています。

それから2つ目は現場体験で、これは卒論でもなく講義でもなく、ただただ学生個人の自発的な行為として現場体験をどんどんしろということです。自分が将来就くであろう水産業界・食品業界の現実を大学在学中からしっかりと感じ取り、現場を理解してほしいのです。多様な経験を積ませるという事を常々意識をして、産業の現場に学生を送り込んでおります。

3番目は実習です。実習は授業科目なので、カリキュラム上にキチンと位置づけられシラバスまで客観的に定められた教育ツールです。実は先の2つ、卒論と現場体験というのは、それぞれの学生が自分自身の興味、自分自身の将来の進路等に応じて、オーダーメイドで内容を選び取っていきますが、実習は授業科目ですからみんな同じ内容を経験します。なので、これは誰にとっても意義あるものとなるように、なるべく幅広く、食料生産の生産から消費まで、フードシステム全体をきちっと俯瞰できるような現場やメニューを選び、体験をさせるということを心がけております。

これは卒論調査の風景です。こういうふうに皆さんそれぞれの興味、関心を、あるいは将来の職業として選んだものにつながる現場を選び、現場に入り込んで実社会の人々から学んでいきます。

次に2番目の現場体験を積ませるということです。この疲れ切った顔をしているのが学生です。これは長崎県松浦市の松浦港です。日本を代表する大中型まき網の水揚げ港でアジやサバの水揚げが日本でも最大クラスの巨大な水産物水揚げ港です。毎日夜中の1時から2時からずっとこうやっておばちゃんたちがサバの仕分けをしているわけですね。こうい

う過酷な労働現場があって初めて、我々は日常生活で何不自由なく水産物が食べられています。しかしこういった現実、水産学部生であつても普通に大学で生活していただだけでは全く理解できません。現場の凄まじさ、厳しさなどは経験しないと絶対理解できないのです。私の研究室の学生の4年生のうち何人かを、長いやつは1カ月間程度ここで研修させました。泊

まり込みですと働かせます。このおばちゃんらに交じって働くのです。彼らはそういう生産現場の、言ってみれば一番厳しい3Kのところを経験します。この学生はニチレイという水産物流通では有力な企業に就職しました。彼は今、アラスカのカニや筋子の買い付けなど、グローバルな仕事をしています。もちろん生産現場には行きますが、こういう労働者を使う立場になります。大学を卒業して大きな会社に入ったら、絶対こういった現場は体験できないのです。大企業には、こうした現場を知っている人間はあまりいないのですね。やっぱり学生のうちに経験しておくことは大事なんです。こういう経験があるから、彼は現場の苦しみや厳しさ、労働者の気持ちを知りながら、彼らを正しく導き、共感を持って一緒に働くことができるのです。

もう一人の彼は丸紅冷蔵という貿易商社で、今はやはりアラスカのカニを国内に販売する業務を行っています。この時点で彼は商社に就職することが分かっています。だから彼は、商社という業種で働くためには、将来彼が扱うであろう水産物商品を生産している「現場」を知るべきだと思い、この研修に行きました。最も過酷な現場で、もうヘロヘロになるまで働いて、それでもよかったと言っています。そういう血の通った現場経験があるから、今いろんなことを幅広く見通しながら、しっかり働けるといふふうに言ってくれております。

これも現場体験なんです、研究室の学生をいろんなところに連れて行っています。彼らはもちろん自費で参加しています。これは甑島の定置網なんです、実際に網揚げの作業をして、それから漁獲物の仕分け、ピッキングも自分でやって、いろいろ手伝わされて、



3-1. 社会に出る準備

1. 企業は厳しい経営環境の中、少数精鋭型の採用を目指しており、即戦力を求める傾向が強まっている。
2. 企業が人材育成を担う時代は終わった。大学に対する期待は大きい、現時点では期待に応えられていない。
3. 学生気分が抜け、ビジネスパーソンになる準備と覚悟ができていない学生を企業は求めている。頭でっかちの浮き世離れした学生にポジションはない。
4. 厳しい現場を見つめ、**社会人となる覚悟を決める機会**

トラックに積み込んで出荷し、作業が全部終わったら最後は漁師さんと一緒に朝ごはんを食べます。5時から働いて、8時にやっと朝ごはんになるわけですね。こういう作業を全部体験します。これらの学生もそれぞれが将来水産業界で働くわけですが、将来こういう現場を知っておくという事が不可欠なんだろうと思っています。一番下、真ん中の女子学生は、マックスバリュという日本を代表する小売業において、全国で最年少の水産物バイヤーになりました。同期入社の中にはこうした生産現場を体験してきた人間などいないのです。しかしこの学生はこうした現場をいくつも経験しています。自分が生産現場のことを一番よく知っている。売る側に立ってもこの経験は自信になりますよね。

こうした経験から具体的に何をどう学んでいるのかは、正直よく分かりません。私は教育学者じゃないのでその理屈はよく分かりません。ただこういった経験をしない学生とした学生では、水産学あるいは水産業というものに対する感覚やビジョン、意欲が変わってくるとは感じています。よく言えば職業を通した使命感が身につくように思います。また現場を知っていることは自信にも繋がります。経験からしか学べない、身につかないことは必ずあるのです。

これも現場体験の写真です。これは長島町の獅子島というところで、漁協とタイアップして漁業者の家に分散して泊まり込み、そのお家の漁業を手伝いました。また漁協の青年部と協力して特産品作りを目指した干しダコ作りに取り組みました。これも大学のカリキュラムとは無関係です。大学からは何の支援もいただいていません。長島町役場の支援をいただいて研究室の活動として実施しました。こうした現場体験というものは大学の制度や教育カリキュラムには乗りにくいのです。

それからこれは3番目に挙げた実習の風景です。水産経済学調査実習Ⅰという名称の実習科目です。「日本一おいしい青島女性部のカマボコ」と書いてあります。長崎県松浦市に青島という小さな島がありまして、その漁協の女性部が作るカマボコが、僕は日本で一番おいしいと思っているんです。それを実際に漁家のおばちゃんたちと一緒に自分たちで



大卒学生は就職しても現場作業に従事しない。しかし管理者として活躍するためには、厳しい現場の感覚は不可欠である。

3-2. 将来の社会貢献に繋がる財産

1. 産業現場の理解によって、**産業構造の全体観**や**正しいビジョン**を獲得できる。
2. こうした経験は、水産業界で活躍し、社会貢献を果たしていく上で、有益である。
3. 即戦力として期待できる人材育成が可能となる。
4. 就業先選択の大きな指標となりうる。
5. 働く意欲を示すキャリアとして評価される。

座学で学んだ知識と組み合わせれば、驚くほど理解が進む。

作ってみよう、ということで実習を組みました。漁家に泊まり込んで、漁業も体験して、一緒にご飯も作って生活をして、カマボコも作りました。最後のお別れではこうやってテープ投げて送 ってくれます。

こうした経験を通じて産地の暮らしやそこで生活している人の気持ちが理解できたことは、学生が就職した後、水産人として成長していく上で基盤になるものだと考えています。

それから実習や卒論では、なるべく現地で発表をやらせるようにしています。漁業者や地元自治体などに来ていただいて、学生が自分たちの考えたことを発表します。非常にきつい質問が、こういう大人から飛びます。教員が言うのとはもう全然厳しさが違います、やっぱり現場の人が学生に直接厳しい意見を言うと、学生はガツンと頭を叩かれるわけです。本物の大人、大学という甘い世界じゃない外の世界の見知らぬ大人からガツンと叩かれて一皮むけることを期待しています。逆にこの地元の人

たちも、学生との交流に大きなものを期待しておられます。生産現場は外部の社会との交流が盛んではありません。えてして閉鎖的になりがちです。そこで、こういう学生ならではのフレッシュなアイデアを聞く機会があると、刺激があつてよかったと大変喜ばれます。ぜひまた来てほしいといつも言われるのです。毎年でも来て欲しいと。

もうあまり時間がないので、面倒くさい話は飛ばします。これまでお話ししてきたような社会との接点は、煎じ詰めれば社会人になる覚悟を決める機会だと私は思っています。

子どものまま社会に出てほしくない。きちんと覚悟を決めてほしいと常に願っています。学生同士のコミュニティは子供同士の甘い付き合いです。教員も大して変わりません。でも現実の社会は厳しく、それぞれの大人達が生活をかけて毎日生き抜いています。そうした実社会に触れることで、自分もそこで働くのだ、この人達と一緒に社会を作っていくのだ、という覚悟が産まれるのだと思います。現実から逃げず社会にキチンと向き合ってい

3-3. 人間的な成長の契機

1. 全く知らなかった世界を中から見ることで、世界観が変わり、**視野が広がる**。(海外留学と似た効果がある)
2. 生身の人間の労働現場を知ること、文字情報や統計的数字としてしか知り得なかった社会の血の通った現実を理解できる。
3. あらゆる職業、社会人への敬意を持つことができ、**働くことへの意欲が強まる**。

大学では絶対に学べないことが実社会にはたくさんある！



く、そういう覚悟を決めるには現場体験がいいのではないかと考えています。また現場を知ることでは産業構造の全体観やその正しいビジョンが描けるのです。教科書とか大学の研究室で学ぶ事だけでは、正しいビジョンというのは実業界に対しては絶対に描けない。学んだだけで経験していない、働く人達の気持ちを肌で感じていない頭でっかちの間は、実業界では役に立ちません。

人と接する経験からしか学べないものがたくさんあります。視野が広くなるということですね。水産学が実学である以上、現場の体験は絶対に必要だと思っております。

同時に学生に接してくれる相手方に対してもおそらくプラスの効果があると思っています。そういう事は相手方からよく聞きます。でもこれは本当のところは私には分かりません。分かりませんが、私はそう感じてはおります。

最後に結論ですが、お分りの通り、私はどんどん学生を社会に出して学ばせる事が必要だと思っています。だから実践しているのです。学生は研究者ではないのです。大学の中だけで教員だけから学んでいても、そんな学生は社会の役に立たないでしょう。覚悟も産まれてきません。教員個人の価値観を押しつけてはならない。むしろ学生個人個人の価値観の形成を支援してやる必要がある。

そのためにもドンドン社会に出すべきだと思います。

研究者の卵をどんどん作るのが我々の、水産学の役割ではないと思っています。と同時に、教員ももっと社会に出ていけ、と私は思っています。結局ここなんです、一番言いたいのは。「社会性のない学生は社会性のない教育現場から生まれる」、これが言いたいのです。社会性に欠ける学生が産まれてくるのは何も学生だけの問題ではなく、教える側の教員の問題も大きいのではないかと。そこで教員自身も普段から社会との接点を作ることを心がけ、社会に目を向け視野を拡げた方が良いのではないかと、というのが私の今日の報告の結論でございます。

どうもありがとうございました。

3-4. 現場との体験の共有

1. 学生と現場で働く人々が交流し、同一体験を共有することは、**双方に強い知的刺激**を与える。そこから新しい何かが産まれる可能性がある。
2. 交流が持続し、相互に有益な人脈となるだけではなく、人生の財産となる可能性もある。
3. 双方は必ず同じだけのものを受け取っている。学生がどんどん社会に出て学ぶことで、社会も同じだけ学ぶことができる。遠慮はいらない。

社会は大学が出て行くのを待っているのではないか。

4. まとめ

1. 学生をどんどん大学の外に出し、学ばせるべきである。大切なことは、経験からしか学べない。学生は研究者ではない。教科書と実験室そしてネットで学んだものは実社会で役に立たない。
2. 教員もどんどん大学の外に出て、実社会と接点を持つべきである。社会貢献の意識のない教員が、良い社会人の候補を育成できるはずがない。

社会性のない学生は、社会性のない教育現場から産まれる！

分科会1 事例報告2 『建築学科のインターシップ等』

澤田 樹一郎 (大学院理工学研究科(工学系) 建築学科 准教授)



建築学科の澤田です。インターンシップ等の事例報告ということで、今日は話させていただきます。

インターンシップは建築学科では、授業科目としてインターンシップというのがあるのですが、選択科目になっています。で、去年、私がその担当教員となっていましたので話させていただきます。

その前に建築学科では、どういう事を学ぶかということですね。それと建築デザインというのを主に学ぶのですが、それに要求される条件というのをちょっと最初に話をしてから、インターンシップの話をさせていただきます。

建築デザインの場合には、要求される条件としては安全性、具体的には耐震・耐風・耐雪安全性、そして機能性、動きやすい動線計画、人体寸法の適切な考慮などです。それから快適性、つまり住環境や環境、設備などです。そして施工性、これは建物が実際に建てられるかどうかです。意匠性、デザイン性ですね。それから経済性と地球環境にやさしいかとか、いろんな要求条件があります。そしてそれらの条件が互いに競合する場合もあって、そこが難しくて建築の面白いところだと思います。そのいずれの条件も合格点となることが望ましくて、バランスのよい設計が望まれる一方で、特徴も出さないといけないということが望まれています。

そういう多岐に渡る条件がありますので、建築学科の授業科目として

建築デザインに要求される条件

- ・安全性(耐震・耐風・耐雪安全性)
- ・機能性(動きやすい動線計画、人体寸法の適切な考慮)
- ・快適性(狭義の意味での建築環境、設備)
- ・施工性(施工可能かどうか)
- ・意匠性(その場所・用途にふさわしい外観・形状か)
- ・経済性(費用は妥当なものか)
- ・環境性(地球環境にやさしいか)

要求されるそれぞれの条件は、互いに競合する場合も。

いずれの条件も合格点となることがのぞましい。→バランスのよい設計

建築学科卒業後の進路

卒業生は、以下の分野をはじめとして多方面で活躍しています。

- ・建築設計(建築設計事務所、建設会社の設計部など)
- ・施工管理(大手建設会社など)
- ・建築行政(県庁、市役所など)
- ・専門技術(建築設備、材料関連会社など)
- ・企画、開発(コンサルタント)

また、卒業生の約半数が大学院に進学

も非常に多岐に渡っています。設計の演習や建築計画、建物の部屋の配置などですね。それから建築環境・設備、建築の構造、構造の安全性、それから建築生産など多岐に渡る分野があります。従って建築学科の卒業後の進路としても、建築分野の中で非常に多方面の分野になっています。建築設計、設計事務所、建設会社の設計部ですね。施工管理（大手建設会社）、建築行政、県庁、市役所などもあります。それから専門技術、建築の設備とか材料関連会社など、企画と開発コンサルタントなどです。そういうふうに多岐に渡っています。

そこで、そういう事から実際に企業や社会とかの接点のある建築学科の行事としては、最初に新入生のオリエンテーション行事があります。今年の建築学科の新入生のオリエンテーション行事では、現場施工計画です。それからあと建築ナビというのは年1回、各分野の建築学科のOBを招いて、仕事内容について講演してもらうとか、それから3年次のインターンシップです。これは選択

科目なのですが、インターンシップという授業科目があります。建築学外実習は、関西方面への建築学の研修旅行です。そういうのを行って、それでこの際にも現場見学とかを開いたり、それからOBの方との懇親会、そんなのを開いて話をしたりしています。

まず新入生のオリエンテーションの行事では、現場見学とか実際の建物の見学とかを行っています。あと今年の4月であれば、鹿児島市の新市立病院で、この鹿児島大学の近くに敷地がありますね、その現場施工の見学会を行いました。この写真は、現場施工見学の鹿児島市立病院の完成パースですけど、まだ建物は建っていません。現在が基礎工事の段階で基礎工事の見学会を行っています。これは現場所長による工事概要の説明の写真です。現場施工の見学をしているところです。

それから建築ナビというのを、先ほどもちょっと説明しましたが、建築学科のOBを招いて仕事内容について講演をしています。卒業生の方々に2010年や2011年にこのように

企業との接点のある建築学科行事

- ・ 新入生オリエンテーション行事(1年次)
- ・ 建築ナビ(年一回各分野の建築学科OBを招いて、仕事内容について講演をしてもらう。)
- ・ インターンシップ(3年次)
- ・ 建築学外実習(関西方面への建築見学研修旅行)(3年次)



仕事内容について講演していただくというのを開いています。

そして建築学科のインターンシップですが、これは学生に説明会で説明するための資料の1つです。建築設計事務所や建設会社などで設計実務体験を得るためのプログラムですと学生に説明します。学生を受け入れる制度としては、鹿児島県というのは、鹿児島県インターンシップ制度や日本建築家協会のオープンデスク制度等があります。

建築家協会のオープンデスク制度というのは、ホームページがありまして、ここに受け入れる建築設計事務所の受け入れ事務所一覧というのがありまして、ここから学生が希望を出して、自ら応募するというものです。これは学生に説明する資料でインターンシップの目標などについて説明します。

ここで重要な事は、やはり大学で学ぶ事ができないところを現場で実習・経験するというのが重要な事だと思います。ちょっと繰り返になりますが、実習の受け入れの制度や、鹿児島県のインターンシップ制度、それから建築家協会のオープンデスク制度、それから市役所のインターンシップ制度なども利用しています。それで希望する学生が希望して申し込むということになります。

インターンシップの昨年の実績ですが、建築学科では設計事務所が11名、ここに書いているような実習内容を実際にしています。あと鹿児島市役所です。鹿児島市役所であれば、都市計画部内7課および建築指導行政に係る3課の業務の説明を受け、現場体験の研修をしています。そして材料関連で1名、自ら申し込みしています。このように希望を申し込んで、企業にアプローチしてインターンシップの実習を行っています。あとは住宅関連、3名です。

インターンシップでの目標

- 1) 構造、計画および環境の授業で学んだ事が、実社会でどのように活かされているかを理解すること
- 2) 日頃の学習で足りないところを見出し、今後の学習に活かすこと
- 3) 大学では学ぶことができないことを現場で実習・経験すること

建築学科インターンシップ昨年実績

主な実習先(昨年人数)	実習内容
建築設計事務所(11)	CAD図面データ化、ポートフォリオ作成、模型製作、CG作成、施主さんとの話など
鹿児島市役所(6)	都市計画部内7課および建築指導行政に係る3課の業務の説明を受け、現場体験の研修
建材関連(1)	建築物件視察、外装スケッチ、CADなど
住宅関連(3)	ウッドデッキに置くテーブルとチェア的设计、現場見学、住宅ラフプランの作成、住宅プラントレース

インターンシップの学生に感想を書いてももらったところ、まず1つ目は、模型や図面の説明をしながら施主さんと直接話をしたという経験が大きかった、という話です。実際に大学の学内の設計製図の課題というのは、実際の施主さんはいないので、教員が施主さんの代わりということになりますが、この施主さんに実際に直接話をするということが非常に重要だという事を、

この学生は感じたわけです。この段階がいかに大事かという事を実感したと。あとは、コミュニケーションのやり取りで仕事の深さが変わってくると感じた。それから他大学の学生との交流もあり、自分の建築に対する意識の低さを感じた。これもやはり学内では経験できない事だと思うので、重要な事だと思います。それから大学では自分の設計した建物の模型制作だが、今回他人の設計した図面からの模型制作を初めて体験したということで、難しさや面白さを感じた。このようにたくさんいろんな感想があるのですが、その中からいくつかピックアップしてみました。

インターンシップのメリットとしては、学内で学べないことを学べることです。コミュニケーション、これは施主の存在です。それからCG、CGはいろいろあるのですが、他大学の学生との交流とかですね。それで建築学に対するモチベーションも上がってくるといことです。

インターンシップの建築学科としての課題としては、受講希望者のうち何割かは受け入れ先が見つかっていないということです。昨年度25名が受講希望だったのですが、5名見つかっていないということで、そういう事が課題として挙げられています。

以上事例報告をさせていただきました。

インターンシップ学生の感想など

- 模型や図面の説明をしながら**施主さん(注文主)と直接話をした**。どれだけ、この段階が大事なのか実感した。コミュニケーションのやり取りで仕事の深さが変わってくると感じた。
- **他大学の学生との交流もあり**、自分の建築に対する意識の低さを感じた。
- 大学では、自分の設計した建物の模型制作だが、今回、**他人の設計した図面からの模型製作**を初めて体験。難しさや面白さを感じた。

まとめ

- **インターンシップのメリット**
学内で学べないことが学べる(コミュニケーション、施主の存在、CG、他大学学生との交流)。
建築学に対するモチベーションが上がる。
- **インターンシップの課題**
受講希望者のうち何割かは、受け入れ先が見つかっていない。(昨年度25名中5名)

分科会1 事例報告3 『離島をフィールドとした地域医療実習』

大脇 哲洋（大学院医歯学総合研究科 離島へき地医療人育成センター教授）



医学部の地域医療学分野の大脇です。

スライドは加計呂麻島の南の与路島の写真です。サンゴで作った石垣に棒が何本か立てかけてありますが、これは「用心棒」といって、石垣の間にハブが潜んでいる場合があるので、そのハブを叩き、排除するための道具であります。こういった、他と異なるところに医学部の学生を実習として送っており、そして住民と接してもらおうという取り組みもしています。

まず鹿児島県の医療事情を簡単に説明しますと、当然東西に広いことは皆さんご存知かと思います。南は与論島まで鹿児島県の中にありますし、鹿児島県本土からこの与論

島までには、40名ぐらいの人数しか住んでいない島々もあります。もちろんこうした所は船でしか行きません。越したところにも医療を届けることを考えなければならないのは鹿児島県の特徴です。

その広さは、ちょうど東北に匹敵するところで、ここに医学部は鹿児島大学1つしかございませんので、私たちはここを大きくカバーしないといけないということになります。

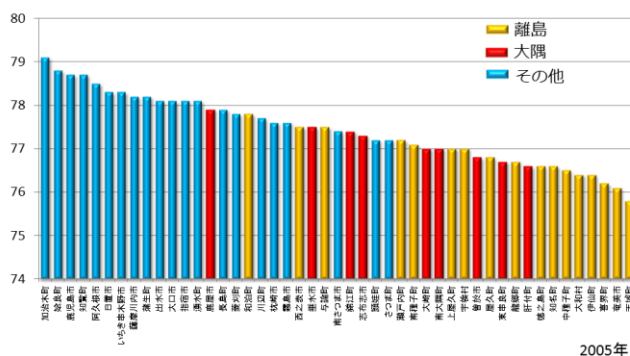
これは鹿児島県の平均寿命短く、決して長寿ではありません。鹿児島県の男性の平均寿命は33位（2005年は43位）、女性は27位（2005年は29位）です。また、市町村別にみた平均寿命では、大隅と離島の地域が、加治木町（当時）や鹿児島市あたりの地域と比べますと、男性では2年以上短くなっています。離島へき地では一次産業が多いなどと、いろいろな原因はあるでしょうけれども、

鹿児島県の現状(地理的特徴)



地域格差

鹿児島県市町村別平均余命(男性)



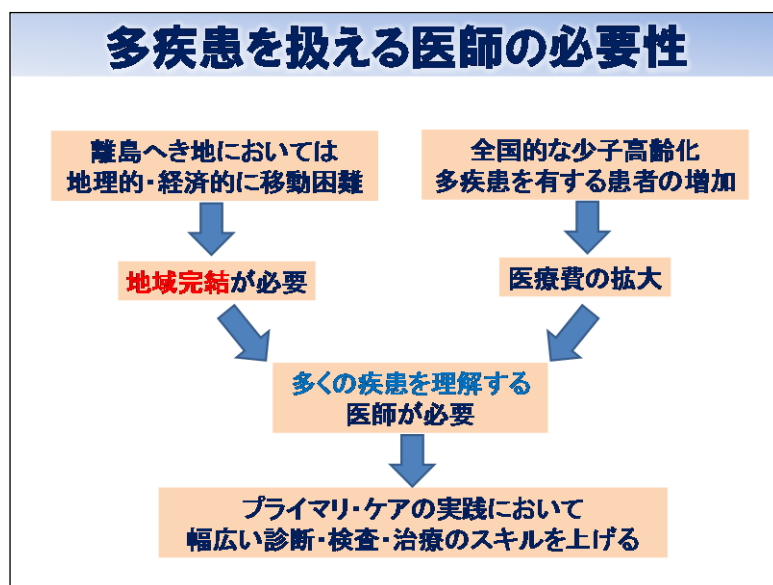
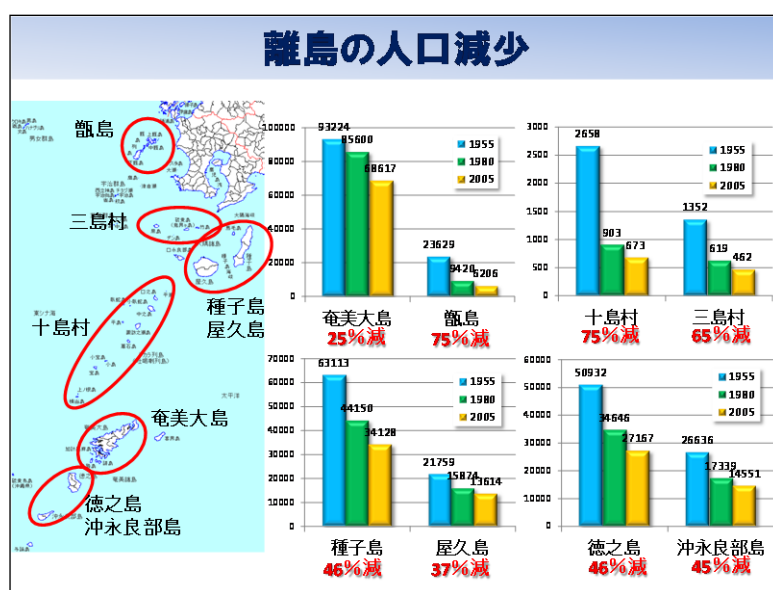
2005年

少なくとも地域格差があります。これは鹿児島県だけの問題ではなく、長崎県でも同様に、離島の住民の平均寿命は男性では他の地域に比べて短いようです。

また、鹿児島からは特に遠い宝島（トカラ列島：十島村）になりますと、アクセスを待ち時間ゼロとしても13時間かかります。近くの島々は40人から100人ぐらいしか住んでいないので、医師を置くわけにはいきません。少し高度な医療を受けたいならば、13時間かけて鹿児島市まで来ないといけないわけです。しかも平均所得も鹿児島市のだいたい2分の1から3分の1程度。こういった平均所得の非常に低い、経済的にも厳しい、そして地理的にも遠い所から医療を受けに行かないといけないということです。こういった厳しい事情の所に医療を提供しないといけないのが私たちの使命です。

それから重要なのが人口減少です。甬島とか三島村、十島村では、この50年で4分の1しか人口が残っていません。全体で見ましても、離島の人口は非常に減っています。もう1つ全国の動向としまして、皆様、80歳以上の人口を見ますと、この30年の間に増えている事は皆さん認識していると思います。後さらにこの80歳以上の人口は今後2040年まで増えてまいります。そういう人たちはどう

いったバックグラウンドを持っているかと言いますと、年々だんだん持っている疾患数が増えています。65歳以上は特に増えています。同じように、これは1人当たりの受診診療科数も年々65歳以上になると増えてきます。つまり老年人口が増えてくる上に、診療する科も増えてきます。非常に医療費も増してきます。加えて鹿児島県の場合は、地理的、経済的に厳しい地域が多く、できるだけ地元で医療を完結させてあげないと住民が非常に困るということです。こういったところでは、多くの疾患をできるだけ少ない人数の医師で診る必要性が増し



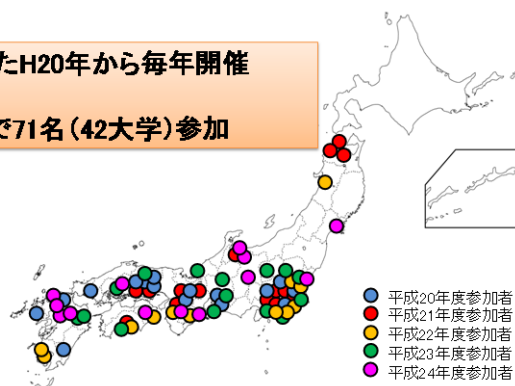
てきます。多くの疾患を診られる医師が求められているのです。もう一方で、高齢化が進みまして、1人1人の疾患数も増えてきますと、できるだけ1人の医師が多くの疾患を理解するようにしていかなないと、医療費がいくらあっても足りないということになります。この2つの面から、幅広い診断、検査、治療のスキルを持った総合医的な者を育てることも必要ということが言えます。ただしその一方で、当然ながら高度な医療をするには臓器の専門医も要ります。そこで鹿児島大学としましては、総合的な診療ができる医師の育成も大事ですけども、またこういった総合診療のマインドを持った専門医を育成していくことによって、地方での地域医療が提供できるのではないかと考えています。こうした実際の離島へき地での医療や、在宅医療など、大学ではできないような医療を地域に行って体験してもらおうという活動をします。

それから、そうした行動を鹿児島大学だけではなく、全国にも広げています。現在、去年の夏までに、42大学 71名の医学生を呼んで、鹿児島県内の離島で実習してもらってます。更に、鹿児島大学には医学部の他にも保健学科それから歯学部がありますが、その3つの科合同で始良の北山地区という山間部の里山と考えられる所があり、そこを舞台にして、住民と接してもらって医療を体験してもらうという体験型実習をやっております。

全国公募医学生離島医療実習の実践

赴任したH20年から毎年開催

5年間で71名(42大学)参加



多職種合同実習の実施



北山地域医療トレーニングキャンプ
鹿児島大学
医学科・保健学科・歯学部合同実習
H21年から毎年開催(4回開催)
医学科 27名
保健学科 24名
歯学部 16名 計67名が参加

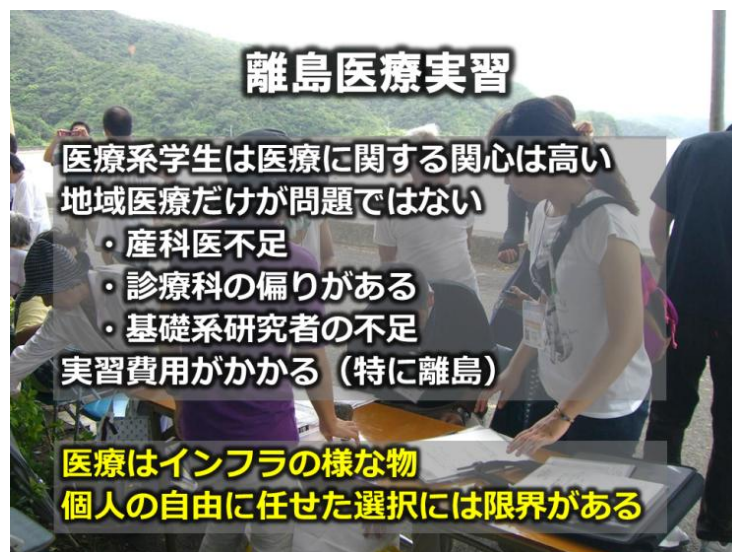
・里山の生活を知る
・その医療状況を体験する
・他学部を知り、横の連携を創る



最後ですが、医学部というのは専門学校みたいなところでは、ほとんど皆同じ職業に就きますし、教えている者と教えられている者が同じ職場で、卒業後も働くわけです。他の学部の学生とはその点は異なります。もちろん医学部の学生は医療に関する関心は高いです。今回は地域医療を問題にしましたが、その他に産科医、外科医、一般内科医は不足しているといった、

診療科毎の差の問題があります。それから基礎系の医師が少なくなっているのも皆さん知っていると思います。医療というのは、道路とか橋、上下水道などと同じよう生活に欠かせないインフラ的なものです。インフラ的なものなのに、医学生とか医師は個人の自由で、どこでも医療をやってもいいし、どこの診療科の医師になってもいいのです。地域差や、診療科の就労人数の差が出てくるのは当たり前です。そこで、医学生の十分若い時から、実際に地域に出て行ってもらって、きつく見える仕事でも楽しいこと、やりがいがあることを実感してもらおうと思ってやって地域医療実習を行っております。

御清聴ありがとうございました。



分科会 1 1 班

論点：学生と地域社会がつながる各々のメリット、デメリット

ファシリテーター：牟田京子



宮下巧大



内村傑



宮下正昭



牟田京子



中村達哉



上橋孝幸



佐野雅昭

ワークショップ記録

分科会1 1班 (混合チーム)
論点：学生と地域社会がつながる各々のメリット、デメリット
ファシリテーター：牟田京子（モノづくり工房“響”代表）
メンバー：佐野雅昭（水産学部教員） 宮下正昭（法文学部教員） 中村達哉（大学院理工学研究科（工学系）技術部 生産技術系職員） 上橋孝幸（大崎町役場企画調整課職員） 宮下巧大（大崎町役場企画調整課職員） 内村傑（農学部学生）

【1】課題

学生を学外へ連れて行きたい。

地域へ行きたいが、つながりを持っている人がいたりいなかったりと差がある。

学生のモチベーションの差がある。教師の負担が大きい。

学内での情報共有ができていない。社会貢献の意識を持たせるには？

制度を作っても意識がなければ無意味。

大学は知識・スキルは教えられても社会貢献意識は教えられない。体験の中で見つけていくものであるがゆえに地域とつながれる環境を整えていく必要がある。

【2】重要な点

学外へ行くことを義務化することによって、学生の興味が失われる可能性がある。

やる気のない学生を引率する教員の負担が大きい。

制度化する必要があるだろうか？

費用がでるとなればありがたい半面、報告が義務付けられるなど教師の負担が増えるのであれば現行のままでも構わない。生徒のためにやっているわけだから。

【3】具体的な提言

大学は他学部・地域などと連携を図りたいと思っても「どこに・誰に」アポイントを取ればいいのか？と疑問が起こる。自治体や地域の人々も大学とつながりを持ちたいと思っても情報が無い。生涯学習センターが地域と大学を結ぶ拠点となり、情報の一元化を図ればいいのか？ホームページに情報を掲示するなど。もしくは窓口を設置する。

生涯学習という名称だとリタイヤした人のイメージを持ってしまう。(本来の意味とは違っていたとしても) 変えた方がいいのでは? もしくは愛称的なものを付ける。(地域貢献センター・地域連携研究センターなど)

分科会1 1班の報告

論点：学生と地域社会がつながる各々のメリット、デメリット

牟田 京子 (モノづくり工房“響”)

1班の方では、テーマの方が学生と地域社会とつながる各々のメリット、デメリットという点で話し合いを行いました。

1班では地域にいらっしゃる方や学生さん、学校の先生等がメンバーとなる複合チームとして話し合いをさせていただきました。その中に学生さんが学外に行くというお話が出てきたのですが、メンバーの中に実際に学外へ行っている学生さんもいれば、引率をされている先生もいらっしゃいました。しかし、それが制度化になった場合、魅力を感じなくなるというお話も。制度化することで引率しなければならないということになると、モチベーションが低い生徒さんを連れて行くということになり、それは先生にとっては労力になってきたり、責任問題になってくるというお話が出てきました。また地域の方にとっても、できればやる気がある学生に来てほしいというのがあり、そこをどうやって埋めていくのかというのが大きな問題点になるのではないか、ということでした。

そして最後、具体的な提言ですが、こちらに関しては、例えば地域の方が地域に来てくれる学生さんを紹介して欲しいと思ったとしても、どこに言っていかが分からないと。つながりがある先生がいれば、その先生に直接言えるのですが、つながりを持っていない方はどうしていいかわからないので、情報共有とマッチングができるような部署があればいいのではないか、という意見が出ました。

また、例えば生涯学習憲章というと、一般にご老人の、リタイヤされた方々の学びというイメージが想定されてしまうので、この名称を俗称のような、地域の方々が受け入れられるような名称にするなどした方がいいのではないかというご意見も出ました。以上です。

分科会 1 2 班

論点：学生を実社会で教育させることの難しさ

ファシリテーター：李 哉ヒョン



佐藤友昭



小林哲夫



土田 理



大前慶和



塩屋晋一



李 哉ヒョン



藤田志歩

ワークショップ記録

分科会1 2班 (教員チーム)
論点：学生を実社会で教育させることの難しさ
ファシリテーター：李 哉ヒョン（農学部教員）
メンバー：佐藤友昭（大学院医歯学総合研究科教員） 小林哲夫（大学院理工学研究科（理学系）教員） 土田 理（教育学部教員） 大前慶和（法文学部教員） 塩屋晋一（大学院理工学研究科（工学系）教員） 藤田志歩（共同獣医学部教員）

【1】課題

大学とコミュニティ（もしくは受入れ組織・機関）との関係づくり：受入れ先と大学が互いに理解する。

※教員個人ベースの関係づくりに留まっている

予算の確保、予算の執行。

リスク対応（安全事故、保険）。

サポート体制（バス・手続き・学部生の位置づけ）。

【2】重要な点

鹿児島らしさを、現場教育を有効活用すべき。

※現場＝鹿児島ということではない

分野によって意義・成果は異なる。

学生を（実）社会に輩出することの意義を考えるべき※実社会の経験が重要

その意義は分野によって多彩であることを認識すべき。

教員へのインセンティブ（多様性を認め、勇気づけることが重要）。

【3】具体的な提言

個人ベースの活動とカリキュラム上のプログラムを区分して議論する必要がある。

組織的な取組みの可能性の検討と環境整備への取組み。

トップダウンかボトムアップか。

鹿児島らしさを考えると現場は有効活用すべき。

教育研究分野によって異なる経験、視点。

分科会1 2班の報告

論点：学生を実社会で教育させることの難しさ

李 戡ヒョン（農学部 生物生産学科 准教授）

では分科会1の第2班の報告をさせていただきます。本班では実際に実社会と関係結んで教育に携わっている先生にお集まりいただき、議論をしました。まずその報告様式に沿って言えば、一つ目の論点として、個人ベースで活動するケースと通常のカリキュラムの中のプログラムとして行われている、二つのパターンがありましたが、カリキュラム上の教育プログラムに実社会を取り込むに当たっては、様々な制約があることが確認できたということです。

二つ目は、これらの教育と連携した現場活動に組織的な取り組みが果たして可能なのか、もしくは必要なのかということを検討しましたが、その必要性は認識されているものの、それを可能とするサポート体制と言いますか、環境整備というのが必ずしも十分に整っていないということです。なお、組織的な取り組みにおいても、教員個々人に加え、これまで経験を積んできた、現場の方々との連携が重要であることも確認できました。

いずれにせよ、最も重要な論点としては、鹿児島大学という立地的特定性を前提とすれば、現場としての鹿児島（それが社会であれ、自然であれ）は、学生にとっても、教員にとっても有効に活用すべきであり、その活用を提供するのが現場学習であるということです。

一方、課題＝提案に関わるのを先に申し上げます。まず、現場教育、実社会というのが、鹿児島に限定されては困るということです。専門分野によっては、現場は世界を意味する場合もあり、またフィールドが複数の地域や国に広がるケースがあるからです。要するに、実社会とか現場とは、教育研究分野によっては、その対象や分析方法などが大きく異なることを、予め理解することが大事ではないかということです。

本学の卒業生の輩出先は、理論上の社会もしくは架空の社会ではなく、実社会であるという認識を強める必要があります、実社会で通用する学習や経験を積むプロセスは、大学の教育の中で必ず必要ではないかということが皆さんの共通の認識です。ただし先ほど申し上げましたように、その教育内容、意義、成果などについては、教育研究分野によって多様な捉え方があることに配慮すべきだということです。

それから皆様の意見の中では、様々な困難の中で現場活動を教育に取り入れている教員に対するインセンティブも必要ではないかという意見もありました。特に、研究論文数のみで測る教員評価の方法では、これだけ手間や時間のかかる現場教育活動への意欲が低下してしまいます。そこで、まず、現場教育の重要性を認め、できるだけ勇気づけるような教育システムや評価システムの整備・造成が求められていることを申し添えておきたい。

教員個々人が関わる悩みもありました。何より、大勢の学生を帯同して現場に出かけるためには、受け入れ先の確保が欠かせない条件です。この受け入れ先の確保をめぐっては、

常に実社会との関係づくりを求める姿勢が大事です。この地域社会との関係づくりは、個々の教員自らの取り組みでは限界があり、大学レベルの関係づくりを強化していかなければなりません。現在は、個人ベースで受入れ先の確保に一生懸命に取り組んでいる先生が多く、受入れ先の確保に大学による一定のサポートを期待する意見が少なくありませんでした。

現場教育は、コストやリスクを伴うものです。現場までの移動経費、滞在費、交通事故、作業・調査中の事故などがそのコストやリスクに該当します。現在の大学の体制は、なかなか組織的に、このコストやリスクに対応できるものではないというのが共通した意見でした。予算措置や保険の業務等、現場教育に対する大学の組織的な関与も必要ではなかろうかということです。ちなみに、土日にバスが使えない、学部生は教育を受ける立場だから、研究費の執行ができないなどといった、種々の制約も改善に向けて検討すべき課題であると考えます。

分科会 1 3 班

論点：学生にとって本当に必要な力とはなにか

ファシリテーター：伊藤奈賀子



山本 淳



伊藤 奈賀子



大脇 哲洋



山本 一哉



高山 耕二



大塚 作一



前田 晶子

ワークショップ記録

分科会1 3班 (教員チーム)
論点：学生にとって本当に必要な力とはなにか
ファシリテーター：伊藤奈賀子（教育センター教員）
メンバー：山本淳（水産学部教員） 大脇哲洋（大学院医歯学総合研究科教員） 山本一哉（法文学部教員） 高山耕二（農学部教員） 大塚作一（大学院理工学研究科（工学系）教員） 前田晶子（教育学部教員）

【1】課題

鹿児島大学の男子学生の元気がない。
地元志向が強い。
外の世界を知らない。
どうやってモチベーションを維持するか。

【2】重要な点

企業・地域・他大学など外部との接触により、外の世界を知り、自分の位置を知る。
また、早い時期に現場を知ることによって外の世界を知る。

【3】具体的な提言

現場との長い付き合いをするために、大学はサポートすべき（費用・カリキュラム）
自分はどう生きるかを、自分自身で見つける。（このサポートを大学がする。）

分科会1 3班の報告

論点：学生にとって本当に必要な力とはなにか

伊藤 奈賀子（教育センター 高等教育研究開発部 准教授）

3班は学生にとって本当に必要な力とは何かというテーマで話をしました。このグループは全員鹿児島大学の教員からなっているグループでした。その中で分野によって多少の違いはありましたが、共通して出てくる意見としまして、元気のない男子学生が多いんじゃないかという話がかかり出てきました。そのあたりから発展しまして、どうも鹿児島大学の学生には地元志向、就職して地元に残りたいと考えている学生が結構高いんじゃないかという話になりました。地元に残りたいということそのものは構わないんだけど、居心地がいいからただ残りたいだけなんじゃないのか。外の世界を知った上で、鹿児島のために貢献しようというのであればそれはいいんだけど、ただ単に何となく地元から出たくないからそのままがいいな、というんだったらそれは問題だろう、というところから議論が始まりました。

そのためには、外の世界をやっぱ知ってもらわないといけない。外の世界と接触を持つ中で、今の自分の立ち位置というのを見てもらわないといけない。例えば企業の関係者であったり、地域住民の方、それから他大学の学生と接触を持つ、あるいは同じ鹿児島大学の中でも他学部の学生と接触を持つということで、自分の世界が狭いということにまずは気づいてもらう。外の世界を知った上で、自分は、という事を考えてもらいたい。それで自分はいったいこれから何を学んでいくべきなのか、という事を見出す事が必要だろうということになりました。

そして、この自分は何を学ぶべきかというのは、できるだけ早い段階で、入学から早い段階で、これを見出してもらう事が必要だろうという議論になりました。早い段階で現場と接触をしてもらう。あとから教員が口を酸っぱくして言っても全然響かない学生も、他の世界の人からの言葉だったらすごく響く場合もあるわけです。そういったことも考えて、早い段階で現場に触れさせる事は必要だと。ただ早い段階で現場と接触したら、それがずっと続くという保障はない。1年生の時は目が輝いていても、2年生になったらだんだん淀んでいくかもしれない。そういう事を考えると、そのあと最初に動機づけたら、その意欲をいかに維持していくかという事も大学としては考えていく必要がある。そのためには、例えばカリキュラム全体としてどのように支えていくのか、教員の間で学生の学びをどう支えていくのか、といったことも考えないといけない。

また現場と接触するという事を、そういう機会をこれからも継続して持たせていくためには、先ほど2班の中でも出てきましたけれども、費用の問題というのがどうしても出てくる。特に鹿児島の地理的な状況を考えれば、費用の問題というのは出てく

る。それからカリキュラムの面で学生が現場と接する機会を持ちやすくするためのサポートという事をもう少し考えていく必要がある。その中で特に私が教育センターの所属であるという事もあると思いますが、共通教育のカリキュラムの中で、もう少し学生が、例えば今は集中講義が一度に1つしか取れないということになってますが、その機会をもっと柔軟にできないものか。そういうことももっと考えていってほしい。学生がもう少し現場と接触する機会を持ちやすくするためのカリキュラムの改革であつたりとか、費用の補助であつたりとかという事を大学として進めていってほしい。

その上で最終的に大学として何を目指していくかということ、学生が自分は卒業したあと、ずっと長い人生の中で生涯をどう生きていくかということ、学生自身が見い出せるようにサポートを行うのが、大学としては重要な役割ではないのか、ということにまともりました。以上です。

分科会 1 4 班

論点：職員が学生ニーズを知り、応えていくために
ファシリテーター：志賀玲子



志賀玲子



有村美樹子



大園久裕



谷口康太郎



山口 聡



橋本文雄



半渡 聡



新田ちづる

ワークショップ記録

分科会1 4班 (職員チーム)
論点：職員が学生ニーズを知り、応えていくために
ファシリテーター：志賀玲子(志学館大学 法学部教員)
メンバー：有村美樹子(学生部教務課職員) 大園久裕(研究国際部社会連携課職員) 谷口康太郎(大学院理工学研究科(工学系) 技術部 生産技術系職員)
山口 聡(農学部・共同獣医学部等事務部学務課職員)
橋本文雄(農学部 /大学院連合農学研究科教員)
半渡 聡(農学部・共同獣医学部等事務部総務課職員)
新田ちづる(鹿児島大学生生活協同組合中央店経営リーダー/鹿児島大学/鹿児島県立短期大学キャリア開発講座非常勤講師)

【1】課題

職員と学生の接触が少ない。

学生のニーズを吸い上げる仕組みが不十分。

職員と学生・教員・地域とのコミュニケーションが少ない。

【2】重要な点

学生のニーズを知るために全学的なシステムを作る。

チャンスやチャンネルを増やす。

各憲章を踏まえ「甘やかしにならないこと」に留意しての「学生第一」。

ステークホルダーの全てにプラス(成長)職員・学生・教員の一体感。

【3】具体的な提言

学生が参加する委員会や語る機会とそれに対応する体制をつくる。

職員は学生のロールモデルとしてキャリア教育に積極的に参加する。

学生と教職員の情報を共有する機会を増やす。

分科会 1 4班の報告

論点：職員が学生ニーズを知り、応えていくために

山口 聡（農学部 共同獣医学部等事務部学務課 学生係 係員）

4班は、「学生ニーズに職員はどうやって応えるか」という論点だったため、そもそも職員が学生ニーズをどうやって把握して、学生ニーズにどうやって応えていくかという点から3つの課題を挙げ、学生ニーズに応えていく上で重要な点を踏まえながら、具体的な3つの提言を考えました。

まず、課題の1としては、職員と学生との接触が非常に少ないことが挙げられました。そのため、職員から学生に対して自分たちの職業や仕事を紹介するなどして、接触する機会を積極的に設けていくべきという意見が出されました。課題の2としては、学生ニーズを知るシステムが大学全体でも不十分という事が挙げられました。そのため、学生ニーズを知るための全学的なシステムを作るべきという意見が出されました。課題の3としては、学生～教員～地域などの職員を取り囲むステークホルダーと職員との間で、交流や情報の共有が少ないということが挙げられました。そのため、学生と職員とが接するチャンスや、地域と教員～学生～職員とのチャンネルをさらに増やすべきという意見が出されました。

次に、学生ニーズに応えていく上で重要な点としては、「学生第一」という方針に基づくことが重要だと考えました。これは学生ニーズにそのままに伝えていくといった単なる甘やかしではなく、学生憲章などを踏まえた上で、学生が困難な課題にチャレンジする際に適切に支援するといった「学生を中心に据えた支援」であり、学生の成長を支援していくことにより職員や教員も共に成長していくという効果を見込んでいます。なお、全てのステークホルダーにプラス面の成長が見込めるようにすることと、学生ニーズに大学全体で取り組んでいく際に学生～教員～職員の間の一体感を育んでいけるように方向付けることも欠かせない点となります。

これらを受け、具体的な提言の1としては、職員と学生との接する機会を増やすために、職員は学生のロールモデルとしてキャリア教育に参加するなどして、学生と接する機会を積極的に設けていくことが必要であると考えました。提言の2としては、学生が参加する委員会を設置して学生ニーズを把握するシステムを構築することと、把握したニーズについて分析・実行していく支援体制を整えることが必要であると考えました。提言の3としては、職員とその他のステークホルダーとのチャンネルを増やす方法として、ICT、SNS等のツールを有効活用することが挙げられ、まずは教職員と学生との双方向で情報を共有する機会を増やす必要があると考えました。

以上で4班の発表を終わります。

分科会 1 5 班

論点：実社会とかかわる教育機会をよりよくするために

ファシリテーター：西尾正則



西尾正則



唐鎌寛崇



戸田克樹



森下元太



泊 雄介



石橋晴菜



北野 弘

ワークショップ記録

分科会1 5班 (学生チーム)
論点：実社会とかかわる教育機会をよりよくするために
ファシリテーター：西尾正則（大学院理工学研究科（理学系）教員）
メンバー：唐鎌寛崇（大学院理工学研究科学学生） 戸田克樹（共同獣医学部学生） 森下元太（法文学部学生） 泊雄介（教育学部学生） 石橋晴菜（大学院理工学研究科学学生） 北野 弘（水産学部学生）

【1】課題

実社会と接点が少ない。

教員によって研究がメインだったり、実社会がメインと研究室によって異なる。

鹿児島に企業が少ない。

【2】重要な点

学生は義務的にならず、主体的である。

大学の広告力が弱い。

研究に対する一般の人の理解。

【3】具体的な提言

教員・大学は学生が自主的であるために情報を提供する。

オープンキャンパスの応用化（高校向けではない一般人もオープンキャンパスに参加できるように）。

学生が教員を選べるシステム。

分科会1 5班の報告

論点：実社会とかかわる教育機会をよりよくするために

唐鎌 寛崇（大学院理工学研究科 博士前期課程 2年）

5班では、「実社会と関わる教育機会をよりよくするために」というテーマについて話し合いました。

課題としては、「鹿児島に企業が少ないということから接点が少ないこと」と、「学生自身が実社会とどうやって関わっていくかということを考える場が少ないこと」があげられます。2つ目の課題があげられる背景としましては、研究室次第で研究の仕方や拘束時間があり、実社会への関わりを考える時間が限られてしまっているという問題もあげられます。

課題に対して、言い訳をいってもしかたがありません。この課題に対しての解決策は、自ら考え動く力を身につけることだと考えます。なぜなら、絶対的な答えが存在しない社会で活躍するためには、この力が一番大切であると考えからです。つまり、自ら考え動ける学生を育てることが、結果として、実社会と関わる教育機会をよりよくすることに繋がるのではないかと考えたからです。

これらをまとめると自主性が一番大切なのではないかなと感じました。大学生活で自主性を磨ければ、少ない時間だとしても自分なりに工夫し、自ら調べ実社会とのかかわりを自ら改善していけるのではないかと考えます。

次に大学側に私たちが要求することは、このような力を養うための場を提供することです。例えば、自分の研究を社会に理解してもらう訓練をするために、研究を行っている学生がオープンキャンパスの中で、どのような研究を行っているのかなどを高校生や保護者に対して発表する場を与えるなど様々なところで挑戦できる場を作ることです。このような経験を積ませることで、社会と関わっていくためには何が必要なのか等考えるきっかけを作ることができるのではないかと思います。

話は変わりますが、私たちの経験を通して思ったことですが、本当に研究室の状況を知って入っている人が少ないのではないかと思います。研究室の状況を知る機会を増やし、より学生が研究や学業への取り組み方を理解したうえで選択できるシステム作りも必要なのではないかと思います。

全体をまとめると、受け身にならず自主的に活動できる学生を育てることが重要であり、大学に求めることは、学生が「研究を通して社会に関わっていくためには」ということを考えさせる場を増やすことが大事なのではないかと考えます。贅沢を言わせてもらえるなら、ただ掲示板に公告を載せるだけではなく、学生たちの目を引くようなインパクトのある公告をして頂きたいという意見もありました。以上です。

分科会 1 6 班

論点：卒業生から大学教育に求めること

ファシリテーター：亀野 淳



亀野 淳



市村良平



澤田樹一郎



森 好子



瀬戸口眞治



中武貞文



富吉宏治

ワークショップ記録

分科会1 6班 (卒業生チーム)
論点：卒業生から大学教育に求めること
ファシリテーター：亀野淳（北海道大学 高等教育推進機構教員）
メンバー：市村良平（マルヤガーデンズ） 澤田樹一郎（大学院理工学研究科（工学系）教員） 森好子（（株）ワイズプラス代表取締役） 瀬戸口眞治（鹿児島工業技術センター(食品・化学部長)） 中武貞文（産学官連携推進センター教員） 富吉宏治（鹿児島県庁 危機管理局 原子力安全対策課職員）

【1】課題

大学は社会からの需要に十分に対応していない。

- ・学んだことが社会のどこに生かされているのかわからない
- ・自己アピール、プレゼンの方法を学生時代に知りたかった

教員自身の問題

- ・窮屈な現状→研究・教育の楽しみを十分に伝えていないのではないか？

学習プログラム

- ・知的好奇心、価値観の醸成につながっているか？
- ・自ら学ぶスキルを身につけているか？
- ・学ぶ機会を確保できているか？

【2】重要な点

地域と大学のコミュニケーション。

自ら学ぶスキル。

視野を広げる。

面白さを伝える。

学びの機会。

【3】具体的な提言

地域、社会人が入り込みやすい大学システムの構築。

- ・公開講座の機能向上

社会人人材、OB・OGの活用。

- ・社会人、OB・OGが入ることによる大学生や教員への刺激
- ・卒業生の声、知的好奇心を刺激

分科会1 6班の報告

論点：卒業生から大学教育に求めること

市村 良平（マルヤガーデンズ）

6班です。卒業生から大学教育に求める事ということで話し合いました。僕は鹿児島大学の卒業生ですが、2年前に出たのばかりでまだ学生の方みたいだと思ったんですが、そうはいかずこちらの班に入って話をさせていただきました。

班のなかから出てきた課題としては、課題というか疑問ですね。これまで発表された皆さんの経験談のようにはいかないというか、疑問がいくつか挙がりました。

まず1つは、大学が社会からの需要に十分対応してないのではないか、という意見が出ております。学んだ事がどこに生かされているのか、自己アピールとかプレゼンテーションの方法がちゃんと教えられているのかという部分に疑問があります。

次に教員自身の問題と書いてあるんですけども、評価制度など大学自体がちょっと窮屈になってるんじゃないかなという話が出ました。もっと楽しく勉強する場というものがあっていいんじゃないか。まあ教員がマニアックな人だらけだと思うので、研究とか教えてる事がネタとして直接楽しくないような講座がもっと繰り広げられていいんじゃないかというような話が出ました。

あとは学習プログラムとしては、知的好奇心とか価値観の形成につながっているのかな、というところがあります。あとは自分から学ぶスキルというのを身につけられる関係にあるのかどうか。学ぶ多くの機会が、学校でできているのかというところも課題に挙がっています。

そして重要な点としましては、地域と大学がいかにコミュニケーションをとっていくのかというところが1つポイントになるのかなということです。あとは学生自体が自ら学ぶスキルをどうやって身につけていくのか。視野を広げていける環境にあるのかどうか、というところがあります。教員側でもあるとは思いますが、実際に中で繰り広げられていくことのおもしろさみたいところがちゃんと伝えられるかっていうところが、重要な点になってくるのではないかと思います。また、学びの機会がもっとたくさんあった方がいいんじゃないかというような意見が出ました。

これらを踏まえて具体的な提言としては、地域、社会人が入り込みやすい大学のシステムが構築されていくといいのではないかというような意見が出ました。具体例としては、公開講座が組織として、もっといろんな形で開催されるといいのかなというような意見や、社会人の人材、つまり、OBやOGの活用です。あと最初の方のプレゼンテーションにもありました通り、インターンシップとかそのあたりでしっかりと社会人が、大学生と教員にたいしてもっと刺激のある環境にしていく必要があるんじゃないかというところですね。

あとは卒業生の声ということで、卒業生も知的好奇心をしっかり伝えて学生の刺激になればいいんじゃないかなといったところで、議論は終わりました。以上です。

分科会1 講評

船木 茂人（文部科学省 生涯学習政策局 生涯学習推進課 係長）



文科省の船木です。本日は長時間にわたっての議論お疲れさまでした。

この分科会のテーマ「社会の要請と学生教育の充実(質向上)」は、生涯学習を題材にしていますが、学生が地域で活動することによる学生の学びが多々取り上げられており、中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」や大学COC事業の趣旨にも通じるところがあると感じました。

また、今回のワークショップの手法は、各グループのファシリテーターの先生方に一任されていると伺いましたが、実に様々な手法があって私たちも非常に参考になりました。

各班の報告を拝見し、学生教育の充実と一言で言うのは簡単ですが、それらを具体化していく過程で実に様々な困難があることを実感しました。特に、学生にモチベーションの差があるとか学生を現場に全員連れて行くのは大変だといった点や学生に対するインセンティブ付与の面について私自身も気になったところです。

鹿児島大学は、全国で初となる生涯学習憲章を作られているところですが、今回の議論を踏まえ、それに加えて、学生の教育についても新しいもの示していただけると更に良いのではと感じた次第です。

今回の議論は、憲章の趣旨に賛同いただいた皆さんが集い熱い議論を交わされたと伺っています。今後、憲章の策定を契機に更に全学的に取り組まれていくことになると思いますので、今回の熱い思いを学内の様々な方に伝播していただき、憲章の理念が大学全体に浸透していくことを期待しています。そして、本日の議論の結果として示された提案が少しずつ実現していくことを期待して私の講評とさせていただきます。

第2部 分科会2

テーマ：社会人教育機関としての大学の展開
成人教育の特質を踏まえた学習機会の創出とそのための条件整備

コーディネーター：小栗 有子 生涯学習教育研究センター准教授

13：40-14：00 講師の問題提起
西原 亜矢子 新潟大学講師

14：00-14：30 事例報告
報告1 中原 睦美
大学院臨床心理学研究科教授
報告2 枚田 邦宏 農学部准教授
報告3 高瀬 公三 共同獣医学部教授

14：30-16：30 6班に分かれてワークショップ

	1班	2班	3班	4班	5班	6班
チーム	混合	職員	教員	教員	学生	卒業生
論点	社会人教育 の相互作用 が生む楽し さと新しい 気づき	職員自身 のキャリア 形成	社会人教育 プログラム (カリキュラムや 体制)の難し さ	社会人学生 のニーズに 応えること の難しさ	社会人学生と しての学びを よりよくする ために	自治体のニ ーズに大学 がよりよく 応えるため に

16：30-17：00 分科会まとめ
講評 高井 絢 文科省生涯学習推進課 課長補佐

分科会2 問題提起 『大学生涯学習における社会人教育
～「社会人教育が」が大事学に問いかけるもの～』
西原 亜矢子（新潟大学大学院保健学科研究科 講師）



ただ今ご紹介いただきました新潟大学の西原と申します。よろしくお願いいたします。簡単に自己紹介をしておきますが、専門は生涯学習論、成人教育学ということで、おとなの学習者の特徴を活かした支援とそのあり方を研究、実践を進めています。パワーポイントの最終頁にありますように、一般の大学では、下が18歳から、地域では90歳くらいの方まで相手にして格闘しているところです。また新潟大学の方では、保健学の研究を通じて地域に貢献する大学のセンターの企画・運営を担当しています。

さっそく本題に入っていきますけれども、私の専門である成人教育学は、別の言い方では、成人の学習援助論と言われます。なぜかという、教育という、どうもこう上から押しつける、教育者が学習者を教育するというイメージがありますので、成人の主体的な学習を援助するという立場を示しています。成人の学習援助論の中では、成人の学習者には2つの大きな特徴があると言われています。1つが「自己決定性」というものです。

自分の事は自分で決めたいという深層心理のことです。赤ちゃんは周りの大人の世話がなければ生きていけない依存的な存在ですが、成長するにつれて、自分の足で歩くようになり、幼稚園や学校へ行き、思春期に自分は何者かと悩んだりしながら、やがて、自分の職業は自分で決め、自分のパートナーは自分で決めというようになります。それを学習にも生かしていこう、学習においてもこの自己決定性が増大していくのを援助していこう、ということです。もう1つは、成人の学習者が持つ個々の経験を学習の場でも生かしていこうということです。この二つの特徴について、簡単にご説明したいと思います。

まず自己決定性ですね。資料の方をご覧ください。

資料の1番に、成人の学習援助論を体系化したアメリカの成人教育学者ノールズという人がまとめた「学校教育と成人の学習援助の違い」を比較した表があります。それを見ていただくと、3番目から「学習ニーズの診断」、何を学ぶ必要があるのかということですが、それから「学習の目標の設定」、「学習の計画」、「学習活動」、「評価」というのに、学校教育の方は教師が決定しているんですけども、成人の学習援助論ではここに学習者にも主体的に関わってもらおうということで、自己決定性を位置づけております。時間の関係で、あとからゆっくりご覧になっていただければと思います。

この一連の1番から7番までの要素を踏まえたものを、「自己決定型学習」といいます。

成人の学習者が、自分で自分の学ぶ課題を見つけ、目標を立て、学習計画をデザインして、活動して評価をして、自分の次の課題を見つけて次の学習を、という流れになっていてそれを援助するというものです。これはアメリカの理論ですが、日本にどう結びついてくるかということ、日本の生涯学習は、中央教育審議会の答申で定義されているものでは、資料の4ページ目ですね、「今日、変化の激しい社会にあって、人々は自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行なうことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで生涯を通じて行うものである。これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい」というものです。自己決定型学習と親和性があるというか、共通する部分が多いです。

I 成人学習者の特性 (M.ノールズ, 2002(原著1980))

<2大ポイント>

1. 自己決定性

(自分のことは自分で決めたいという深層心理)
増大 ⇒資料1

2. 経験 ⇒資料3

「自己決定型学習」(自己主導的学習: self-directed learning)とは
＜資料1＞「成人の学習援助」①～⑦の要素をもつ学習

日本の「生涯学習」と「生涯教育」

今日、変化の激しい社会にあって、人々は自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行なうことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで生涯を通じて行うものである。その意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい。

生涯学習のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である。

〔中央教育審議会答申1981年〕

これが、北米やアメリカで成人が学んでいる学習現場に非常に普及した時に、現場が大混乱が起きてしまったということが、資料の2に書いてあります。カナダの成人教育学者のクラントンという人が言っているのですが、簡単にご紹介しておきますと、「学習者は、職業生活や私生活では、独立した自己決定的な存在かもしれないが、講座の講師やワークショップのリーダー、職員研修担当者に対しては、自分よりも豊富に持っているはずの知識をできるだけ楽な方法で授けてくれるよう期待する。このような期待が裏切られると学習者は混乱し、とまどい、腹を立て、学習者としての自分の権利が無視されたと感じるのである」というものです。いきなり自己決定的に課題を設定して学習しろと言ってもそれは無理でしょう、ということです。先ほどの学校教育との比較の表は、1950年代頃のアメリカの学校教育を基元にはしているんですけども、学校教育で全て教師が決めるというのに慣れてきた人たちに、いきなり自分で課題を設定して目標を立てて、というのは、それは無理だろう、ということで、自己決定性への援助というのは問い直しがされるんですね。成人の学習の理論では、学習における自己決定性は前提としてあるものではなくて、成人の学習者は教育者や他の参加者と学び合うプロセスを通じて、学習における自己決定性を獲得していくんだ、それを援助するのが成人の学習では大事だということになっています。

それから、成人の学習援助論で重視されるもう一つの要素は「経験」ですけども、成人学習者は一人ひとりが非常に貴重な経験を積んできている。資料の下線部「成人とは、

かれらが〈おこなってきたことそのもの〉である」というように、例えば、成人の方に自己紹介をしていただくと、「自分の経験でこういう事を感じて、だからこの場にいます」というように、本当に経験がその人を形作っているというところがあって、なので「自分たちの経験の価値が見下される事が分かったと、経験のみでなく人間としても拒絶されると感じてしまうのである」と書かれてありますけれども、例えば、大学のようなところで何が起こるかというのが資料の3番にあります。簡単にご紹介します。イギリスの大学の先生が自分の児童心理学のクラスの事を書いているものですが、この先生が楽しく感じるクラスは、「子育てが終わったら人に教えることをしたいという希望を持つ大人の女性の学生たちと一緒に時でした。彼女たちは理論を簡単には受け入れてはくれません。『うちの子はそんなことしたかしら？』『うちの子が4歳の時もそうだったかしら？』」というように、自分の経験に引きつけて考えて疑問を投げるといような事がよくあるんですね。普通、アカデミズムの大学のような所では、個人的な経験、主観的な意見は排除される傾向にあります。この先生が、最後の3行目の辺りで言っているように、「生徒の経験を一般論に関連づけていけば、児童心理学という澁刺とした複雑な絵を描いている」つまり、学問ももっと豊かになるでしょう、という鹿児島大学の生涯学習憲章のような事が述べられています。

ということで、一人ひとりが学習の場に持ってくる個人的な経験を交流させて生かしていこうということが、成人の学習の援助論では大きな特徴になります。ただ経験にも困った面がありまして、個人個人の経験の中だけでもものを見たり考えてしまうと、非常に固定的なものの見方になってしまう「成人は多くの固定した思考に癖やパターンを有しており、この点はあまり開放的ではない」ということで、そういったところを解きほぐしていくのも大事であるというふうに言われています。それについてはまたあとで述べます。

経験

* 「成人は主として自分の経験から自己アイデンティティを引きだそうとするし、これまでに蓄積してきたユニークな経験から自分を定義づけようとする。
…成人とは、かれらが〈おこなってきたことそのもの〉である」。

…自分たちの経験の価値が見下されていることがわかったと、経験のみでなく人間としても拒絶されると感じてしまうのである。」

成人にとっての経験の意味

① 豊かな学習資源としての経験 ⇒ 資料2

② 経験の価値づけ—固定化

成人は多くの固定した思考の習癖やパターンを有しており、この点ではあまり開放的ではない

経験による固定化を問い直す

・ 経験は、一人ひとりが自分のまわりの世界を理解する方法、ものの見方、価値観・信念・知識を形づくっている。

⇒ 固定した思考の癖やパターンが得意な経験によるこだわり、固定化してしまったものの見方、価値観、考え方をふり返り、自ら気づくことができるよう援助する

⇒ ふり返りが重要

☆ 留意点

① 変容を性急に求めない

② 教化(教え込むこと)ではない

⇒ 問いかけること、待つこと、自分のやり方を変えてみること

経験は一人ひとりが自分のまわりの世界を理解する方法、ものの見方、価値観・信念・知識を形づくっているけれども、それがパターン化してしまいやすい、固定化してしまいやすいので、自分の価値観や考え方をふり返って自ら気づくことができるように援助する、ということが大事になってきます。その人その人が経験してきたことや、考えや価値観がどんなふう形成されてきたのか、ということを手をふり返って気づき、よりよく変容

させていくことへの援助です。援助する立場の人への留意点としては、変容を性急には求めない、それから、たとえ間違っていると思えるような考え方をしている、それはだめだというふうに直接教え込むことではなくて、問いかけること、待つこと、あるいは相手が変わらないのだったら自分のやり方を変えてみる、そういったことが成人の学習の援助論では提起されています。

ここから少し方向が変わりまして、大学の知と実践現場の知について、お話します。これはアメリカの組織学習研究者のドナルド・ショーンという人の省察的実践論から持ってきました。アメリカのマサチューセッツ工科大学の先生で、自分自身も地域の都市開発プロジェクトに関わって現場で格闘してきた方なのですが、その人が、伝統的な大学・研究の知、科学知・専門知というのは、どうも実践現場ではあまり役に立っていないんじゃないか、というような疑問をもつようになって、現場の実践者、専門職とか実務家が、仕事を通して築いている「実践知」というものに注目したんですね。それは実証されるものでもなく、合理的なものでもなく、職人の持っている「技」のようなもので、直観的なもので、職業経験の中で築かれていくと言っています。

Ⅱ. 大学の知と実践現場の知 ～専門知・科学知と生活知・経験知～

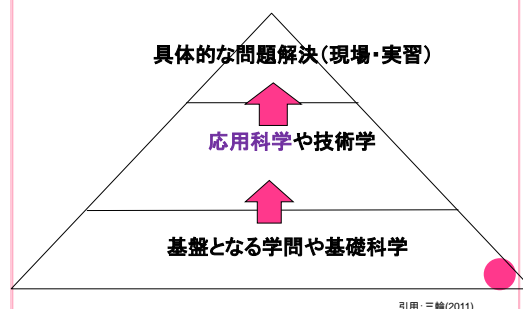
ドナルド・ショーンの省察的実践論

伝統的な大学・研究の知：科学知・専門知
⇒ 実証的・客観的・合理的



現場の実践者（専門職・実務家）の「知」（実践知）
⇒ 「わざ」（art, artistry）、直観的、経験的

伝統的な大学の知の構造



伝統的な大学の知の構造では、最初に基盤となる学問や基礎科学があって、それが応用科学や技術学として発展し、それを用いて現場の問題を解決という流れになっています。ところが、基盤となる学問では、非常に実証的ということで、問題の対象●の持つ固有の状況や背景から切り離して客観化し、例えば統計処理をする、実験室で同じ環境を整えて実験をする、それで実証して一般化された理論や方法論が、実践の現場ではあまり役に立たないのではないか、それで大学の知と現場の知との乖離が起きてしまっているのではないかと、ということをショーンが言っています。今までの専門家像では、課題の解決のために大学や研究所で生み出された知識、技術を合理的に利用する、例えば医学では病気を治すために、実証された治療法を用いて病気を治すというように、基礎科学を実践へ提供するという流れでした。ところが世の中の問題が非常に複雑になって、例えば、一つの問題のように見えても、いろんな状況や背景が絡んでいる時に、解決すべき課題が明確になっているわけではなくて、実際に現場で格闘している人は、まず、問題を見極めて、課題を設

定することから始めなければいけない。

複雑・不安定・不確実・あいまいな現実の中から課題を設定して課題を見つけていく、問題がある状況と頭の中で対話しながら、何が課題になるのかを発見していく。ショーンは、そのプロセスを描き出しています。特に、経験を積んでベテランとなった実践者は、現実の状況の中で暗黙のうちに直観的に状況を判断し、問題を設定し、対象への働きかけを試みると言っています。例えば、看護師さんがいたとして、新人の看護師さんは今日ちょっと患者さんの顔色が悪いなと思って、何をしたいか分からないし、では、テキストに何て書いてあったかなという発想になるんですけども、ベテランの看護師さんはもう見るなり、あ、ちょっとおかしいなという事で、理屈よりも先にほぼ直観的に、あ、この方こういう顔色してるからちょっと今日はこうしてみよう、というような事を判断してパッといろんな事を試してみるというような事ができてしまうというのですね。ショーンは、それを、「行為の中の省察」と言っています。驚くようなこと、困惑するようなことがあった時に、状況と対話し、省察をしながら、いろんな解決法を試みる。それが経験を積んでベテランになるほど、できるようになる。行為の中の省察の中で、実践知や暗黙知、経験知といったものが築かれていくんですけども、それを明示し、確かなものにしていくために、行為についての省察、自分が実践現場で行っていることを省察し、実践の中で行われた問題設定、試行、解決のプロセスを検討して、実践知を明らかにすることが提起されています。

専門家像:技術的熟達者 (technical expert)

課題の解決 (solution)

知識・技術を合理的に利用
基礎科学の実践への適応

専門家像: 省察的实践者 (Reflective Practitioner)

課題の設定 (setting)

複雑・不安定・不確実・あいまいな現実の中から課題を設定
課題は見つけていくもの
状況との対話の中から、何が課題かを発見していくこと

ベテランの実践者は、現実の状況のなかで、
暗黙の内に、直観的に、状況を判断し、問題を設定し、対象への働きかけ(行為)を試みる。

実際に行っている事例がありまして、例えば福井大学の教職大学院で行われている「ラウンドテーブル」では、教員が学校の授業を、自分の授業実践について、記録したり、語って、お互いに聴き合う、すなわち記述化し、言語化し、相対化するということをしています。そのように、省察をすることで、現場の授業実践を通じて築かれた実践知が明らかになり、他の教員と共有される。省察と実践をサイクルにしていくことで、現場の実践知を形成し、共有していこうということが提起されています。

「行為の中の省察」(Reflection in action)

「行為についての省察」(Reflection on action)

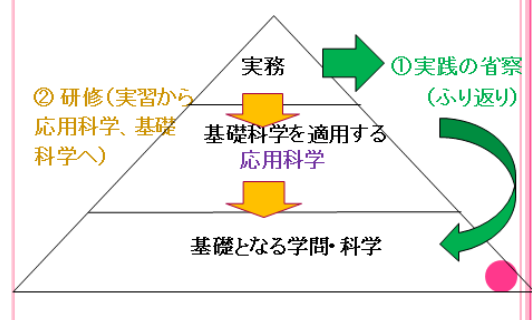
実践をふり返って(省察し)、
実践の中で行われた問題設定・試行・解決のプロセス
＜実践知＞を明らかにする

言語化・記述化・相対化
実践を語る・聴く・記録する

13



省察的実践をめざす学び: 2つの流れ



そうすると先ほどの一番下が基礎科学という知識の構造、知識の流れ、学問的な構造も変わります。上の実務の実践知が応用科学になり、それが基礎科学に反映される、新しい基礎科学ができるということがいわれています。

そういった知の生成に、大学なり他の組織が取り組むことに向けて、ショーンは、「自分たちの実践を省察することに親和的な機構では、個人が葛藤やジレンマを表に表すことができ、それを生産的でパブリックな 探究の主題に据えることができるような学習組織が求められる」と言っています。さらに、実践と実践、状況と状況、専門職と専門職などの架け橋となるような役割が求められます。もう一つは実践者と研究者の協働の研究を通じて、探究・コミュニケーション・共同性を大事にしながら、実践者と研究者が協働する事で知が豊かになっていくんじゃないかと提起されています。

Ⅲ 学習する組織

ショーン

1. 「**省察的実践に親和的な機構**では、個人が葛藤やジレンマを表に表すことができ、さらにそれを生産的でパブリックな 探究の主題に据えることができるような学習組織・・・が求められる」(351-353頁)

2. 架け橋

実践と実践、状況と状況、専門職と専門職
実践者と研究者の協働研究[アクション・サイエンス]
＜探究・コミュニケーション・共同性＞

また、組織として学習して組織が豊かになっていくということも非常に大事で、「学習する組織」ということが言われているのですが、こちらの方は時間の関係で飛ばさせていただきますので、あとで関心のある方はスライドを見ていただきたいと思います。

「学習する組織」 ピーター・センゲ (Peter Senge)

「共同して学ぶ方法をたえず学び続ける組織」
「自分たちが本当に望んでいるものに
一步一步近づいていく能力を
自分たちの力で高めていける集団」

17

5つのディシプリン

「自己マスタリー(personal mastery)」 になりたい理想の確認
「メンタル・モデル(mental models)」 とらわれている思考
「共有ビジョン(shared vision)」 共通のビジョンを持つ
「チーム学習(team learning)」 異質な者同士で学ぶ
「システム思考(systems thinking)」 複雑な状況を総合的に理解



Senge, P.M., The Fifth Discipline Revised Edition, Currency Doubleday, 2006, P.xiii.

私からの提起として、社会人学生は「教育の対象者」から「協働の探究者」になる可能性があるのではないかと、それから、これは特に教員の方に言いたいのですが、クラントンが、「教育者は学習者である」と言っています。学生と現場で探究しながら学ぶような可能性がある他に、ご自分の指導について、学生とのやりとりをふり振り返りながら、教えることについて、さらに磨きをかけるということです。

それから、大学の知の構造の転換という事で、専門知・科学知だけではなくということ、それはすでにこちらの憲章の方に出されているのではないかと思います。

最後に、学習する組織として、組織として自己決定力というものをつけていくことが重要で、非常に厳しい世の中で、政策もいろいろと変わるようではすけれども、その中で耐えて地域に貢献していくためにも、翻弄されずに

組織としての自己決定力を磨いていくことが必要なのではないかなということで、それを問題提起にして、私の報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

さいごに

- ・ 社会人学生(実務家・実践者・生活者)
教育の対象者⇒協働の探究者へ
- ・ 「教育者は学習者である」(クラントン)
- ・ 大学の知の構造の転換
専門知・科学知・生活知・経験知・実践知
- ・ 学習する組織
—組織としての自己決定力

19

参考文献

ノールズ / 堀・三輪監訳『成人教育の現代的実践』風書房、2001年
(原著1980)
クラントン/入江直子・豊田千代子・三輪建二共訳『おとなの学びを拓く』
風書房、1999年(原著1992)
ショーン/柳沢昌一・三輪建二監訳『省察の実践とは何か』風書房、2007
年(原著1983)
センゲ/原田昌治、スコラ・コンサルタント監訳『フィールドブック 学習する
組織「五つの能力」』日本経済新聞社、2003年

三輪建二『おとなの学びを育む』風書房、2009年
三輪建二『生涯学習の理論と実践』放送大学大学院テキスト、2010年
中村香・三輪建二編著『生涯外学習社会の展開』玉川大学出版部、2012
年

21

資料1 学校教育（子どもの教育）と成人の学習援助の諸要素の比較（M. ノールズ）

	学校教育	成人の学習援助
①雰囲気	緊張した、フォーマル、低い信頼関係、離れている、競争的	リラックスした、相互に尊敬、インフォーマル、共同的、支援的
②学習のための組織構造	制度化された教育を提供する場	組織メンバー尊重、方針決定への参加、表現の自由、目標・活動・実施・評価への相互責任
③学習ニーズの診断	主として教師	教師（支援者）・学習者が相互診断
④目標の設定	主として教師	教師（支援者）・学習者が相互調整
⑤計画のデザイン	教師による内容の計画、論理的順序	学習ニーズに基づく順序づけ
⑥学習活動	伝達的技法、割り当てられた読書	探究プロジェクト、経験開発的技法
⑦評価	教師による、集団基準による	学習支援者、専門家による判定、学習者が集めた証拠・達成による

※ ペダゴギー部分は、ノールズが 1950 年代のアメリカの学校教育を特徴づけたもの

参照：ノールズ『成人教育の現代的実践』2002、p.513

資料2 現場の混乱

「学習者たちは、職業生活や私生活では、たしかに完全に独立した自己決定的な存在かもしれない。また、興味をもったことや趣味については喜々として自己決定的な方法で学習を始めるかもしれない。しかし、講座の講師やワークショップのリーダー、職員研修担当者に対しては、自分たちよりも豊富にもっているはずの知識を、できるだけ楽な方法で授けてくれるよう期待する。このような期待が裏切られると学習者は混乱し、とまどい、腹を立て、学習者としての自分の権利が無視されたと感じるのである。一方成人教育者の方でも…（中略）おとなの学習者は自己決定的であるか、自己決定的であるのを好むか、少なくとも自己決定的になる潜在能力があると考えている。そのため成人教育者たちは、自己決定的な方法は当然学習者に熱烈に歓迎されるものと思い込んでい。…（中略）そして、このような反応が得られないと成人教育者も混乱し、とまどい、あるいは腹を立て、この方法をすぐにでもやめたくなくなってしまうのである。」

クラントン『おとなの学びを拓く』1999、p.145

資料3 イギリスの大学教員による成人学生についての記述

「私にとって最も楽しいクラスは、いつものことながら、子育てが終わったら人に教えることをしたいという希望を持つおとなの女性たちと一緒にの時でした。彼女たちは子どもの発達に関するおしゃべりの理論や饒舌なお話など、そうやすやすと受け入れてはくれません。「うちの子はそんなことしたかしら？」とか「うちの子が4歳の時もそうだったかしら？」といった疑問を投げかけるのです。20歳ならそれをそのままノートするでしょうが、おとなの女性はいつも自分自身や他人の経験に照らして、一旦立ち止まって考えを巡らすのです。つまり、いつも「もしも」や「しかし」がそこにあるのです。こんなクラスでは、生徒の経験を一般論に関係づけていけば、最終的には児童心理学というとてもなく澁刺とした、かつ複雑な絵を私たちは描いているのだ、という実感が湧いてくるものです。」

ロジャース『おとなを教える：講師・リーダー・プランナーのための成人教育入門』1997年

資料 4

「一つの学問分野で解決できない産業界や社会のニーズ」とは何か

○ 事例：コロンビア、カウカバレー地域における子どもたちの栄養不良問題

* 子どもたちはトウモロコシの偏食による蛋白質欠乏症と消耗症であり、さまざまな専門の研究者たちが、それぞれの見方でアプローチを行った。

専門家	問題設定	アプローチ・結果
栄養学者	食品摂取	購入可能で最良の食品を選択しようとした。 ⇒全人口に分配される総栄養生産量が、必要摂取カロリーの最低所要量を下回っていることが判明。
農業経済学者	農業生産力	土地耕作の方法を試行し、高栄養のトウモロコシと米を開発 ⇒子どもたちに高栄養食品を与えても、栄養不良状態は未解決。
公衆衛生医	寄生虫	水質改善、下水溝の配管整備、衛生について家庭教育
経済学者	貧困	家族の収入レベルを上げ、生産力をつけ、村の農産物の創生、研修、雇用率の高い場所への移住を計画。 ⇒問題の根源は、国の経済低成長率→政策的取り組みが必要
政治経済学者	富の分配、経済政策	人口 5 % が広大・肥沃な農園を独占し、全農業生産物 80 % にあたる輸出用サトウキビ生産と畜牛を行う一方、その他の小さな農場は、山間部でぎりぎりの生計。
歴史的見方をする研究者	人口増加 死亡率低下 (人口管理)	栄養不良は最近の現象、20 年前の総農業生産高は全人口に十分な配分。人口が農業生産高以上に急伸し、1950 年代のマラリア撲滅で死亡率が低下、栄養不良の問題は、人口管理の問題。
システム開発者	解決の主体	専門家による探究のプロセスの解明⇒コミュニティメンバーを 問題解決の担い手へ、協働探究へ

D.ショーン著、柳沢・三輪監訳『省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考』2007 年、鳳書房

分科会2 事例報告1 『社会人経験のある大学院生への教育の現状と
その課題～臨床心理士養成大学院の場合～』

中原 睦美（臨床心理研究科 臨床心理学専攻 教授）



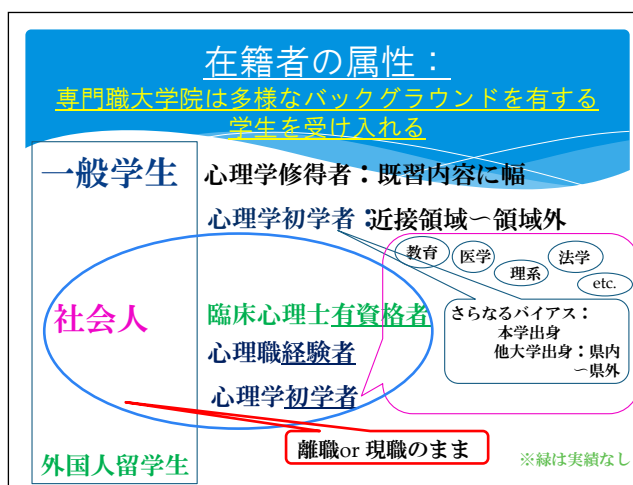
臨床心理学研究科の中原睦美と申します。よろしくお願いいたします。あくまで本研究科の社会人経験者の在籍現状と課題ということでお話しさせていただきます。

臨床心理学研究科は、臨床心理士養成に特化した専門職大学院です。実務家教員4名と教育研究担当5名の計9名という小さい部局です。実務教育を重視し、学内実習及び学外実習を強化する教育課程を編成しています。臨床心理士養成の特徴といたしましては、対人援助職養成ですから社会的責任は大変、重いものがあり、適性の問題が大きく絡みます。同時に専門職大学院としては、即戦力を養成するという課題があります。そのため通常の博士課程前期課程（修士課程）と異なり、2年間で修了単位は46単位と1.5倍以上に設定され、実務実習の重視の観点も含め、質・量ともにハードな教育課程を編成しています。もう一つ、専門職大学院は多様なバックグラウンドを有する学生を受け入れるという使命があります。

一般学生でも初学者から心理系学部出身者、学内進学者から県外の他大学出身者、県内出身者から県外出身者など、多方面に様々なバックグラウンドを持った学生が入学します。社会人入学の場合は、さらに臨床心理士有資格者、心理職経験者、心理学初学者が想定され、加えて、一般学生と同じような出身地・出身大学などのバックグラウンドがあることになります。さらに、現職のまま入学するのか、離職して入学するのかなど、在籍のあり方まで含めて、かなりの複雑さが想定されます。

本研究科の入試制度は、通常の一般選抜、留学生特別選抜に加え、社会人特別選抜を設定しています。この社会人特別選抜は、心理職の経験者に限定しているのも特徴です。なお、心理学初学者や心理職近接領域の社会人経験者の場合は、一般選抜にて対応しています。

次に社会人経験者の特徴について紹介します。一般学生との相違をみますと、社会人経験者の方の場合は入学目標、取り組み、学生役割に対して明確なものがあり、授業等に対して、積極的に主体性も高く、学生であることの喜びが高く課題の負荷に関しても「勤務



時代よりも楽だ」という声も聴かれます。研究科全体が見渡せたり、「自分だけが忙しいのではなく他者も忙しい」という認知ができたりしやすく、「学ぶありがたみを感じる」学生が多いようです。本研究科は、一般学生の意欲も高い研究科ですが、ともすると学生身分が当たり前であったり、課題の負荷に対して「やらされ感」が生じやすかったりして、「学ぶありがたみ」がやや薄くなることもあります。この意味からは、社会人経験者の存在はよき刺激になるものと期待されます。

社会人経験者に共通する葛藤としては、年長であることやジェネレーションギャップを感じやすいことが挙げられます。その影響か、初学者であっても短期間で修了したいという希望が強く見られます。また、「社会人経験がある」と申しまして質的には個人差が大きく、本人は「社会人経験」と捉えていても客観的には十分な経験とは言えないこともあり、当人よりも一般学生の勤勉さが勝ると浮いてしまう危険性もあります。また、社会人経験者の動機づけが高いと申しまして、「学習者役割」を取れるようになるためには移行期課題が影響することによって変わりはありません。そこには、社会人経験があるというプライドや気負いがあるようです。そのため、研究科内で居場所感をどう形成するかが、修学への適応や満足度につながると考えております。

社会人経験者の修学形態による特徴では、現職を持ったままの在籍や離職して在籍することが考えられます。残念ながら、本研究科は実務実習（学内実習、学外実習）が多いため現職を有したままでの在籍は履修困難な現状です。現職のままでは、時間が足りない、きちんと丁寧にやりたくてもやっつけになってしまう、せつかくの在籍期間が「お客さん」になってしまう危険が予測されます。せつかく高い意欲を有して入学しながらも二足の草鞋は非常に困難で、学生も教員も不安全感を抱かざるえない結果になる懸念が強くあります。一旦、離職して入学した場合は、高い集中で取り組むことが可能です。それでも、心理学初学者の場合は、2年間で圧縮して修得していくことには、無理があるように感じます。

社会人経験者といってもその経歴によっても異なります。臨床心理士有資格者、心理職経験者、心理学初学者などに分けられます。動機づけをみると、前者二つ

社会人経験者の修学形態による特徴		
	離職	現職のまま (二足の草鞋)
学習意欲	高い	高い
学習上の傾向	集中しやすい	復習
	学習者でいられる喜び	ポイント学習
	↑ 初学者の場合、2年間で圧縮して学ぶことの問題	↓ 蛇蜂取らず「やっつけ」
一般学生との関係	居場所（立ち位置）ができると適応良好	「お客さん」になる危険
学習者役割	比較的取りやすい	葛藤的（内では学生、外では現職社会人）
年齢的焦り	あり	あり

※本研究科の場合、現職は実質困難

社会人経験者の経歴による分類	
	目的
臨床心理士有資格者	ブラッシュアップ キャリアアップ
心理職経験者	スキルアップ、 キャリアアップ 「臨床心理士資格を取得」
心理学初学者	進路変更 (昔の志をもう一度) (現状からの離脱) ほか

「よりよくありたい」成長エネルギー(C.Rogers)

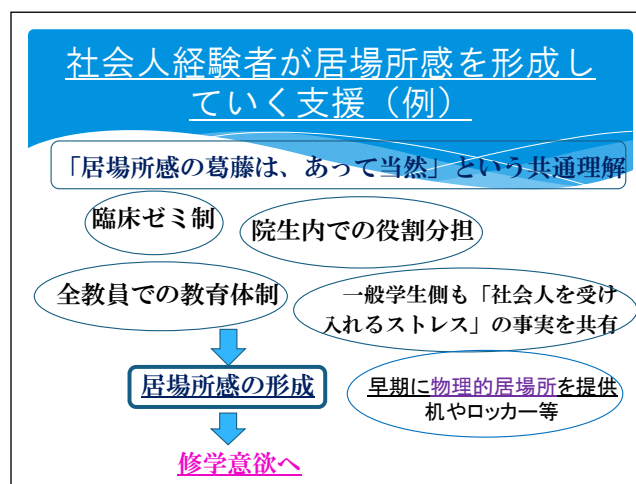
の経歴群は、ブラッシュアップやキャリアアップが想定されます。三つめの心理学初学者の場合、新しい分野への挑戦だけでなく、現状からの離脱であることも想定されます。それでも基本的には、C.Rogers が言う「よりよくありたい成長エネルギー」で入学・在籍していることに変わりはありません。

とは申しまして、経歴別による葛藤には相違が見られます。臨床心理士有資格者や心理職経験者の場合は葛藤や危機というものは比較的少ないようです。他方、心理学初学者の場合、内容を十分理解して入学した場合は葛藤が生じても許容範囲に留まるのですが、臨床心理士養成という内容をよく理解しないままに「バラ色の未来」など過剰な期待や理想だけで入学したり、「入ってしまえば何とかなるんじゃないか」という魔術的思考であったりすると、課題の負荷や期待との違いに直面したとき、「こんなはずではなかった」という自己不全感や不適応感が増大する危険も否定できません。ただ、ありがたいことに本研究科は、「臨床心理士資格を目標とする」という明確なミッションがあり、それらの学生が適応していく後支えになっていることも事実です。

経歴別による居場所感の葛藤では、各々の経歴だけでなく、家族状況などでも微妙に違います。とくに心理学初学者である社会人経験者の場合、社会人プライドと実際の実力、ジェネレーションギャップなどとのせめぎ合いを抱えながら修学していると考えられます。

移行期課題がある社会人経験者への支援例として、不適応感が学習者役割への移行期課題と見立てられる場合の支援の例を紹介します。まず、教育する側は、言わずもがなですが社会人がそれなりに人生経験を積んできていることを信頼する姿勢が大切です。「社会人としての立つ瀬を傷つけない」ことが望まれます。その上で、当事者本人も社会人経験のプライドを横に置くという姿勢が生まれると、学ぶ立場を楽しめることにつながり、学習者役割への移行がスムーズに進むことが期待されます。加えて、本研究科では、臨床心理士資格取得という明確な目標があるということや実務実習においてクライアントに実際に関わり、個別指導を受ける教育カリキュラムが必須として組み込まれていることから、入学時の動機を思い出し学生としての再適応を図ることが可能なようです。また、「学ぶ楽しさをいかに伝えられるか」については、専任教員全員が臨床心理士で相談室業務を担っていますので、教員がロールモデルとして示しているのではないかと考えております。

次に、居場所感に問題を抱えている学生の場合です。新しい場所に移行した場合、「居場所感の葛藤は誰でもあって当然」という共通認識が必要です。本研究科では臨床ゼミ制という少人数制をとりながらも、並行してオープン

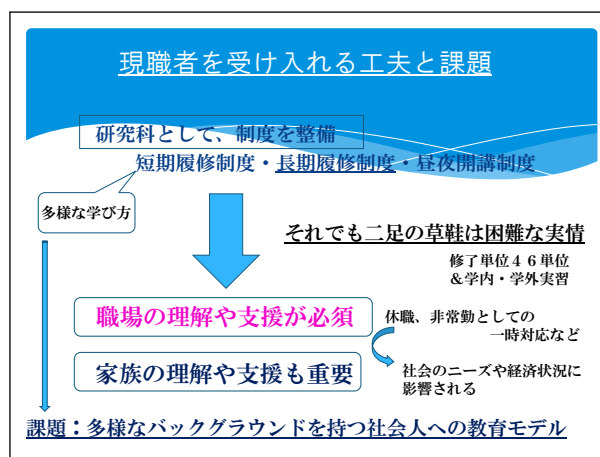


に全教員が指導に直接関わる教育体制をとっております。また、院生内での役割分担も一般学生と同じように行い、一般学生の側にも「社会人を受け入れるストレスがある」事実を共有していく教育も大切です。意外と重要なのが、物理的居場所を早めに提供することです。本研究科では、入学式当日の入学オリエンテーション後に、個人用の机やロッカーを提供し、居場所感を形成する一端を担っています。こういったことが、修学意欲につながると考えています。

本研究科は、専門職大学院として臨床心理士という専門家を養成するという社会的責任を果たす義務がありますので、入試選抜は大変重要な位置づけにあります。目的意識や動機の確認はもちろん、何より、「学生として現実的に生活できるか」の確認が社会人入学においては重要なポイントです。もう一つは、専門的学問の学びである意識であり、カルチャースクールではないという確認が必要です。さらに基礎的力量や適性の確認となっていくます。また、研究科は万能ではございませんので、提供しうる教育に関する共通理解が重要で、社会人入学希望者の期待値とのすり合わせが、入学後の学習意欲につながると考えます。

入学後は、学ぶ自由の保障と専門を学ぶ責任の教育も欠かせず、この点自体も臨床心理士養成の特徴につながる点でもあります。

社会人経験者（現職者）を受け入れる工夫と課題についてお話しすると、研究科としては、短期履修制度・長期履修制度・昼夜開講制度を提供しています。しかし、先にも述べたように「二足の草鞋」は困難な実情がございます。実際に現職者が入学する際には、長期履修制度の活用などによる「時間をかけて修学する」意識への転換に加え、職場の理解や支援



が欠かせません。例えば休職や非常勤措置などの一時的対応を認めていただけるなどの協力体制が想定されます。この点は、社会全体の経済状況に大きく影響されると言えます。また、社会人経験者の場合、「家族の理解や支援」も欠かせない要因です。ハードな教育課程をこなしていくわけですので、心理的・物理的支援が必要なのは言うまでもありません。さらには、より具体的な修了後の展望も欠かせないものです。

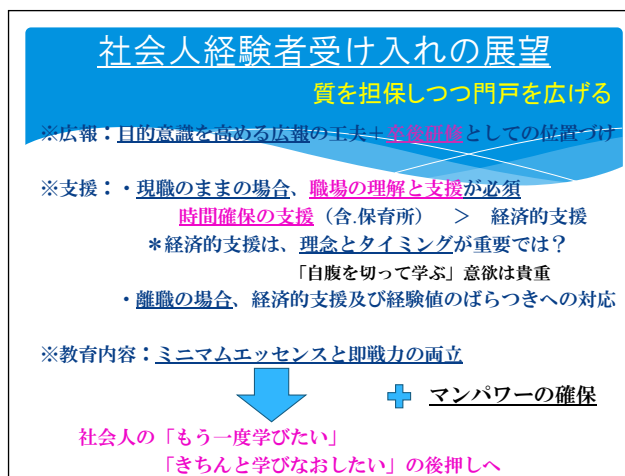
研究科としては、今まで述べて参りました、多様なバックグラウンドや経歴を持つ社会人への教育モデルの構築が課題となっていくと考えます。

社会人経験者受け入れの展望としましては、単に社会人経験者の入学を促進するだけでなく「質を担保しつつ門戸を広げる」意識は大切です。そのためには入学者の目的意識を高める広報の工夫が必要でしょうし、本研究科の場合には、卒後研修として位置づけられる短期履修制度の活用をもう少し考えていきたいところです。

支援といたしましては、現職のまま入学する場合は、職場の理解が欠かせず、経済的支援は大切です。しかしながら、実態としては、経済支援もさることながら「時間の確保」に関する支援の必要度が高いようです。経済支援は理念とタイミングが重要だと思います。メディポリス基金同様に支給するタイミングがその後の学習成果につながるのではないのでしょうか。社会人経験者が持っている「自腹を切って学ぶ意欲」自体は大切にしたいところです。他方、離職して入学する人の場合には、経済的支援が急がれます。これらが社会人経験者の家族理解の促進にもつながっていくのではないかと考えられます。

社会人経験者への教育内容としては、ミニмумエッセンスを伝えながらも即戦力をいかにつけるかが、一般学生へのそれと同様、研究科としての大きな課題となっています。これらのハード面、ソフト面を整えていくことが、社会人の「もう一度学びたい」「きちんと学び直したい」という動機づけを後押ししていけないのではないかと考えます。そのためには、経済状況が大変な国立大学ではありますがマンパワーの確保が欠かせないのは言うまでもありません。

早口になりましたが、以上で本研究科の状況を話させていただきました。ありがとうございました。



分科会2 事例報告2 『社会人の学び直し森林科学（林業）における事例』
枚田 邦宏 （農学部 生物環境学科 准教授）



農学部の枚田でございます。お配りした資料を全部やっていると、時間が間に合いませんので、多くの部分は資料を見といて下さいということにさせていただきます。

私のバックグラウンドは農学部の森林科学という分野で、森林管理及びそのための応用科学として研究・教育体系が作られてきました。農学部でも方法論（生物、化学、物理、社会科学等）によって教育を分けています。しかし、私共のところでは、森林という対象で教育コースが組まれています。森林に関して理解をし、人の関与によって維持管理、どのように利用するかという事を勉強するという分野です。生物学から経済学までいろんなことを、森林を対象に勉強して卒業していきます。また、今までは林業専門の公務員の養成がメインで教育体系ができていました。しかし、現実に変化しています。各分野の研究進化に伴って森林管理の現場からの乖離とか、専門基礎教育におろそかになる傾向が若干見られます。どうしても我々としては研究者として特定の教育研究に特化したい願望もあります。教育者としては我々の目標からいうと幅広く専門基礎を教える必要があります。このように研究と教育のギャップがあるなというふうに思っております。研究者養成の大学院大学ならば研究者養成を目的としてもよいですけど、我々の大学は違うということであり、個々の分野の基礎を押さえながら、教育者として専門基礎を教えるという立場をやっぱりなくしてはいけないなというふうに自覚しております。

さてそういう意味では、大学における社会人向け教育の試みも教育の一つとして重要と考えています。教育活動としては、いくつかの区分があるわけですが、今までは学部、大学院での教育を重視し、18歳から20歳前半の学生を対象としてきました。しかし、われわれが取り組んでいる森林管理に関する教育を考えると現場の人たちを対象にした教育も必要です。そこで、林業事業体の管理技術者あるいは生産・作業現場の統括とか実行技術者などの教育を取り組み始めました。一般的に社会人を対象にした教育をやろうというのが急に出てくるかといったら、実際には出てきません。私たちがこういう事をやろうという話が出てきたのは、現場との関係が非常に強くなったという事からです。資料に書きましたが、現場の方々、実際に林業、木

取組の経緯(1):現場との関係

2005年「儲かる林業研究会」

人工林の森林資源が充実、国産材利用の低迷
→国内林業の再検討の必要
生産の各段階の生産方法の再検討
森林所有者が生産したいと思うしくみを作りが重要

2006年度「林野庁の新生産システム事業」

鹿児島圏域が指定地域となり、鹿児島の林業・林産業の事業体と深く関わる。
個別事業体の課題と新たな取組への対応能力の限界
→林業の現場において、科学的な管理能力や交渉能力が求められる中で、大学の林学教育を受けた人材が求められているのではないか。（自分のおかれた状況把握、問題点の抽出と克服のための課題設定、課題解決方法の具体化）

材産業の関係者の方々と「儲かる林業研究会」というのを作りました。そのあと 2006 年度からは林野庁の新生産システム事業という事で、鹿児島地域の林業とか林産業をどうにかやっていこうという検討を行う場に大学が直接関わってきました。個別事業体の抱える問題に対して、解決するための新たな取り組みをしようとするとき、事業体の対応能力の限界というのがあるなということが分かってまいりました。我々自身が現場に出て分かってきました。もっと林業の現場において科学的な管理能力や交渉能力が求められている中で、大学の林学教育を受けた人材が求められているのではないかと考えるようになりました。現場で働いている人が自分の置かれた状況把握とか、問題点の抽出と克服のための課題設定、課題解決方法の具体的なところを取り組めるような人をやっぱり作ってかないといかんという、こういう意識があってやり始めました。

ちょうどその時に文科省の方から 2 つの支援事業が出てまいりました。1 つは第 1 次安部内閣の時期に、安部さんがどうも社会人教育が好きなのか、再チャレンジ社会人大学院コースっていうので、特別の教育研究経費を支給しますよというのが出てまいりました。2007 年ごろから社会人向けの大学院のコースを、既存の大学院の枠の中に入れ込んでやり始めました。これとは別に、もう 1 つは、学び直しの G P と通称言われている社会人向けの教育をやる養成プログラムを実施しました。

**取組の経緯(2) 文科省の支援
開講した教育プログラム 2 つの教育プログラム**

- (1)再チャレンジ社会人大学院コース(再チャレと略す)**
森林所有者の管理能力の低下に対して、森林組合の職員も含め森林所有者を支援する人材の養成が必要
平成19年度特別教育研究経費「再チャレンジ支援経費」社会人の「学び直し」支援プログラム(文科省)を予算 2007年4月より
- (2)学び直し「林業生産専門技術者」養成プログラム(素材生産技術者養成)(学び直しと略す)**
素材生産段階の生産経費の削減、販売する能力、投資を考えた経営管理のできる素材生産を担う生産組織を拡充する必要。
(国産材を安定的生産のため)
平成19年度「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」採択事業(文科省) 2007年11月より
平成22年度 林野庁の支援事業を受け入れる。

この 2 つの社会人向けの教育お金の面での支援があってやり始めました。まず大学院の方では、2 年間かけて森林の管理を支援するメンバーを養成すること、そして特別の課程の学び直しの方は現場での作業を管理する人間を養成することにしました。このように 2 つの教育プログラムを同時並行でやり始めました。大学院のコースは、当初は現場の森林所有者の支援をする人間ということでやり始めましたが、時間が経過する中で、院生の希望により目標を相当広げました。それぞれの現場で実際に仕事をしている中での課題を克服するためのいろんな目標を設定してやって下さいというふうな格好で今やっています。教育内容としては、大学 1 年の時には講義形式の基本的なところをやります。一番大変なのは開講の日程です。月に 2 回、土日を中心にもうやっております。平日は来なくてもいいですという、思い切った事をやっています。再チャレンジの社会人大学院コースは人数的には多くはないです。人数は少ないですけども、今まで現場でやってきたあやふやな知識を確認するとか、実際に自分の仕事の将来像を確認するとか、そういう希望の下で入って勉強してもらいます。そういう意味では資格を前提としないで、本人の学習意欲という事が前提で来てもらっています。

もう1つのコースが再チャレンジの専門、素材生産の専門技術者の養成です。内容は資料を見ていただくことにして飛ばします。この専門技術者養成の申し込みは111名、履修証明を出したのが92名おります。平成19年から試行的に開始し、実質的には20年からやって、今まででいたい年間10名から20名、近年は10名ぐらいずつ受講してもらっています。この教育コースでは、履修証明を発行するという事なので、履修時間は120時間という格好でやっております。実際に教育コースを運営していろいろな課題を抱えております。学び直し特別の課程の方は、文科省から支援をいただいていた時には担当の特任助教を常勤で配置していましたが、お金がなくなりましたので特任助教を置くことができなくなりました。そのため、今は、農学部の附属の技術職員が本務の業務と調整しながらこのコースの運営もやっています。教員は、大学の本務の学部・大学院教育にプラスして、工夫しながらクリアしています。また大学院の方も人数が少ないのでそれほど負担ではないというのはあるんですけども、土日開講あるいは現実に対応した講義とか見学を多くしたいのですが、この分に関しては予算的な限界があってそれができなくなっております。このように実際にやっていて、お金と人の問題を抱えております。

しかしなんでやっているか。もうお金がなくなったらやめればいいのというお考えだと思います。私たちがやり続けているのは、1つは社会的な意義の認識、まあ林業を取り巻くいろいろな状況にあっ

て、我々はやっぱり教育研究という格好で社会に貢献していかなんといかなんではないか、という認識です。学会で研究が認められる事も重要であるけれど、社会に認められる教育研究を重視すべきだというふうに思っています。鹿児島大学は、こういうことをするところなんじゃないか考えます。また、応用研究する上で、社会人教育で現場の人と関係を持つことは非常に有益だという認識があってやっております。社会人の今後の教育の発展という事を考えますといろいろありますけれど、大学教員の以上のような認識が1つは重要だと思います。もう1つは、大学の体制、評価ということで、今回の憲章も含めて我々のこういう事をやっている事をきちんと確認をしていただき、専門的にこれに対応する人の配置しているのはやっぱり重要じゃないかなというふうに思っております。

まとめ

社会人(生涯)教育の発展のために

- 大学教員の認識 だれに評価される仕事をするのか。
研究者:研究者仲間[学会]か、社会・地域・現場か。
教育者:18-20代前半の学生か、社会人を含めて学生か。
現在は、学会および若者による評価に偏向。
- 大学の体制と評価
地域社会との協同や社会人教育を否定することはない。しかし、大学としてこれを進めるために具体的な動きがない。
(個人の努力に任されている)
各教育研究分野(最低学部)に 社会連携や社会人教育を専任で対応する教育研究者が必要ではないか。
(この間、社会人教育センター設置(林業からはじめる)について提案してきた)

分科会2 事例報告3 『公開講座 動物の生命（いのち）と人との係わり』
高瀬 公三（共同獣医学部 附属越境性動物疾病制御研究センター教授）



皆さん、こんにちは。私の方は公開講座の事例という事で報告をさせていただきます。私共同獣医学部なんです、この公開講座始めた時は、農学部獣医学科でございまして、その時から足掛け8年続けております、何で今回の公開講座の事例報告の代表という形で今回選ばれたのか、たぶんそれだけ長く続いているからということかもしれません。今回報告する事例が公開講座の見本というわけでは決してなくて、こういう公開講座もやっているということでご理解いただければありがたいと思います。

最初になぜこの公開講座を始めたかというところのイントロのところで、こういうことをちょっと理解しておいていただきたいと思います、寿命の話をさせていただきます。一般的に寿命と言っているのは生理的寿命で、通常の状態や環境で飼育されていたら何年間生きるかというそういうことです。人を始めいろんな動物の事例を個々に示しておりますが、ある研究者は生理的成熟年齢に5年をかけることが一般的な寿命だと言われております。

ところが寿命には私は3つあるというふうに思っておりまして、2つ目が生態的寿命でございます。これは生理的寿命が例えば動物園の動物とか、水族館の動物の寿命であるといえ、この生態的寿命というのは、アフリカのサバンナを考えていただければよろしいかと思います。つまり弱肉強食の世界での寿命になるわけです。私ども獣医学を学ぶ者にとつては、もう1つ、3つ目の寿命が存在しています。これが人為的寿命です。畜産をやっている先生方もおそらくこの項が一番重要になってくるんだろうと思います。いわゆる家畜の寿命でございます。我々が意図的に繁殖して、意図的に命を犠牲にして、我々はその動物性タンパク源をいただいているわけです。この人為的寿命に獣医学科の学生、教員、あるいは獣医師となって社会に出ていく人たち、全てのそういった人たちがこの人為的寿命とまともに見つめ合って、関わっていつているという現実がございます。

それで例えばその人為的寿命でございますが、肉牛で2.5年、乳牛ですと4、5年、それからここにはレース用の軽種馬をしておりますが、5、6年です。なぜかと言いますと、もう走れなくなったら安楽死を余儀なくさせられるからです。ブタですと、肉用豚は6、7カ月です。卵を産むニワトリ、レイヤーですが、これが2年ちょっとです。そして我々が唐揚げで食べておりますブロイラーは、なんと4、50日だといひます。こういう非常に寿命が短い動物たちがいるわけです。

そして、この公開講座の第1回目の案内文の中に、こういう文章を載せさせていただい

ております。下の方ですが、「本講座は動物の命と人との望ましい関わりを多くの参加者と一緒に考えたい」、こういう思いから企画いたしました。講義の中から動物たちのことを考えるきっかけや話題が1つでも見つければ幸いだという気持ちで実施しております。講師には獣医学科の教員を中心に学外の獣医師も含めて、協力いただいております。

これは第1回目の講師及びテーマなのですが、赤く記載している所は学部外の先生方でございます。この時はまだ私どももはりきっております、12のテーマをやりました。しかもこれは6月から12月までだいたい土曜日を充てて行っております。この時に実は最初は高校生をターゲットといいますか、ぜひ高校生に聞いていただきたいということで、市内の主たる高校に出向きまして、あるいは電話をいたしまして、いろいろ案内をさせていただきました。あらかじめ参加者を募り、参加証をお渡しして毎月1回土曜日に来ていただくというような形でやりました。およそ20校から107名の方の参加申し込みがありました。この107名の人たちは、先ほどのように12回毎回来ていただくということでございます。アンケートも実施してその後の公開講座に役立てようというふうにししましたし、また12回目の修了時には、修了証というものも用意させていただきました。

これは翌年の2回目のものでございますが、この時は一般市民の方も対象にこういうテーマで、サブテーマを鹿児島県の動物たちというテーマを設けてやらせていただいております。こちらは平成19年の3回目になりますが、この時もかなりの人数が参加していただいております。こちらはその後のもの、2回分を示しておりますが、ここら辺りからオープンキャンパスで一緒にやろうということも少し試みております。平成21年度、22年度それから23年度、ともにオープンキャンパスの日に実施させていただいております。23年度は前半と後半と、後半の方は大学の大学祭の時期に合わせて、オープンキャンパスを2回に分けてやりましたのでそれに合わせてやったということでございます。なお平成20年がないんですが、これは例の口蹄疫騒動で、あまり社会の方々をキャンパス内に集めるのはどうかということで、他のいろんな催し物と一緒に合わせる形で中止しました。これは昨年のものでございます。

こういう形で現在7回を数えておりますが、いろんな動物たちの話題を提供させていただきながらやっております。参加していただく人ができるだけ多い方が、こちらもうれしいんですが、それに講演していただく講師の方のご理解とご協力が要る。それとそれを準備する裏方も要る、ということなのですが、私どもは予算はほとんど使っておりません。ボランティア的なところでやっております。

何が今後重要かと言いますと、ここですね。できるだけこれからもやっていきたいということなんですが、「初心を忘れず」ということです。最初は各高校をまわって気力あふれていたのですが、少し今ちょっと惰性に走っているようなところがあります。ですから少し初心を振り返りながら今後も続けていきたいというふうに思っております。以上です。

分科会 2 1 班

論点：社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき

ファシリテーター：西原亜矢子



西原亜矢子



丹羽さよ子



西之園直記



木村郁夫



山下 登



青山朋代



清 麗次

ワークショップ記録

分科会2 1班 (混合チーム)
論点：社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき
ファシリテーター：西原亜矢子（新潟大学大学院 保健学科研究科教員）
メンバー：丹羽さよ子（医学部教員） 木村郁夫（水産学部教員） 西之園直記（大学院医歯学総合研究科事務部総務課職員） 山下 登（与論島漁業集落） 青山朋代（(株) 悟空 経営計画室） 清 麗次（奄美市企画調整課職員）

【1】課題

学習者が求めるもの。

課題解決能力の育成・自己解決能力の育成。

「語る」ことで心理的な学習成果を満たす。

問題解決の場、解決の糸口を得る場。 より良い人生のヒントを得る。

これまでの自分から変わることができる。 ジャンルを超えた語り合い。

【2】重要な点

互いの経験をシェアする。

相互学習の場とする。

即決を求めず、気づきを求める。自己解決能力、生きる力を高める。

生涯学習についての認識。

専門の場の提示、社会問題の提示。

大学側・教員・社会人との意識の共有。

社会の現場とのギャップを埋めるツール。

肩書なしの人とのつながり。

行政との関わり。地域との関わり。

【3】具体的な提言

経験知の創出、現場の豊富な経験知。

教える者、学ぶ者、学ぶ者同士の刺激しあい学びあえる。

生活知、経験知。実践知、専門知、科学知の統合。

産業振興の礎。

職業の場でスキルアップを目指す。

分科会2 1班の報告

論点：社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき

木村 郁夫（水産学部 水産学科 教授）

皆さん、こんにちは。水産学部の木村と申します。1班を代表して話をさせていただきます。1班の論点は社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づきについてです。1班の皆さんはいろんな方たちがいます。院生の方、大学職員の方、医学部の先生、授業を今受けられている方、水産業に携わっている方、水産学部の私です。あとコーディネーターの西原先生に参画していただいております。

テーマの社会人の方が生涯学習で求めるものは何だろうかということで、ここに議論の内容を挙げました。並べただけですから整理がきちんできていませんけども、課題解決能力の育成、自己解決能力の育成をしたいことが挙げられる。それから、いろんな人が集まった社会人ですから、いろいろな経験を持っている人たちがいるということで、お互いに語ることで心理的な学習成果を満たすとか、問題解決の場とか解決の糸口を得る場、スキルアップを期待する場、よりよい人生のヒントを得るとか、これまでの自分の経験と管理のあり方について話し合いをしたいなどが、生涯学習に求めるものと議論されました。次に社会人教育・生涯学習の場では、いったいどんな事が起きるんだろうかということなんですが、

現場と教育の相互作用について、例えば水産で言えば、水産の私たちが研究を行っていることと漁業者の方たちが持っている経験知をお互いに高め合う場になるだろうということです。こちらから情報を流すと「やってみたよ」という事をやるんですが、そういうようにお互いに勉強する場であり、学習する場であるということですね。

それから多様な背景を持った社会人の方が来ているので、その人たちの間での相互作用もある。お互いに可能性を上げる事が期待される。異なる多様な視点を得て物事を捉えること、社会人生活における利益の相互関係とか肩書なしのつながりができることが期待される。

社会人の経験知の創出とか現場の豊富な経験知、ここがちょっと大変なところなんですけれども、それを教える者、そこから学ぶ者、学ぶ者同士が刺激し合い、学び合える場について、結構大変じゃないかなと、面白いところなんですけど。社会人の方が生涯学習に参加した時に、いろんな経験を持っている方が集まって来ているので、教える方も単純な教え方ではだめなんです。かなり専門性の高い事を要求されてくるだろうし、それから教える方ができないって事もあるでしょう。そういう場合は、やはりチームで対応するなどしないと、これはできないでしょう。つまり、生涯学習の場は、いわゆる研究者、教える側にとって、相当に真剣な場であり真剣に対応しなくてはいけないということになります。自分たちが言った事が実践される場であるという事になります。3番目に書いてある、生

活知、経験知、実践知、専門知、科学知の統合、これはまさにそういうことが起きるんじゃないかなという事を期待しています。

ですから、生涯学習をやるとなった時に、いわゆる普通の授業の延長線でやろうということでは、これはたぶんできないだろうと考えます。4番目の、このチームを組む、専門家もやっぱりチームを組んで対応しないと、なかなかできないか、そういう形にならないんじゃないかと思います。それで産業振興の礎、基礎になると期待します。こういう生涯学習をやることによって、地域の活性化にもつながるでしょう。それから職場でも、やはりスキルアップを目指すという、そういう効果もあるかなと思います。

互いの経験をシェアするって重要な点ですね。それから生涯学習を相互学習の場とする事、即決を求めず、気づきを求め、自己解決能力、生きる力を高める。生涯学習についての認識、専門の場の提示。このような専門の場に関する生涯学習がありますよという、この提示をしなくてはいけないということです。それから社会問題の提示とか、大学側、教員、社会人との意識の共有。これはどうしても必要なことであります。生涯学習の場を作る時に、これがないとだめだろうということです。社会の現場とのギャップを埋めるツール。あと肩書なしの人とのつながり、地域との関わり、行政との関わりですね。

生涯学習の場は、単一の学生が集まっているというよりは、社会人の方がたくさんいるという、多様な経験を有した人たちの場になるということで、これは教員にとっても大学側にとっても非常に重要な場であるという、そういう認識です。以上です。

分科会 2 2 班

論点：職員自身のキャリア形成

ファシリテーター：大迫香寿枝



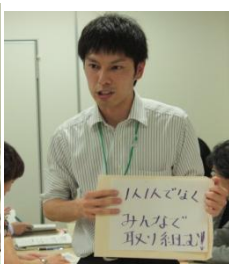
大迫香寿枝



鬼塚剛生



原之園さつき



久永祥宏



畠中美子



藤田和也



辻 修子



江頭大典



西崎龍平



采女博文

ワークショップ記録

分科会2 2班 (職員チーム)
論点：職員自身のキャリア形成
ファシリテーター：大迫香寿枝 (Coaching STEP 代表・岳の学びや代表)
メンバー：鬼塚剛生 (研究国際部社会連携課職員) 原之園さつき (学術情報部情報管理課職員) 久永祥宏 (研究国際部社会連携課職員) 藤田和也 (総務部人事課職員) 辻 修子 (研究国際部国際事業課職員) 江頭大典 (医学部・歯学部附属病院総務課職員) 西崎龍平 (医学部・歯学部附属病院総務課職員) 畠中美子 (研究国際部国際事業課職員) 采女博文 (大学院司法政策研究科教員)

【1】課題

一生懸命やっても人事で報われない。
 スペシャリストになりたい。ロールモデルがない。
 流れがない。キャリア形成を自分でイメージしていく。
 保守的な職場からの脱却。時間に追われている。
 ぬるい・甘い。人事異動はコントロールできない。

【2】重要な点

教員に人事の推薦権。
 キャリア形成に職員の意見を反映させる、意見を汲み上げる。
 育てる人事計画を。
 先輩の経験を聞きたい、キャリアカウンセリングが必要。
 評価制度の見直し (相対評価の実施。低評価者の危機感をあおる。部下から上司に対する評価制度の導入など)。えさを与える (昇任、昇給等)。
 学びの環境整備 (勤務時間内に公開講座の受講)。
 本当に人材育成を考えている??
 人材育成憲章を作る!

【3】具体的な提言

働き蟻はダメかも。歯車ではダメ。経験を活かすチャンス。職員のモチベーションをあげる工夫を! OJT を通して効率的に! 新人教育に工夫を! 若手から自発的に動くようにする。自己満足。結束力。大学への愛。イノベーション。キャリアゴール。生え抜きで局長になる。

分科会2 2班の報告

論点：社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき

江頭 大典 （医学部・歯学部附属病院総務課 人事係 係員）

お疲れ様です。鹿児島大学、事務部の職員の江頭と申します。私たちに与えられた課題が、職員自身のキャリア形成という事で、なぜキャリア形成が生涯学習憲章に関係するかという、キャリア形成自体が生涯学習につながるのではないかということで、この議題に沿って話し合ってみました。メンバー構成としましては、ほとんどが事務部の職員となっておりますが、学長補佐の采女先生がいらっしゃいます。課題、問題改善メニューとしまして、見てお分かりの通り、ほとんど愚痴です。

民間の方もいらっしゃいますんで、私はほんとに恵まれた立場にいます。それを踏まえて、この若造が何を言ってるんだという感じでお聞き下さい。

本学の研修制度は整っておりまして、自分ががんばればキャリア形成できるんですけども、なかなか一生懸命やっても報われないとか、ロールモデルがないとか、流れが見えないとか、ただのわがままですね。何が言いたいかと言いますと、鹿児島大学の事務部の職員は、なかなかのぬるま湯に浸っている方がいらっしゃいまして、私も民間を経験してからこの大学に拾ってもらったんですけども、その立場で思う事が、保守的な職場から脱却できていないのではないかと思います。変えたくないとか、仕事ができるできないではなくて、するしないの世界ですね。それでそのような方々には、人事評価の結果次第で辞めたい、という意見が出ました。私の意見ではありませんので。

重要な点としまして、人事評価をもうちょっと工夫していただければ、もっと若手のやる気が出るのではないかなと思います。先ほども申し上げたように、仕事をしない方、低い評価を何年間か継続して取った場合は、免職とか減給とかやっていいと思うんです。ただそれができない、してもらえない、このもどかしさ。

具体的な例としましては、こちらに記載してあるようにいろいろな意見が出ましたが、ほぼお金を稼ぐのが目的でした。目の前で餌を与えてもらえれば、若手職員はいくらでもがんばれます。20代で係長とかもあっていいと思うんです。ただそれが無いんで、ここにいらっしゃる皆様方に言っても一緒なんですけども、若手職員がやる気が出るような仕組みを作っていただければありがたいなと思うんです。

最後に、人材育成憲章を作ればいいのかという意見も出ました。日本初です。すみません、取り止めのない話で。以上で2班終わりです。

分科会 2 3 班

論点：社会人教育プログラム（カリキュラムや体制）の難しさ

ファシリテーター：寺岡行雄



寺岡行雄



菊永俊郎



安樂和彦



中原睦美



高峯和則



田仲哲也



嶽崎俊郎

ワークショップ記録

分科会2 3班 (教員チーム)
論点：社会人教育プログラム（カリキュラムや体制）の難しさ
ファシリテーター：寺岡行雄（農学部教員）
メンバー：菊永俊郎（教育学部教員） 安樂和彦（水産学部教員） 中原睦美（大学院臨床心理学研究科教員） 高峯和則（農学部教員） 田仲哲也（共同獣医学部教員） 嶽崎俊郎（大学院医歯学総合研究科教員）

【1】課題

- ・社会人のニーズと大学が提供可能なメニューとのすりあわせ
- ・教員のニーズと大学が提供可能なメニューとのすりあわせ
- ・担当可能な講師の確保（学内での教員の協力要請）：プラスアルファの業務と見るか本務とみるか・・・社会貢献・地域貢献、国際化
- ・履修プログラムを本学生にも履修させたい（水産学部）
 - ・・・履修の方法で対応可能か
 - ・・・講義負担の軽減というより「重要なもの」としての位置づけ
 - ・・・★「プラスアルファ」という現状認識をいかに「本務」として位置づけていくか：予算やマンパワーの配置につながっていくのではないか
- 「大学の大事な仕事である」関わり教員の意欲にもつながる
- 資格取得後の生かされ方がどうか・・・
- ・企業組織、ジャイカ、行政の連携がないと厳しい
- 関係機関のノウハウとすりあわせての負担軽減が必要か？マンパワーの充足

【2】重要な点

鹿児島大学の任務としての位置づけ。

講師の確保。

予算の確保。

時間の確保。

【3】具体的な提言

「プラスアルファ」という現状認識をいかに「本務」として位置づけていくか：予算やマンパワーの配置につながっていくのではないか。

「大学の大事な仕事である」：関わり教員の意欲にもつながる。

鹿児島大学の任務として社会人教育を位置づけてほしい。

分科会2 3班の報告

論点：社会人教育プログラム（カリキュラムや体制）の難しさ

嶽崎 俊郎 （大学院医歯学総合研究科 健康科学専攻 教授）

嶽崎と申します。班を代表して、述べさせていただきます。3班は実際に生涯学習の場を提供している教員のグループです。今までの経験を基に様々な意見を出してもらいました。公開講座や大学院教育、留学生の教育、さらに JICA のコースなど国際的なことも含め、多様な取組みを行っていらっしゃいました。3班で頂いたテーマは、社会人教育プログラム（カリキュラムや体制）の難しさということです。まず、課題として、社会人のニーズと大学が提供可能なメニューとの間に存在するギャップがあげられます。そのため、お互いに擦り合わせが必要です。大学の教員として普段関わっている事と、社会の現場で実際に行われていることには一致しない部分も多く、すべてのニーズに対し、大学が必ずしも提供したり、カバーできる訳ではありません。ここに難しさがあります。

また、担当可能な講師、マンパワーの確保も課題です。学内でも、さらに他の教員の協力をお願いしないといけない場合もあります。

更に、この仕事をプラスアルファの業務とみるべきか、本業とみるべきかという議論もありました。これに対し、社会人教育は社会貢献の1つでもあり、地域貢献や国際貢献でもあるという意見が出ました。

また、履修プログラムを本学生にも実際に履修させたいという意見も出ました。水産学部の教育プログラムは非常に内容が良いので、本学生にも履修させたいとの意見がありましたが、夏期休暇中に行っているため、なかなか実際の履修は難しいということです。これは方法論的なところなので、今後、何とか工夫ができないだろうかということでした。

今後、社会人教育に関わる業務はボランティア的なプラスアルファである現状認識を、本業としての位置づけにする必要性和重要性があります。この認識をしっかり大学として持っていただければ、予算やマンパワーの確保他や配置につながっていくのではないかと思います。社会人教育は大学の大切な仕事であると位置づけしてもらえば、それに関わる教員の意欲の向上にもつながるということです。

更に、資格取得後の生かされ方も考える必要があります。例えば何か認定証みたいなものを出し、それが履歴書に記載することができるようにするなど、将来生かしてもらえるような工夫も必要です。

また、企業や行政、JICA などとの連携がないと、マンパワーとか予算の面で難しい、厳しい部分もあります。特に予算面では、関係機関とのお互いの負担軽減がうまく調整できれば、ウイン・ウインな関係も構築できます。お互いのノウハウを生かしたマンパワーも同様です。

以上をまとめますと、難しさに関して重要なポイントは、マンパワーと予算、時間の確

保に集約されるのではないかということです。

最後に提言として、先ほど出た社会人教育はプラスアルファの業務という現状認識を本業として位置づけていくことが重要かつ必要であるということです。これが位置づけられれば、予算やマンパワーの配置につなげられる道筋ができます。今回この憲章を作るにあたって、大学の大切な仕事、教員の本務の1つである事を盛り込んでいただければ、それに関わる教員の意欲の向上にもつながると思います。社会人教育は、鹿児島大学の本務として是非、続けて欲しいということがこの班の総意でした。

以上です。

分科会2 4班

論点：社会人学生のニーズに応えることの難しさ

ファシリテーター：桑原季雄



桑原季雄



枚田邦宏



井村隆介



菊地聖史



角之上知樹



金子 満



近藤英二

ワークショップ記録

分科会2 4班 (教員チーム)
論点：社会人学生のニーズに応えることの難しさ
ファシリテーター：桑原季雄（法文学部教員）
メンバー：枚田邦宏（農学部教員） 金子 満（教育学部教員） 井村隆介（大学院理工学研究科（理学系）教員） 菊地聖史（大学院医歯学総合研究科教員） 角之上知樹（鹿児島市企画財政局 財政部職員） 近藤英二（大学院理工学研究科（工学系）教員）

【1】課題

社会人学生は時間がない、ニーズは多様。教員の意識（研究レベルはどこまで）。

【2】重要な点

履修プログラムを見直す。

→社会人の学びのニーズには3段階

- ① 学位・資格＝研究者間でも認められる研究成果
- ② 専門性＝一定の専門性をもって実務に適用・応用できるレベル
- ③ 教養＝知識を深めたい、知見を広めたい

大学側は、社会人学生のニーズを拾えるか。

→①～③のどのニーズかを拾い、応えるための体制づくりが必要。

【3】具体的な提言

教員の積極的取組み・・・評価・インセンティブ。

→例：①のレベルの社会人学生には、土日・時間外の指導あり。この取組を評価し、なんらかのインセンティブを教員に。

専任のコーディネーター＆スタッフ。

→地域・社会人のニーズを的確に拾い上げ、大学が①～③の各レベルで対応できるようつなぐ。

分科会2 4班の報告

論点：社会人学生のニーズに応えることの難しさ
角之上 知樹（鹿児島市企画財政局財政部）

4班の社会人学生のニーズに応えることの難しさというテーマで、話し合いをさせていただきました。私が発表させていただきますのは、社会人学生として大学院の方で鹿児島大学にお世話になった経験があるためです。鹿児島市の職員の角之上と申します。よろしくお願いします。

1枚にまとめてポイントを打ってありますので1枚だけでご説明しますが、課題として出ました社会人学生の課題はやはり社会人学生というのは時間がない。いわゆる青年学生と比べたら時間がないということです。一方でニーズが実は多様である。後からまたご説明しますが、①学位、資格を取るという形で専門的に研究をしたいというレベルの方もいらっしゃる、②自分の仕事、業務に専門的な大学とかの知識を生かして業務ですぐ使いたい、そういうレベルの方もいらっしゃる、単純と言いますか、③公開講座なんかの形でちょっと教養を身につけたいというレベルの方ということで、ニーズは3種類ぐらい、3段階はあるんじゃないかということです。

もう1つとしては社会人学生の方を受け入れる、あるいは共有をするという場合に教員の皆さんの意思というのが課題としてあるのではなかろうかということが出ました。

具体的に対策として、どういう事が大事かということになりまして、1つ目のまとめは実習プログラムを見直してはどうだということです。先ほどもご説明しましたように、社会人の学びのニーズには学位、資格等の専門的な知識、大学から認証されたところでもらえる修士とか学士といったような資格・レベルがまずあり、それを求めている社会人学生には、それならば、きちんと論文を書き、研究を積み重ねて、実験等しなければならないというレベルと、2番目にはある程度先生と一緒にあって、あるいは大学の先生の皆さんと一緒に研究をしたり実験をしたりして、その分野の専門的な知識を身につけて自分の業務に生かしたい。

私は行政の職員ですから例えば桜島の災害とかがあれば、何かが起きた時に正しくこうあるべき、というような事をしっかりと勉強をしてそれを住民の方に伝えられるような形で業務に生かすというようなレベルで、専門性の勉強がしたいわけです。けれども大学の現状は、論文を書いて学会で発表して資格を取る、学位を取るというレベルの方を求めている。

3つ目には公開講座等で自分の興味のあるいろんな話を大学の先生から聞いて、教養にしたいという、レベルがある。にもかかわらず、大学は、今1番目か3番目のレベルにしか対応ができていないのではないかと。真ん中の2番目について、履修資格、履修証明等出すことで、この人はこういう分野については間違いなく鹿児島大学でしっかりと勉強した

人です、ということが言ってあげられる。場合によっては、その後、専門性をもって1番目のレベル、学位、資格をさらに取りたい、となった場合には、その履修証明が単位の認定等で生きると。修士課程等に入った場合にですね、というような考え方をできないだろうか。

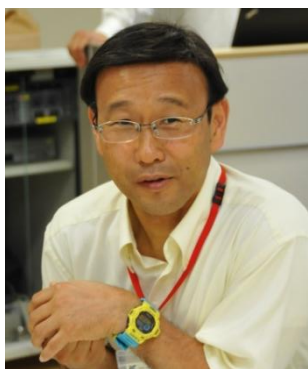
提言では、社会人の学生のニーズを拾えるのかに対する具体的な答えとしてこの班で出てきましたご意見は、教員の方が積極的な取り組みをする、ということです。社会人の方のニーズに、1番目、2番目、3番目、このレベルで大学に来ていらっしゃるのだということについて、どういうふうに答えるか。やはり大学の先生方は、自分は研究者として学会で発表される事が一番の評価であるという現実がある。であれば社会人の学生の方のニーズを、例えば、1番目の学位が取れるレベルに応えるには、積極的に土日も含めて時間外を含めて、時間をかけないといけない場合も出てきます。私もそうだったんですけども、大変お世話になりましたので、そういった先生方の積極的な取り組みというものを評価する、あるいは何らかのインセンティブとして与えて差し上げるということで、先生の側と社会人学生のニーズに、より積極的に取り組んでフォローしてさしあげるような形にもっていききたい。

もう一つは、社会人学生のニーズを拾って応えるための体制としては、個人の先生、個人の教員の方がその社会人の方を担当しただけで拾い上げるということ、応えるということは難しい。特に2番目ですとか3番目の社会人の方のニーズについて、実際の社会、鹿児島という地域の中でこういうニーズがある、こういう勉強をしたい、学びをしたいというような事を的確に拾って、その分野に精通した研究者、教員の方につなぐということが出来るかどうかというのが大事であります。それを考える時にはやはり先生方、指導教員になった先生が個別に動くのではなくて、専任のコーディネーターができるような組織なり部署なりを作って、その人がスタッフも揃えて地域のニーズを拾い上げて、先生方とつないで、こういった1、2、3のニーズに応えられるような形に持って行くということが必要であろうと思います。

というようなことで、議論はまとまったということによろしいでしょうか。代理で発表させていただきましたので、また懇親会で正しく先生方にお話をうかがって下さい。ありがとうございました。

分科会 2 5 班

論点：社会人学生としての学びをよりよくするために
ファシリテーター：福満博隆



福満博隆



角マリ子



伊地知美智子



上野浩三



亀田晃一



穂満康雄

ワークショップ記録

分科会2 5班 (社会人学生チーム)
論点：社会人学生としての学びをよりよくするために
ファシリテーター： 福満博隆（教育学部教員）
メンバー：角マリ子（保健学研究科保健学専攻・博士後期課程学生） 伊地知美智子（島津興業） 上野浩三（南国アールエスリカー営業課） 亀田晃一（MBC 気象予報士兼カメラマン） 穂満康雄（公開授業生）

【1】課題

- ① 学習環境の構造的問題→学習時間の不足・離職による経済的支援の必要性。事務手続きの環境が整っていない。
- ② 学習環境の機能的問題→カリキュラムの問題・研究者実務者の認識の違い。
教員とのマッチング・イノベーション。
- ③ その他→家族、会社の理解・現役学生との温度差 教員の態度。

【2】重要な点

- ① 長期履修制度・会社と大学の連携。
大学側の対策として社会人が学びやすいシステムづくりをする。
- ② 社会人向けに柔軟なカリキュラムや時間を対応させる。授業の中に職場現場の問題を取り上げる。卒業生同士のつながりと大学との連携を構築する。
教員との歩み寄り。資格や学位などの価値を大切にする。

【3】具体的な提言

- ① 学んだことを適切に評価し卒業後の活躍の場をつくっていく。
- ② 広く社会に生涯学習の必要性を認識させ啓蒙活動を行う。



持続可能な学びの循環の創出。

分科会2 5班の報告

論点：社会人学生としての学びをよりよくするために

亀田 晃一（MBC 気象予報士兼カメラマン）

では分科会2の5班を担当しております、私はMBCで気象予報士と放送技術に従事しています亀田と申します。よろしくお願いします。「社会人学生としての学びをよりよくするために」というテーマで考察しましたが、今いくつかの班の発表を見ていまして、やはりどうしても似たような答えに収束していくんだなということを感じました。

私ども5班は、様々な職業を持つ社会人学生の経験者、もしくは現在学生であるという人たちが集まって、現在感じている様々な課題を出し合いました。社会人学生として学びを続けるために、どのような環境の整備が必要なのかということをテーマの中心に据えて議論しました。

まず皆さんが考えている課題というものを出示いただきましたが、大きく分けると、①学習機関における学習環境の構造的な問題、②学習環境の機能的問題、③家族の理解の問題。このような3つの大きな問題に分けられました。

社会人院生としましては、学習時間の不足が最大の課題で、昼間の学生と比べて仕事をしているために、どうしても学習時間が制限されるということがあります。夜間や土日に通うという手段もありますが、うち（大学）は夜間がメインだ、うちは土日メインだよというふうに（大学側に）決められても困ることがあります。社会人で父親だと、土日は父親としての家庭での役割があるため、夜間に開講するか、土日に開講するかは学生と教員で十分話し合い、柔軟に対応してほしいという意見が参加者からありました。

あとやはり大きな問題としては、離職ですね。この離職っていうのはどういうことかと言いますと、学ぶ時間を確保しようとすると、会社や役所における在職が厳しくなるという切実な意見もありました。で、現在の職業を辞めるとなると、やはりその後の経済的な問題もあります。こういった職を離れても、また会社に戻ってこられる環境ならいいんですけども、なかなかそれは難しいということが現実となっています。

社会人院生にとって大学の事務手続きの環境が整っていないというのは、大学側の事務手続きがどうしても昼間の学生に合わせられていて、社会人だとどうしても夜間とか土日にしか手続きがとれないという時に、わざわざそのために休みを取って昼間に行かなければならないという状況が生じているという報告もありました。

あとカリキュラムの問題。先ほど4班の角之上さんの発表にもありましたが、実は私も角之上さんと同じ大学院博士課程を3月に修了したんですけれども、この大学院では、グループで研究する「プロジェクト研究」を最大の特徴としています。グループで地域課題について研究し、異業種、そして研究テーマの違う人たちが、ある1つのテーマを考察していくというのは、非常に意義があり、また自分の研究の専門分野と違う分野からアプローチできるということに関しては、学ぶ部分は多くあると認識しています。しかし様々な

ご職業の社会人が同時に集まってプロジェクト研究をするというのは、時間的に非常に困難でありまして、3年という標準年限でドクター、または2年でマスターの学位を取得したいという意思があっても、なかなか標準年限での修了が難しくなっています。これらに関して少し柔軟に対応してもらえないかと思います。

次に、上級の研究者である大学教員と実務者である社会人院生の研究に対する認知の違いというのは、教員とのマッチングの問題となっているようです。結局社会人院生がやりたいという事と、教員がさせたいという事に関して時折齟齬があると、なかなか論文を書き上げるまでに行きつかない、という課題もあります。

その他には、やはり家族を抱えていますと、家族の理解とか、ゼミへの取り組みへの熱意が現役学生と比べ大きな温度差を感じる場合がある、そういった課題が浮かび上がってきました。

では、このような社会人院生を取り巻く課題をどう改善すればいいかなんですが、まずやはり財政的な面で言いますと、長期履修制度は有効かと思います。私もそれを利用したんですけども、3年の標準年限を5年でということで、仕事や家庭のサイクルに合わせて時間をかけて勉強できます。また学費にしても、3年間の授業料を5年間で払うという、ローンみたいなもので、財政的にも救われる場合があります。

そして社会人院生をかかえる会社と、受け入れる大学の間の連携や理解がをもっと深まるべきべきではないかと考えられます。学びたい学生と教えたい教員とのミスマッチングを克服するためには、やはり十分に話し合ってお互い歩み寄ることが必要かと思います。教員側としては科学知、専門知を教え込みたいと思うでしょうし、学生側としてはやはり経験知、生活知、これを前面に出して研究に取り組みたいと思うでしょう。教員側としては修士、博士課程であれば、そのレベルの論文を書かせなければならないでしょうし、ここは十分な話し合いが必要であろうと思います。

あとやはり修了した後の資格、学位などの価値、これを十分に会社側に理解してほしいし、社会人院生側も会社側に対してアピールする必要があると考えられます。そして、修了生同士のネットワークや大学との関わりを卒業・修了後も継続していく必要があるだろうと思います。

まとめですけれども、具体的な提言といたしましては、まずやはり学んだ事を十分社会、会社も含めてなんですが、適切に評価してもらい卒業・修了後にその活動の場を確保していくということと、やはり生涯学習の観点から、大学側も積極的に啓蒙活動を行っていくことが重要かと思います。

結論といたしましては、やはり「持続可能な学びの循環の創出」が大切で、学んだ人がまた社会に戻る、で、社会に戻って評価されるからこそ、また次の新しい人が学びに入る。その循環を創出できればいいのではないかという結果にたどりつきました。有難うございました。

分科会 2 6 班

論点：自治体ニーズに大学がよりよく応えるために

ファシリテーター：佐久間美明



佐久間美明



池田 健



下川悦郎



小島早智子



是枝幸雄



西園香緒利

ワークショップ記録

分科会2 6班 (自治体チーム)
論点：自治体のニーズに大学がよりよく応えるために
ファシリテーター： 佐久間美明（水産学部教員）
メンバー： 池田 健（垂水市企画課計画調整係職員） 下川悦郎（地域防災教育研究センター教員） 小島早智子（薩摩川内市企画政策部コミュニティ課職員） 是枝幸雄（南さつま市保健課健康推進係職員） 西園香緒利（鹿児島市生涯学習課職員）

【1】 課題

自治体のニーズに大学の専門性が寄り添い合うものであると良い。
自治体ニーズと各教員の研究ニーズをコーディネートする役割が果たされない。
大学が有する様々な資源の公表が大切。
自治体から大学への情報提供統一化、市町村側の明確な課題設定。

【2】 重要な点

自治体の実態(具体案が必要な待ったなしの課題)をしっかりとつかんで欲しい。
地域に足を運んで欲しい。

【3】 具体的な提言

自治体の事業に大学も参画する！
大学の窓口を広く！！（相談内容に応じて受け皿を優しくソフトに。）
大学の求めるモノ・事・人と自治体の求めるモノ・事・人を多様な視点から
気軽に語れる機会が欲しい。

分科会2 6班の報告

論点：自治体のニーズに大学がよりよく応えるために

西園 香緒利 （鹿児島市生涯学習課）

こんにちは。鹿児島市の西園と申します。今日は4つの自治体を代表いたしまして報告をさせていただきます。私どもの論点は、「自治体のニーズに大学がよりよく応えるために」ということでございますが、まず申し上げます、「頼りにしています、大学を」。それに基づき、今からお話しさせていただきます。

今までいろいろ報告をお聞きしましたが、課題といたしましては、他班と関連する事がいっぱいございます。一言で言うならば、自治体のニーズに大学の専門性が寄り添ってくれたらという願い。そして、私ども自治体の方もしっかりと形を作っていくと言いますか、私どもの方も課題をしっかり把握をしていく必要があるのではないかと考えております。そのためには、お互いの情報をしっかり交換して参りたいと考えております。

重要な点といたしましては、大学側が自治体にどのような事を望んでいるのかというあたりも含めて、それぞれの自治体の実態をまずはしっかりつかんでいただけたらありがたいと考えております。ぜひ、それぞれの自治体に来ていただいて、話を聞いて、見ていただけたらと思います。

提言と言ったらちょっとおこがましいんですけど、こうしてもらえるとありがたいなと思う事を書きました。それぞれの自治体が様々な事業を行っておりますが、ぜひ大学も参画をしていただきたい。また、大学に相談に行きたいと思っている自治体はたくさんございますが、その相談内容に応じて、受け皿を、ここがポイントなんですが、やさしくソフトに、何をしに来たのじゃなくて、そうですかと受け止めていただけたらと思います。

最後に、大学の求めるものと自治体の求めるものを、多様な視点から気軽に考える、気軽に語れる、そういった機会がこれから増えたらありがたいと考えております。以上です。

分科会2 講評

高井 絢 文部科学省 生涯学習政策局 生涯学習推進課 課長補佐



皆様、大変楽しいお話をありがとうございました。私は、大学と地域の連携にかかる仕事と共に社会人の学び直しの機会の拡大にかかる仕事をしており、学び直しにこういったものが有効かということを日々考えています。そこで、2班が学び直しにかかる議論をされると聞いて最初は1班の講評をお願いされたのですが、良い刺激をいただこうと思い、2班講評を担当することとなりました。

各班のことを少しずつお話しながら最後に政府の取組についても少しご紹介させていただければと思います。

1班からの、通常の授業と社会人向けの授業一緒にしていくのは困難が伴うというご意見については、その通りだと思って聞いておりました。3班、4班、5班からの学び直しにあたる事務手続きの簡素化であったり、教える方のインセン

ティブの付与部分であったりといったことについては難しいところもあると思いますが、ちょうど鹿児島大学が今回憲章を作りますので、できるところからやっていただければと思います。

6班は、大学と自治体とが連携して一緒に学び直しの取り組みを進めて欲しいとの話をしていました。4班をはじめ、多くの班でも同様の意見が出ていたので、是非この会が終わった時の懇親会などで自治体、大学関係者共々お話をしていただいて、協力できることから協力していただければと思います。

2班の大学内の事務職員にかかる公正な評価が必要との意見について、どのような組織においても大事なことで、今後大学に限らず、広く公正な評価が行われるようになればと思います。

学び直しについて文部科学省にかかる取組を簡単に紹介致します。当省では、学び直しについてキャリアアップ型、キャリア転換型、教養型の3類系があるだろうと考えております。教養型については公開講座を始め多くの学びの機会があり、学ぶ人も比較的多いのですが、キャリアアップ型、キャリア転換型については、諸外国に比べまだまだ少ない状況が続いています。何が社会人が学び直しを進めようとした時に障害になっているのか。それは、やはり時間と資金と、あとは良い学び直しプログラムがないという事実、その3つが大きな要因になっているのではないかとことがあります。時間の制約については、学び直しにかかる企業側の理解を得ることが必要ということでなかなか難しいのですが、企業に対するインセンティブの付与、例えば学び直しを促進する企業に対する奨励金の付与や税制優遇といった方法が考えられます。奨励金等については現在でもある程度はある

のですが、なかなかそれも足りないという部分があります。学び直しにかかる資金については、教育訓練給付金をはじめ様々な支援制度があるのですがあまり活用されていない。何故活用されないかという事も含めて、再度検討していく必要があるということを考えています。

最後に学び直しプログラムの提供については、企業や社会人のニーズにマッチしたプログラムが不足しているのではないか、というのが懸案事項です。現在企業と大学や専門学校がコンソーシアムを組んで、企業のニーズを汲み取り、キャリア形成に役立つプログラムを作るという事業があるのですが、この事業を更に広げていければと考えております。

今、18歳人口がどんどん減少する中で、大学における18歳モデルの打破と言われていて、社会人もどんどん大学で学んでもらうことが社会にとっても大学にとっても重要だろうという話があります。今後は、大学が、地域貢献の一環としてという意識ではなくて、本当に大学として必要な事として学び直しを推進していくという時代が来るだろうと思います。是非引き続き皆様もいろいろ検討していただきながら、学び直しを推進していただければと思います。ありがとうございました。

「鹿児島大学生涯学習憲章」策定

ワークショップ

第3部：全体発表会・懇親会

(会場：鹿児島大学生協中央食堂)

17：30-18：00 全体発表会

開会挨拶 合田 隆史 文部科学省 生涯学習政策局長

分科会1 講師の総括

亀野 淳 北海道大学准教授

分科会2 講師の総括

西原 亜矢子 新潟大学講師

閉会挨拶 住吉 文夫 鹿児島大学理事（研究担当）

18：00-19：30 懇親会

分科会1 総括

亀野 淳（北海道大学 高等教育推進機構 生涯学習計画研究部門 准教授）

北海道大学の亀野と申します。終わってすぐで、なかなかこれをまとめるというのは非常に難しいのですが、私は分科会1を担当させていただきました。分科会1では、社会の要請と学生教育の充実というテーマで、教員の方、職員の方、学生の皆さん、それから卒業生の方等々、かなり多様なメンバーで6つの班に分けて議論をしていただきました。それぞれ1班がこうだ、2班がこうだと言ってもなかなか分かりにくいと思いますので、全体を通して簡単にお話をさせていただきたいと思います。



先ほど申し上げましたように、いろんな立場の方がおられまして、非常に面白い議論ができたかなと思います。その多くは、そのステークホルダー間の関係ということにまとめることができるのかなと思います。例えば大学と地域社会という関係では、大学全体と地域社会のいろんな問題が出て参りました。

例えば6班（卒業生チーム）では、大学の教育と地域社会のニーズというのが、必ずしも合っていないのではないかという議論がございましたし、教員と地域社会という関係でみましても、これは1班（混合チーム）や2班（教員チーム）にもあったのですが、現状では個人ベースの関係にとどまっているので、これを組織ベースにやっていくということが必要かもしれない。ただ、それに伴うデメリットもあるのではないか、というような議論がございました。それから学生と地域社会という観点でみますと、3班（教員チーム）とか5班（卒業生チーム）がそういうことで議論をされていたようですが、学生から見れば外との接触が非常に少ないというようなまとめになったと思います。

次に学内ですが、学生と職員という関係でみますと、これは4班（職員チーム）の方が整理されていたのですが、やはり職員側が学生のニーズの把握というのがまだまだ不十分ではないか。それから職員も学生のロールモデルとしてキャリア教育などにも参画すべきではないかという意見がございました。一方、学生と教員というその関係でみますと、例えば5班は、学生がまとめたのですが、教員個人それぞれによって格差があるのではないか、非常に地域との関わりに熱心な先生もいるし、そうでない先生もあり、あまりに格差が大きすぎるのではないかという意見もありましたし、それから6班（卒業生チーム）では教員が学生に対して研究とか勉強の面白さを十分伝え切れていないのではないかという意見もございました。ステークホルダー間の関係ということで整理しますと、そういうことが言えるかと思います。

あといくつか個別の問題としては、例えば学生に対する教育ということで言えば、知的

好奇心とかそういうものを教えるような教育が不十分、あるいは自ら学ぶスキルというものを、大学の学生に十分伝え切れていないのではないかと、そういう教育が不十分ではないか、という話がありました。3班（教員チーム）では、学生が内向きで地元志向が強い。鹿児島大学の学生さんは、そのようですが、外との接触が非常に少ない。だから早期に外との接触というのをもっと持つべきではないか、という意見もありました。

また別の視点で見ますと、教員については、例えばインセンティブの問題であるとか、先ほど少し申し上げましたが、面白さを伝えるとか研究のアピールというものがまだまだ不十分ではないかという意見もありました。

実社会との関わりというような観点で議論するにあたって、分野によってかなり異なるので注意すべきではないか、という意見もありました。

あとはいろんなサポートが重要だということで、一つは予算です。それからリスク管理やその他のサポートなどが重要だということで、2班、3班を中心に議論がありました。

先ほど学生と教員との関係というところで少し申し上げましたが、これは具体策として、学生の方から出された意見ですが、学生がもっと教員を選べるようなシステム、ちょっと具体的にどういうものなのか分からないですが、我々教員にとってはちょっと耳の痛いような意見もありました。

最後に、今回生涯学習憲章ということで議論していますが、生涯学習という名称がやはりどうしても高齢者の余暇というイメージに捉われるので、もう少し名称を考えた方がいいのではないかと意見もありました。

ちょっとまとめにはなっていませんが、6つの班が議論したことを簡単にまとめさせていただきました。私が十分把握せずに、重要な点を落としているかもしれませんが、その点はあとで貼っていただくようですので見ていただければと思います。どうもありがとうございました。



分科会2 総括

西原 亜矢子 潟大学大学院保健学科研究科 講師



分科会2は、「社会人教育機関としての大学の展開」というテーマで、6班に分かれて議論いたしました。「社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき」、「職員のキャリア形成」、「社会人教育プログラムの難しさ」、「社会人学生のニーズに応える難しさ」、「社会人学生としての学びをよりよくする」、「自治体のニーズに大学が応えるために」というテーマで、6班に分かれて議論をしたのですが、私も今終わったばかりでちょっと整理し切れていない部分があります。そこで、最初の20分の問題提起をした時に、最後に4点ほど投げかけをしましたので、それに対してグループのやり取りや、報告の中から私自身がどんな事が得られたか、という形でお返しして

いきたいと思います。具体的なグループの討論内容は、報告書を出していただけるということなので、そちらをご参照願います。

第一に、社会人学生は、「教育の対象者」から、「協働の探究者」になる可能性があるのではないか、という提起をしたのですが、それに対しては、奇しくも自分のグループの中で非常に良い事例が紹介されました。与論の漁業をやっている方と水産の教員の方が共同研究をされていて、それも、最初に与論に行かれた時に、ちょっとマグロの解凍の話をして、それにはこうしたらいんだということを教員の方がおっしゃられたら、漁業の方が実際にそれをやってみた、そこから現場の実践に関わるようになった、漁業の方からは、現場ならではの経験知が提供されて、共同研究として発展していった、そういうようなお話をさせていただいて、もうまさに大学の専門知、科学知と現場の実践知が統合されていく事例を聞かしていただくことができましたし、お二人のやりとりからも、本当にお二人の関係は協働の探究者なんだなということが感じられて、とてもうれしかったです。

それから二点目に、「教育者」は「学習者」なのではないか、という提案をいたしました。私のような若輩者が本当に不遜なのですが、大学も教員も、社会人学生と関わりながら学んでいくことができるのではないか、社会人学生とのやり取りから教えるということについても、それぞれのご専門分野の現場の実践からも学べるんじゃないかという提案をいたしました。他のグループの報告の中ではちょっとそういった事例や話は出てこなかったようですが、自分のグループからは先ほどの事例と、もう一つ、教員の方が、社会人から出されるいろいろな難しい質問やニーズに答えていく時に、自分ももっと専門性を磨かなきゃいけなくて、それがストレスにもなってるけれどもうれしい部分だとおっしゃっていたので、その学びが一つのインセンティブになるんじゃないか。インセンティブっていうと、

予算とかそっちの方に話が行ってしまうし、実際グループの報告にも出ていて、それはそれで本当に大事な問題なんですけれども、教員自身も自分の研究に生かせる、自分の教育力に生かせるようなメリットとしてのインセンティブをぜひ見つけられるといいのかな、なんてちょっと思ったりもしました。

三点目の、「大学の知の構造の転換」ということは先ほど一点目にお話しした通りです。最後に、大学自体も「学習する組織」（成員が「共同して学ぶ方法を学び続ける組織、自分たちが望んでいるものに近づいていく能力を自分たちの力で高めていける集団」）にならないといけないんじゃないかという事を申し上げました。今日の報告では、いっぱいいろんな課題が出ておりまして、一番共通していたのは、皆さん時間が不足している。社会人学生も時間が不足しているし、大学の教員も時間が不足しているし、大学も時間が不足しているということで、それをまずマネジメントしていく、その問題解決に組織的に取り組むことも、それで組織力がアップするんじゃないかな、なんてことをちょっと感じてしまいました。

一方で、この生涯学習憲章のグループワークの場が、学習する組織の大事な要素になっているのではないかなということで、出た提案を憲章に位置付けるとともに、ご自身の身近なところでもこういう問題出たからどう？というのを話し合っ、て、身近なところで改善していくことから、全体に波及していけばいいかなというようなことを感じつつ、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。



分科会の主張（要点メモ）

分科会 1

- ・実社会とのかかわりを義務化ではなく学生の主体性・自発性をどう保障するか（自分たちで知っていくことが大事）
- ・組織的な関与が必要なこと（予算、実行できる体制、リスク対応など）
- ・実社会の経験は大学教育の中で大事であるが、分野によつての意義・成果は多彩であることを認識。関わり方も多用（個人ベース⇔カリキュラムベース
- ・自分は何を学ぶべきか、自分はどう生きるべきか、それを学生自らが見つけることを大学がサポートする
- ・企業・地域・他大学など外部との接触により、外の世界を知り、自分の位置を知る
- ・学生のニーズを吸い上げる全学的な仕組みが不十分
- ・職員と学生、教員、地域とのコミュニケーションが少ない
- ・大学と受け入れ先（コミュニティ）との関係づくりの強化が必要

分科会 2

- ・社会人教育を大学教員の本務（大学の大事な仕事）とする
- ・社会人のニーズに応えら得るようなインセンティブ
- ・社会人学生のニーズは多様。多様なニーズを拾い、応えるための体制づくり
- ・特に資格や教養を高めるのではなく、専門性の勉強をしたいニーズ
- ・組織の問題の改善に取り組む
- ・会社と大学の連携、教員、社会人学生との相互理解
- ・持続可能な学びの循環の創出
- ・自治体ニーズの把握、自治体も大学が望んでいることを把握…気軽に語られる機会
- ・職員のキャリア形成、成長できる環境をつくる、保障する。

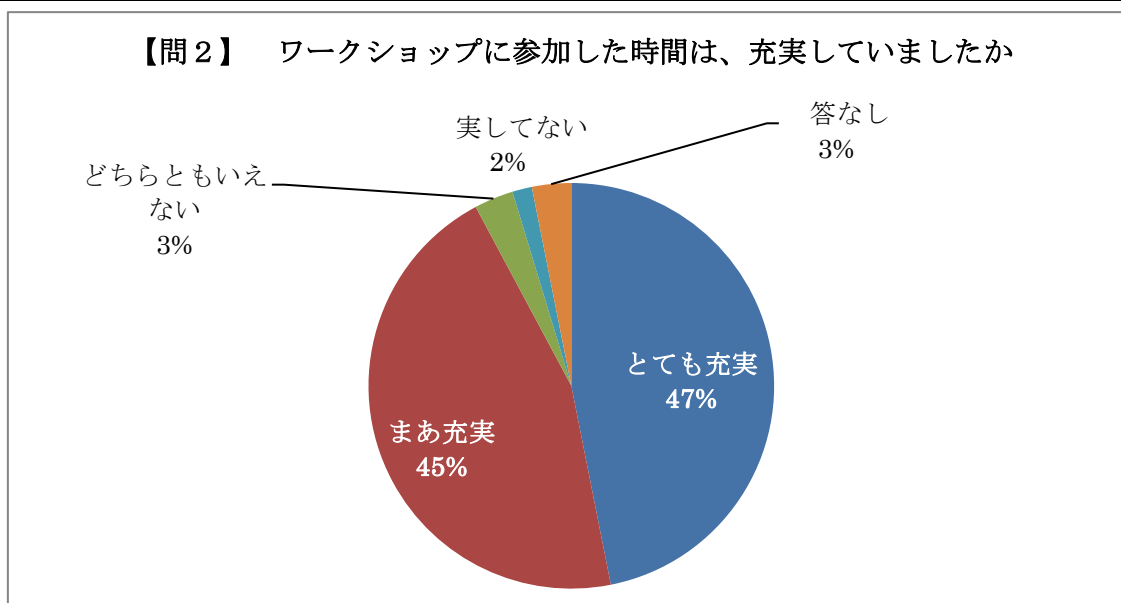
文部科学省共催「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島」南日本新聞社後援
「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ アンケート集計結果

【問1】 あなたの参加した分科会はどちらですか。傍聴の方は傍聴に○をお願いします。

分科会1	分科会2	傍聴	合計
34 名	30 名	0 名	64 名

【問2】 ワークショップに参加した時間は、充実していましたか。

とても充実	まあ充実	どちらともいえない	やや充実	充実していない	回答なし
30 名	29 名	2 名	0 名	1 名	2 名



【問3】 本日ワークショップに参加して良かったことは何ですか。

- ・様々な立場や分野の人たちとの意見交換を通じた、各々の状況理解や問題意識の共有化
- ・同じ立場や分野の人たちとの意見交換と意思の共有化
- ・生涯学習・社会人教育に対する理解が深まった
(生涯学習の重要性や難しさ、自分自身が取組む生涯学習の意義について理解できた)
- ・大学への理解 (大学内部を知ることができた、おもいを聞けた、大学が身近になった)
- ・議論ができて楽しかった、考えをまとめる作業が勉強になった、本音で自分のことを語ることができた
- ・案外、学部に通ずる課題意識はあったと分かったこと。
- ・他学部の状況がよく理解できた。

等

【問4】 本日ワークショップに参加して残念だったことは何ですか。

- ・スケジュール： 平日の方が良かった・議論の時間が短かった等
- ・会場や班の人数： 会場が狭く議論がききとれなかった・人数が多く、議論がききとれなかった
- ・議論の内容： 議題が抽象的・次につなぐ行動が決められなかった・課題認識をするのが遅かった・議論に深まりがなく、中途半端で終わってしまった
- ・参加者・運営者の準備不足： 論点や憲章内容に関する認識・理解不足 等

【問5】 本日のワークショップに参加して、生涯学習の理解は深まりましたか。(一つだけ○)

はい	いいえ	回答なし
53 名	9 名	2 名

■「はい」と答えた人の理由

- ・ワークショップに参加することで、事前に生涯学習を勉強したから
- ・職種をこえた多様な立場の人から意見がきけたから
- ・学生教育（支援）と生涯学習の関連も重要だと分かったから
- ・今まで考えてこなかったから
- ・概念の範囲が広いことを初めて理解できた。 等

■「いいえ」と答えた人の理由

- ・切り口が多様だったから
- ・大まかすぎて、体系化されていなかったから
- ・班の論点との関係上、生涯学習への理解とはあまり関係なかったから
- ・班の論点がどのレベルでつながっているのか確認する時間がなかったから
- ・考えることがメインの場であったから。 等

【問6】 あなたは、どの切り口で生涯学習に取り組んでいきたいですか。又は、取り組みそうですか。

- ・普段の業務や生活
- ・地域・まちづくり： 産業振興、学習成果やアカデミックな知を地域へ提供・還元、学生による地域での実習
- ・社会人教育・学び直し： 社会人大学院生、職業教育、鹿児島大学卒業生向け・社会人向け公開講座
- ・学生教育： フィールドワークを積極的に取り入れる、学生と共に成長していく
- ・留学生、海外研修生 等

【問7】 生涯学習に取り組むにあたって、想定される課題は何ですか。

- ・ 人、時間、予算不足などの大学のサポート、バックアップ体制
- ・ 大学学内と学外（社会）における適切な評価
- ・ 広報や情報提供（地域への浸透）
- ・ ニーズの把握
- ・ 各個人の意識
- ・ 専門性の希薄化
- ・ 専門知、科学知の向上
- ・ 大学人と社会人のネットワーク

等

【問8】 本日のワークショップに対する 一言メッセージをお願いします。

- ・ 貴重なイベントの企画・運営ありがとうございました
- ・ キックオフだけにならないように実のある取組みを
- ・ 実践的な良い憲章を期待しています
- ・ 人選が良かった
- ・ 多様な方々と意見交換ができてよかった。
- ・ 社会人ニーズの把握機会としても、今後も継続してもらいたい
- ・ ワークショップをもう少し長くしたかった
- ・ 議題が分かりづらかったので、解説がほしかった
- ・ テーマが少しアバウトな気がしました
- ・ 討論環境が悪い。議論が深めやすい場づくりが必要
- ・ 全体のまとめが出ると、より包括的に理解できたのではないかと感じました
- ・ 学部、学科による相違に議論を始めてから気付き少々混乱した
- ・ 本日の内容や憲章を全学、学外に周知して生涯学習が本学でよりすすめられるようお願いいたします。

等

以上。

資料

分科会1

テーマ: 社会の要請と学生教育の充実(質向上):地域社会とのかかわりが相乗効果をもたらす本学の教育目標の実現

分科会1コーディネーター: 酒井 佑輔 講師(生涯学習教育研究センター)

分科会1講師: 亀野 淳 准教授(北海道大学高等教育推進機構生涯学習計画研究部門)

チーム 分科会1	1班 混合	2班 教員	3班 教員	4班 職員	5班 学生	6班 卒業生
ファシリテーター	牟田(地元)	李(農)	伊藤(学共)	志賀(地元)	西尾(理工研・理)	亀野(外部講師)
論点	学生と地域社会がつながる各々のメリット、デメリット	学生を実社会で教育させることの難しさ	学生にとって本当に必要な力とはなにか	職員が学生ニーズを知り、応えていくために	実社会とのかかわる教育機会をよりよくするために	卒業生から大学教育に求めること
	1宮下(法文)	1土田(教育)	1大塚(理工研・工)	1大園(職員)	1森下(法文)	1中武(学共)
	2佐野(水産)	2藤田(共獣)	2山本(法文)	2半渡(職員)	2北野(水産)	2澤田(理工研・工)
	1中村(職員)	3小林(理工研・理)	3高山(農)	3有村(職員)	3泊(教育)	1森(個人事業)
	1学生(農・李)	4佐藤(医歯研・歯)	4山本(水産)	4山口(職員)	4戸田(共獣)	2瀬戸口(県職員)
	2学生(医・大脇)	5大前(法文)	5大脇(医歯研・医)	5新田(生協職員)	5唐鎌(工)	3原田(学校教諭)
	1上橋(大崎町)	6塩屋(理工研・工)	6前田(教育)	6谷口(職員)	6石橋(理)	4富吉(県職員)
	2宮下(大崎町)			1橋本(人事担当学長補佐)		5市村(民間)
計	8	7	7	8	7	8

事例報告	報告者1	報告者2	報告者3
報告者	佐野(水産)	澤田(理工研・工)	大脇(医歯研・医)
テーマ	実社会とつながる学生教育の実践	インターシップと学生教育	離島実習

分科会2

テーマ: 社会人教育機関としての大学の展開:成人教育の特質を踏まえた学習機会の創出とそのための条件整備

分科会2コーディネーター: 小栗 有子 准教授(生涯学習教育研究センター)

分科会2講師: 西原亜矢子 講師 新潟大学大学院保健学科研究科

チーム 分科会1	1班 混合	2班 職員	3班 教員	4班 教員	5班 社会人学生	6班 自治体
ファシリテーター	西原(外部講師)	大迫(地元)	寺岡(農)	桑原(法文)	福満(教育)	佐久間(水産)
論点	社会人教育の相互作用が生む楽しさと新しい気づき	職員自身のキャリア形成	社会人教育プログラム(カリキュラムや体制)の難しさ	社会人学生のニーズに応えることの難しさ	社会人学生としての大学をよりよくするために	自治体のニーズに大学がよりよく応えるために
	1高瀬(共獣)	1鬼塚(職員)	1安楽(水産)	1井村(理工研・理)	1角(保健学科)	1下川(学共)
	2木村(水産)	2原之園(職員)	2菊永(教育)	2菊地(歯)	2伊地知(林業)	2是枝(南さつま町)
	3丹羽(医)	3久永(職員)	3嶺崎(医歯研・医)	3近藤(理工研・工)	3上野(焼酎)	3池田(垂水市)
	4西之園(職員)	4藤田(職員)	4田中(共獣)	4角之上(鹿児島市)	4亀田(大学院)	4小島(薩摩川内市)
	5山下(与論町)	5辻(職員)	5高峯(農)	5枚田(農)	5穂満(公開授業)	5西園(鹿児島市)
	6清(奄美市)	6江頭(職員)	6中原(臨床)	6金子(教)		
		7西崎(職員)				
		8畠中(職員)				
	7青山(ルネッサンスアカデ)	9采女(総務担当学長補佐)				
計	8	10	7	6	7	7

事例報告	報告者1	報告者2	報告者3
報告者	中原(臨床心理研究科)	枚田(農)	高瀬(共同獣医)
テーマ	社会人大学院	履修証明:林業者の学び直し	公開講座

分科会講師とコーディネーター

No	分科会	役割	氏 名	所 属	学科	職名
	1	コーディネーター	酒井 佑輔	生涯学習教育研究センター		講師
	1	講師	亀野 淳	北海道大学 高等教育推進機構 生涯学習計画研究部門		准教授
	2	コーディネーター	小栗 有子	生涯学習教育研究センター		准教授
	2	講師	西原 亜矢子	新潟大学 大学院 保健学科研究科		講師

ファシリテーター名簿

No	分科会	班	参加枠	氏 名	所 属	学科	職名
1	1	1	地元	牟田 京子	モノづくり工房“響”		
2		2	教員	李 哉ヒョン	農学部	生物生産学科	准教授
3		3	教員	伊藤 奈賀子	教育センター	高等教育研究開発部	准教授
4		4	地元	志賀 玲子	志學館大学 法学部	生涯教育／キャリア教育	准教授
5		5	理学部	西尾 正則	大学院理工学研究科(理学系)	物理・宇宙専攻	教授
6		6	外部講師	亀野 淳	北海道大学 高等教育推進機構		准教授
7	2	1	外部講師	西原 亜矢子	新潟大学 大学院 保健学科研究科		講師
8		2	地元	大迫 香寿枝	Coaching STEP代表・岳の学びや代表		
9		3	教員	寺岡 行雄	農学部	生物環境学科	教授
10		4	教員	桑原 季雄	法文学部	人文学科	教授
11		5	教員	福満 博隆	教育学部	生涯教育総合課程(健康教育)	准教授
12		6	教員	佐久間 美明	水産学部	水産学科	教授

分科会1 ワークショップ参加者名簿 事例報告

報告内容	氏 名	所 属	学科	職名
インターンシップと学生教育	澤田 樹一郎	大学院理工学研究科(工学系)	建築学専攻	准教授
実社会とつながる学生教育の 実践	佐野 雅昭	水産学部	水産学科	教授
離島実習	大脇 哲洋	大学院医歯学総合研究科	離島へき地医療人育成センター	教授

参加者

班	参加枠	氏 名	所 属	学科	職名
1	教員	宮下 正昭	法文学部	人文学科	准教授/学長補佐(広報担当)
	教員/事例報告者	佐野 雅昭	水産学部	水産学科	教授
	職員	中村 達哉	大学院理工学研究科(工学系) 技術部 生産技術系		技術職員
	学生(李先生)	当日参加	農学部	生物生産学科	
	学生(大脇先生)	当日参加	大学院医歯学総合研究科	離島へき地医療人育成センター	
	大崎自治体(李)	上橋 孝幸	大崎町役場企画調整課		課長補佐
	〃	宮下 功大	大崎町役場企画調整課		主事
2	教員	土田 理	教育学部	附属教育実践総合センター 理科教育	教授/副学部長
	教員	藤田 志歩	共同獣医学部	獣医学科 生理学	准教授
	教員	小林 哲夫	大学院理工学研究科(理学系)	地球環境科学専攻	教授
	教員	佐藤 友昭	大学院医歯学総合研究科	歯学科	教授
	教員	大前 慶和	法文学部	経済情報学科	教授
	教員	塩屋 晋一	大学院理工学研究科(工学系)	建築学専攻	教授
3	教員/憲章起草委員	前田 晶子	教育学部	附属教育実践総合センター	准教授
	教員	大塚 作一	大学院理工学研究科(工学系)	情報生体システム工学専攻	教授
	教員	山本 一哉	法文学部	経済情報学科	教授
	教員	高山 耕二	農学部	生物生産学科	准教授
	教員/事例報告者	大脇 哲洋	大学院医歯学総合研究科	離島へき地医療人育成センター	教授
	教員	山本 淳	水産学部	水産学科	教授
4	職員	大園 久裕	研究国際部社会連携課	地域連携係	係長
	職員	半渡 聡	農学部・共同獣医学部等事務部総務課	農場事務係	係員
	職員	有村 美樹子	学生部教務課	教務係	主任
	職員	山口 聡	農学部・共同獣医学部等事務部学務課	学生係	係員
	職員/教員	新田 ちづる	鹿児島大学生協同組合中央店経営 リーダー/鹿児島大学/鹿児島県立短期 大学キャリア開発講座非常勤講師		
	職員	谷口 康太郎	大学院理工学研究科(工学系) 技術部 生産技術系		技術職員
	教員	橋本 文雄	農学部 / 大学院連合農学研究科	生物生産学科 園芸生産学	教授/学長補佐(人事担当)
5	学生	泊 雄介	教育学部	教育学研究科 3年	
	学生	戸田 克樹	共同獣医学部	行動生理・生態学 6年	
	学生	森下	法文学部	経済情報学科 学部3年	
	学生	北野 弘	水産学部	魚病学研究室 修士課程1年	
	学生	唐鎌 寛崇	大学院理工学研究科	博士前期課程 2年	
	学生	石橋 晴菜	大学院理工学研究科	生命化学専攻 修士課程2年	
6	教員	中武 貞文	産学官連携部門	産学官連携推進センター	准教授
	教員/事例報告者	澤田 樹一郎	大学院理工学研究科(工学系)	建築学専攻	准教授
	卒業生	森 好子	株式会社ワイズプラス(代表取締役)		
	卒業生	瀬戸口 眞治	鹿児島工業技術センター(食品・化学部長)		
	卒業生	市村 良平	マルヤガーデンズ		
	卒業生	富吉 宏治	鹿児島県庁 鹿児島県危機管理局 原子力安全対策課		

分科会2 ワークショップ参加者名簿 事例報告

報告内容	氏 名	所 属	学科	職名
社会人大学院	中原 睦美	臨床心理研究科	臨床心理学専攻	教授
履修証明	枚田 邦宏	農学部	生物環境学科	准教授
公開講座	高瀬 公三	共同獣医学部	附属越境性動物疾病制御研究センター	教授/学部長

参加者

班	参加枠	氏 名	所 属	学科	職名
1	教員	高瀬 公三	共同獣医学部	附属越境性動物疾病制御研究センター	教授/学部長
	教員/憲章起草委員	木村 郁夫	水産学部	水産学科	教授/学長補佐 (社会貢献担当)
	教員	丹羽 さよ子	医学部	保健学科 看護学専攻(臨床看護学)	教授
	社会人学生	青山 朋代	(株)吾空 経営計画室		
	職員	西之園 直記	大学院医歯学総合研究科事務総務課	予算係	係員
	社会人	山下 登	与論島漁業集落		
	自治体(奄美市)	清 麗次	奄美市企画調整課		主査
2	職員	鬼塚 剛生	研究国際部社会連携課	地域連携係	係員
	職員	原之園 さつき	学術情報部情報管理課	資料受入係	係長
	職員	久永 祥宏	研究国際部社会連携課	知的財産係	係員
	職員	藤田 和也	総務部人事課	任用・審査係	係員
	職員	辻 修子	研究国際部国際事業課	留学生係	係員
	職員	江頭 大典	医学部・歯学部附属病院総務課	人 事 係	係員
	職員	西崎 龍平	医学部・歯学部附属病院総務課	労務管理係	係員
	職員	畠中 美子	研究国際部国際事業課	国際事業係	係員
	教員	采女 博文	大学院司法政策研究科	法曹実務専攻	教授/学長補佐 (総務担当)
3	教員	菊永 俊郎	教育学部	附属教育実践総合センター	教授
	教員	田仲 哲也	共同獣医学部	獣医学科	准教授
	教員	高峯 和則	農学部	附属焼酎・発酵学教育研究センター	准教授
	教員	安樂 和彦	水産学部	水産学科	准教授
	教員	嶽崎 俊郎	大学院医歯学総合研究科	健康科学専攻	教授
	教員/事例報告者	中原 睦美	大学院臨床心理学研究科	臨床心理学専攻	教授
4	教員/事例報告者	枚田 邦宏	農学部	生物環境学科	准教授
	教員	井村 隆介	大学院理工学研究科(理学系)	地球環境科学専攻	准教授
	教員	菊地 聖史	大学院医歯学総合研究科	先進治療科学専攻	教授
	社会人学生	角之上 知樹	鹿児島市企画財政局財政部		
	教員	金子 満	教育学部	学校教育(地域社会教育)	
	教員	近藤 英二	大学院理工学研究科(工学系)	機械工学専攻	教授/ 理工学研究科長
5	社会人学生	角 マリ子	保健学研究科保健学専攻(博士後期課程)		
	再チャレンジ 社会人大学院修了生	伊地知 美智子	島津興業		
	社会人学生	上野 浩三	南国アールエスリカー営業課		
	社会人学生	亀田 晃一	MBC気象予報士兼カメラマン		
	公開授業生	穂満 康雄			
6	教員	下川 悦郎	地域防災教育研究センター		特任教授
	南さつま町 自治体	是枝 幸雄	保健課健康推進係		係長
	垂水市自治体	池田 健	企画課計画調整係		係長
	薩摩川内市 自治体	小島 早智子	企画政策部コミュニティ課		生涯学習グルー プ員
	鹿児島市 自治体	西園 香緒利	生涯学習課		

文部科学省共催「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島」南日本新聞社後援
「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ アンケート 全回答

【アンケート結果 自由回答】

問3 本日ワークショップに参加して良かったこと何ですか

- ・本音で語ることを実現。
- ・色々な情報を得ることができました。
- ・多くの人の意見が聞けた。さまざまな立場の人の意見が聞けた。
- ・同じ職員間で日々感じていることを聞くことができた。ありがたかった。
- ・日ごろの不平不満を参加者同士で共有できた。
- ・いろんな職種の人のお話を聞くことができた。
- ・生涯学習に関する関心が深まった。
- ・異業種の方と生涯学習について話し合ったことで、新たな『気づき』があった。
- ・社会人が学ぶこと。希望が持てたこと。
- ・生涯学習に対する理解が深まった。また、自分自身が実際に行っている活動の意義が深まった。
- ・多様な視点から議論できたこと。
- ・色々と意見が聞けてよかった。
- ・受ける側のニーズや希望が聞けたこと。
- ・他人の意見を聞けた。
- ・先生方や職員等の話が聞けたこと。
- ・他の社会人院生が抱えている悩みを知ることができた。
- ・学びとか何か、考えることができた。行政と大学との連携について考えることができた。
- ・大学内部のことを聞けた。
- ・社会人教育の考え方や重要性を理解できた。
- ・改めて生涯学習の難しさを実感し、少しでも実現場の意見を言えたことは良かった。
- ・問題点が明らかになった。
- ・様々な意見を聞くことができた。
- ・詳しい意見交換ができたこと。
- ・多分野の先生方との意見交換。
- ・大学が身近になったように思う。
- ・本音の意見交換ができてよかった。
- ・他部局の話が聞ける、出会える、異文化交流。
- ・大学教育の現状が理解できた。
- ・卒業生からの大学に求められている点について意見が聞けて、また考えさせられる機会が持てて非常に良かった。今後の学校教育に活かしたい。
- ・大学側の想いを開けたこと。
- ・色々なことを考える機会があつて面白かったです。
- ・他学部の方や外部の方のお話を聞けて見識が広がりました。
- ・いろんな考えをまとめていく作業は勉強になりました。
- ・ディスカッションが久しぶりにできたが、とても楽しかった。
- ・他の方がどのような考えや課題に直面しているかを知ることができてよかった。また自分のことも語ることができてよかった。
- ・日頃、感じていたことを同じ立場の職員や教員と共有できたこと。
- ・学生の生涯学習のとらえ方がわかった。
- ・他の学生さんと一緒に色々な意見交換ができて良かった。
- ・大学の教育について他学部の方と意見交換できたのに加え、教育や社会人の方の考えも聞くことができた。
- ・問題意識が共有できた。
- ・生涯学習について知れたのでよかった。

- ・改めて大学の教育について考えることができた。
- ・教員および学生という異なる立場の方々の意見が開けた。
- ・自身の活動（生涯学習活動）への自信へとつながった。また、現状についても理解できた。
- ・いろんな話ができた。
- ・いろんな人と意見を交換することができた。
- ・案外、学部に通ずる課題意識はあると分かったこと。
- ・各学部の現状が分かった。
- ・様々な意見を聞いたこと。
- ・他学部の状況がよく理解できた。
- ・様々な分野の意見が聞いたこと。
- ・理解が深まりました。
- ・大学内外の問題意識を共有できたこと。
- ・大学内でのいろんな地域との取り組みが知れた。
- ・学生の教育について、他学部の先生と意見交換できた点。
- ・他学部の教員の考えが知れたこと。
- ・他学部の先生の考え方、努力などに触れられたこと。
- ・職員の方々の大学教育に対する積極的な姿勢を知ることができた。
- ・他学部の先生方と意見交換ができたこと。
- ・他学部の先生方との話し合う場。
- ・教員、学生、学部の方々と議論できた。
- ・他分野の状況が理解できた。

問4 本日ワークショップに参加して残念だったことは何ですか

- ・次につなぐ行動（自主的・主体的）が決められなかった。
- ・自分自身の理解が不足していた。
- ・平日にしてほしかった。

- ・課題を認識するのが遅かった。
- ・いつも同じ人ばかり。
- ・時間が足りなかった。
- ・部屋がうるさい。
- ・時間が足りない。
- ・時間の都合上、意見交換の内容がごく一部に限定。
- ・全体会のマイクが小さく聞きづらかった。スケジュールが盛り込みすぎ。ハードだった。
- ・一つの議論の中で答えまで出せなかったことがあったことです。
- ・きれいに意見をまとめることができなかった。もう少し自分の意見を出したかった。
- ・議題が漠然としていて、どう切り込んでゆけばいいか、分からなかった。
- ・生涯学習について事前知識が少なかったのも、あらかじめ考えておく必要があったと感じました。
- ・イントロの問題提言にかかる時間が長く、実際議論に移るまでの時間がより短いほうがよかった。また生涯学習というテーマが学生に身近でなかったのも、議論の初めのほうは何を話し合えばいいのかわからなかった。
- ・どのように活かされていくか今後に期待したい。
- ・自分の準備不足。
- ・意見を出すうえで憲章、課題に対する理解が乏しいため話しにくかった。
- ・記録を取りにくかった。
- ・議論の深まり、まとまりがない。
- ・グループの人数が多くて、話を同じぐらいの割合でももらいづらかった。
- ・結局、改善が反映されるのか？
- ・分科会のテーブルが近く、少しうるさかった
- ・人が多く、議論が聞き取れなかったことがあった。

- ・ワークショップの形式がバラバラだったこと。
- ・各班テーマが違ったこと。共有しづらい
- ・班の提言「生涯学習」の名称、重要性が無視された。
- ・土曜日だったこと。
- ・学生理解の面で差があったこと、議論の難しさを感じた。
- ・生涯学習の定義の説明が全体会であり、理解が深まったと思います。
- ・テーマが域学連携についてが主な話であった。
- ・社会人で本当に勉強したい人に伝えるため名称を変えてはどうでしょう？（生涯学習）
- ・「生涯」という言葉のイメージが先行して勘違いしていた部分もありましたが、より広義の意味での生涯学習と知ることができました。

問5 「本日のワークショップに参加して、生涯学習の理解は深まりましたか」に対する理由

- ・ネットで調べても全国で似たような話題があり、リアルに語っても同じことが出るんだという実感。
- ・参加することで事前に勉強したから。
- ・切り口が広いから。アイディアは理解できた。
- ・職種を超えた意見は貴重でした。（特に自治体さんのもの）
- ・そもそも生涯教育について深く考えることもなかったので。いいきっかけになった。
- ・多くの方から様々な意見が聞けたため。
- ・これまで自己啓発のためのものと思っていたが、地域貢献につながる夢のある学習であることに気付いたから。
- ・経験知や知識の相互作用が面白い。
- ・いろんな立場からの意見が聞けた。
- ・生涯学習に求める内容が多様であるが、大学がきちっと対応を決めれば対応できることが見られたこと。
- ・様々な視点や立場の意見が聞けた。
- ・大学側のかかえる諸事情を知ることができた。
- ・社会人の大学での学びについて様々な課題があることが分かった。
- ・まあまあ。
- ・市町村自治体と大学の連携の在り方について集中して議論ができた点。
- ・生涯学習の広さがわかった。
- ・学ぶことは楽しいと思えるようになりました。
- ・そもそもが、生涯学習という言葉に対しての理解が薄く、今回のワークショップを通して学ぶことができた。
- ・考えることがメインの場であったから。
- ・生涯学習について、これまで考える機会がなかったが、学生教育（支援）との関連も重要だとわかった。
- ・生涯学習について、今まで考えたことがなかったので考える場となったから。
- ・話し合っていく中で、自身の考えに気付き、また他学生の教育内容や学外での教育活動について話を聞けたため。
- ・生涯学習そのものの捉え方が多様である。
- ・大学側の取り組みを知れた。
- ・考えることがない内容だったので。
- ・様々な論点から課題や提言を開くことができたから。
- ・大まかすぎて、体系化されてなかった。
- ・概念の範囲が広いことを初めて理解できた。
- ・いいえという語弊があるが、いろいろ考える機会にはなった。ただ、班のテーマの関係上、生涯学習への理解とはあまり関係なかった。
- ・今まであまりかんがえてなかったため。
- ・少しだけ理解が深まった。
- ・生涯学習が年配者対象ではないことが分かった。でも理解が広まるには名称変更も必要で

はないか？

- ・いったい何をやればいいのか、最後まで分からなかった。
- ・班のテーマが生涯学習に関するものでなかったから。
- ・テーマが生涯学習と直接つながっていない、どのレベルでつながっているか確認する時間がなかった。
- ・生涯学習の内容（定義など）をより知ることができたから。

問6 あなたは、どの切り口で生涯学習に取り組んでいきたいですか。又は、取り組めそうですか。

- ・生涯学習を促す役を担う。地方にアカデミックな知を呼び込む。
- ・専門性の習得。
- ・日々前向きに業務に取り組むこと。また、その考えを周りの人にも話すこと。
- ・自分に必要なスキルを見つけ、学習し、普段の業務や生活に生かす。
- ・新たなキャリアアップ等ではなく、普段の生活から取り組んでいきたい。
- ・よりよい人生とするための学習の場。取り組むことは可。
- ・個人、企業人として。
- ・大学院教育。
- ・職業人とのスキルアップ、考え方を变える場として。
- ・社会人大学生、留学生、海外研修生。
- ・産業支援。やっている。
- ・学習成果の地域への還元。
- ・地域おこし 産業振興
- ・社会人に聞いてもらいたいものを提供します。
- ・社会人と接しながらニーズを見つける。
- ・制度とモチベーションがかみ合えば取り組み

たい。

- ・学び直し。
- ・大学が市町村の行政課題と向き合うか、やり方、内容等においても一層の工夫が必要。
- ・職業教育。
- ・卒後研修としての生涯学習。
- ・大学院の現役院生でもあるが、業務の関係で必要となる知識の習得を継続していきたい。
- ・特に卒業生の生涯学習の重要性について、講義等で在学生に伝えていきたい。
- ・社会人講座に参加する。
- ・何か所属コースの先生からもちかけがあれば積極的に参加しようと思います。
- ・いろんなことに興味を持って、積極的に学ぶ。しかしマイペースで。
- ・社会人ドクター等。
- ・職場の立場から、学生と地域を結び付けさせるような取り組みなど。
- ・知識の提供。地域と協力したものづくり。
- ・学生主催の一般公開の講義を作りたいと感じました。
- ・地域貢献(地域課題に研究として取り組む)、学生教育にフィールドワークを積極的に取り入れる。
- ・自主性。
- ・教育者として大学のイベントの紹介。
- ・学生と共に成長していく。
- ・自身の分野においては、最善のかたちで、生涯学習活動に貢献していきたい。
- ・一生学び続けて社会に大きな貢献ができるような学生を育てていきたい。
- ・どの・・・といわれても・・・。
- ・今迄、やってきたことが生涯学習です。
- ・社会人リカレントの充実及び入り易さ。
- ・企業経営者としての切に。
- ・学生のニーズを知って、またその意見を聞く

場が必要であると感じた。

- ・まちづくりでしょうか
- ・共通教育の中で。これまで通りに。
- ・学生の教育。
- ・生涯学習は幼年期から理念が始まるので、家庭や地域差で大人になった時格差が広がらないように教育にかかわりたい。
- ・地域との連携。

問7 生涯学習に取り組むにあたって、想定される課題は何ですか。

- ・協力者がまだいない。
- ・やる気
- ・時間、経済面。社会的環境の整備。
- ・情報の周知。PRの方法。
- ・時間の確保。
- ・モチベーションの持続。
- ・時間とお金。
- ・生涯学習を提供するための大学の環境整備。(ソフト面&ハード面ともに)
- ・学びたいことの軸をしっかり持つこと。
- ・自分の専門知、科学知のアップ。
- ・大学人の知のネットワークと社会人との知のネットワークを作ること。
- ・評価。
- ・時間、理解。
- ・学生成果に対する会社(社会)の適切な評価。
- ・金銭面、時間の無さ
- ・情報提供。
- ・時間と予算、社会的制度。
- ・社会人のニーズ把握。
- ・努力と情熱の維持。
- ・教員の意識。
- ・時間の確保。
- ・大学が提供する内容、やり方の工夫、予算の確保。(ニーズ把握)

- ・コミュニケーションの強化。
- ・社会全体と認知と意識。大学、もっと上からの支援。(丸投げでなく)
- ・大学としてのターゲットの設定と場の提供。
- ・社会人OBへの大学への入りやすさ、公開講座などのさらなる充実。
- ・ニーズの把握。こんなことができるという提案の共有。
- ・時間的制約。
- ・教員の数に対して、センターの方の人数が少ないので苦勞されるかとも思いました。
- ・社会人にとっての時間的制約。
- ・自主性を持って行えるか。周知をどの程度までできるか(広告等)。
- ・仕事との両立(時間)、授業料。
- ・学生が生涯学習について考える場が少ないこと。
- ・受け入れ先の確保、学生が実社会をたやすく体験できる環境づくり、社会人と接する機会を増やす。
- ・大学のサポート、バックアップ体制。
- ・各々の意識改革。
- ・専門性の希薄化。
- ・ニーズに応えるための講師の確保。
- ・3者間の連携と自身の分野の構造化。
- ・時間がない、大学教員は忙しすぎる、人が少なすぎる。
- ・学生に「自分が生涯学び続ける存在である」と認識させることそのもの。
- ・社会人の仕事との両立。
- ・地域性。
- ・大学とビジネススクールの違いを明確化。生涯学習対象者は高卒者も含める?能力の個人差による教育プログラムの差別化が必要。
- ・学生、教員の意識。
- ・学生が時間をとれる休日のみでも可。費用問

題。

- ・予算。
- ・多様性に対するサポートの具体化。
- ・地域の方々への浸透。

**問8 本日のワークショップに対する 一言
メッセージをお願いします。**

- ・工夫できること、したかったこと色々あります。次回につなげるためにまとめてみます。
- ・大園係長お疲れさまでした。
- ・貴重なイベントの企画ありがとうございました。
- ・何でも言える機会を増やしてください。
- ・学ぶことに壁を作らない。
- ・企画・運営ありがとうございました。
- ・とても有意義な週末をありがとうございました。
- ・お疲れさまでした。ありがとうございました。
- ・参加して良かったです。是非具体化してほしい。
- ・実践的な大学憲章を期待しています。
- ・この機会がたくさんあってほしい。
- ・良い憲章を期待しています。
- ・ありがとうございました。
- ・持続可能な生涯学習社会の形成をぜひ実現したい。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・今後とも引き続き進めていただきたい。
- ・面白かったです。
- ・意見交換ができてよかった。
- ・生涯学習に対する社会人のニーズ把握の機会として今後も持続。
- ・ワークショップ、もう少し長くしたかった。
- ・お疲れさまでした。
- ・良い憲章を制定されることを願っています。

ありがとうございました。

- ・準備会の先生方、職員の方々お疲れさまでした。今後ともよろしくお願いします。
- ・行政の立場でしたが、学生や教育の方との意見交換でき、良かったです。ありがとうございました。
- ・面白い取り組みではないかと思います。
- ・勉強になりました。ありがとうございました。
- ・勉強になりました。
- ・議題が分かりづらかった。議題に対する解説がほしかった。
- ・学生の意見が開けて面白かった。
- ・他の方々と意見交換ができて良かった。ありがとうございました。
- ・本日の内容や憲章を全学、学外に周知して生涯学習が本学でよりすすめられるようお願いいたします。
- ・テーマが少しアバウトな気がしました。
- ・討論環境の仕方が悪い。議論が深めやすい場づくりが必要。
- ・次回もあれば参加したいです。
- ・とても良かったです。熱い人が多かった。人選がGOOD。
- ・お疲れさまでした。
- ・多様性が大事。画一的にならないよう祈ります。
- ・ありがとうございました。
- ・キックオフだけにならないように実のある取り組みを。
- ・全体のまとめが出ると、より包括的に理解できたのではないかと感じました。
- ・コミュニケーション能力とは？定義の明確化。
- ・お疲れさまでした。
- ・具体化へ頑張ってください。
- ・楽しかったです。
- ・学部、学科による相違にディスカッションを

始めてから気づき少々混乱したように思う。

- ・企画、準備ご苦労様でした。
- ・憲章策定や今回のワークショップの準備等お疲れさまでした。
- ・とても有意義な討論ができた。

「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯

時期	内容
平成 24 年度	ステップ1（事前準備）
9 月	■生涯学習憲章/宣言に向けた生涯学習教育研究センター内の準備を開始
9/19(水)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章の策定構想に関する説明
10/18(木)-19(金)	第 34 回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の出席（熊本） 鹿大における文部科学省熟議の実施について担当官に打診
11/9(金)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章の策定構想に関する説明
11/20(火)	平成 24 年度第 2 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 理念の共有：鹿大生涯学習憲章/宣言（仮称）の策定計画について提案/協議
2 月～3 月	■鹿大執行部、部局長等へのヒアリング実施（研究、学生教育、地域貢献）
2/8(金)	文科省生涯学習政策局生涯学習推進課の担当官と打合せ（鹿児島） 次年度に文部科学省ポスト熟議を鹿大で実施することで確認
平成 25 年度	ステップ2（始動期）
4 月	■新執行部体制の下で生涯学習憲章策定に向けて活動を本格化
4/9(火)	平成 25 年度第 1 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 鹿大生涯学習憲章策定方針やスケジュール等について協議/条件付承認
4/11(木)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章策定プロセスの説明/協力要請
4/16(火)	地域貢献推進室会議にて鹿大生涯学習憲章策定構想と準備状況を説明
4/24(水)	平成 25 年第 2 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催（メール会議） 生涯学習憲章策定ワークショップの企画に関する修正案を承認
4 月～5 月	■学共施設、研究科長等へのヒアリングと協力要請の実施
5 月	□生涯学習憲章起草委員会の立ち上げ、委員会活動を開始（全て公開）
5 月	■部局長、各教職員、学外者等の訪問（憲章策定ワークショップの参加協力要請）
5/8(水)	□第 1 回起草委員会：趣旨説明、方針や骨子に関する意見交換/確認
5/9(木)	文科省生涯学習政策局生涯学習推進課の担当官と打合せ（東京） 地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学として実施を確認
5/15(水)	□第 2 回起草委員会：学外講師を招いて憲章の考え方を協議/整理
5/16(木)	上杉孝實京都大学名誉教授、学長、理事を表敬訪問
5/20(月)	□第 3 回起草委員会：生涯学習憲章の大項目の確認/素案骨子の確定
5/23(木)-24(金)	「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップ・ファシリテーター会合の開催（事前）
	ステップ3（学内世論形成期）
6/1(土)	「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップを実施（文科省共催） 地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学

6/6(木)	「①憲章素案の検討」+「②実践につなげる提言」を成果へ 「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップ・ファシリテーター会合の開催（事後） ファシリテーターと起草委員会の合同開催、その後起草委員会
6/7(金)	□第4回起草委員会：ワークショップの論点を確認、憲章の第1次案を作成
6/11(火)	生涯学習教育研究センター運営委員へ第1次案の報告、意見照会（～10まで）
6/12(水)	地域貢献推進室会議にて第1次案を提示/協議、意見の集約（センター長陪席）
6/18(火)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第1次案の報告
6/24(月)	□第5回起草委員会：地域貢献推進室会議の意見を受け第1次最終案を作成
6/25(火)	・執行部会議にて第1次案の報告/確認（センター長陪席）
6/25(火)-7/5(金)	・役員会議にて第1次案の報告/確認（センター長陪席） ■鹿児島大学生涯学習憲章第1次案の学内意見収集を開始～終了
	ステップ4（最終案確定期）
7/8(月)	□第6回起草委員会：学内意見収集の結果を受け第2次案を作成
7/9(火)	地域貢献推進室会議にて第2次案を提示/協議、意見の集約（センター長陪席）
7/10(水)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第2次案の報告
7/11(木)	平成25年度第3回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 生涯学習憲章素案に関する学内意見収集結果の反映案（第2次案）を協議
7/12(金)	・執行部会議にて第2次案の報告/協議（センター長陪席）
7/25(木)	・臨時教育研究評議会にて生涯学習憲章2次案について報告（センター長陪席） ・役員等会議において第2次案の報告/協議（センター長陪席）
7/26(金)	□第7回起草委員会：パブリックコメントに出す第3次案と解説文を作成 以上をもって起草委員会は解散
	ステップ5（学内承認期）
7/29(月)-8/16(金)	■鹿児島大学生涯学習憲章第3次案のパブリックコメントを開始～終了
8/19(金)	地域貢献推進室会議にてパブコメの結果を協議、第4次案の作成（センター長陪席）
8/21(水)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第4次案の報告、最終案の確定
9/2(月)	・執行部会議にて最終案の報告/協議
9/3(火)	・役員等会議にて最終案の報告/協議
9/12(木)	・大学運営会議にて最終案の報告/協議（センター長陪席）
9/19(木)	・教育研究評議会にて最終案の報告/決定（センター長陪席） ・臨時役員会議にて鹿大生涯学習憲章の決定
9/24(火)～25(水)	第35回全国生涯学習系センター研究協議会・研究フォーラムの開催 24日午後：公開シンポジウム「地域とともに描く、生涯学習の近未来像 - 大学生涯学習の過去、現在、未来 -」

鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会の実施状況

	日程	時間	起草委員出席者(順不同)	出席者(順不同)	内容
第1回	5月8日	水 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 各起草委員による自己紹介 3. 憲章策定の経過報告 4. 起草委員会の活動方針について 5. なぜ「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定するのか—学内の動向と文教政策を踏まえて—(小栗准教授) 6. 第1回素案検討会
第2回	5月15日	水 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)	油原部長(研究国際部)、牧田准教授(農学部)、久保田准教授(教育学部)、農中講師(法文学部)、桑原司教授(法文学部)	1. 挨拶(岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 第1回鹿児島大学生涯学習起草委員会での討議の確認:第2回検討会(論点メモ) (小栗准教授) 3. 講話「大学生涯学習の到達点とこれから」上杉孝實(京都大学名誉教授) 4. 討論会
第3回	5月20日	月 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)	油原部長(研究国際部)、牧田准教授(農学部)、金子准教授(教育学部)、安楽教授(水産学部)	1. 挨拶(岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 第1回検討会・論点メモ、第2回検討会・論点メモの確認 3. 第3回検討会:起草(案)の前文・定義・方針に関する検討、並びにワークショップに提示する内容の確認 ★憲章案ver.1の提示
臨時委員会メール会合	5月21(火)日～28日(火)		岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)		第3回鹿児島大学生涯学習起草委員会の検討会結果を踏まえて、5月23日(木)と5月24日(金)に開催するフアシリテーション事前会合に提示する憲章案(憲章骨子)の確定、並びに、6月1日のワークショップに提示する骨子案の確定 ★憲章案ver.2～4作成
第4回 ※6月1日のWSフアシリテーションとの合同会議	6月6日	木 13時～16時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)	伊藤准教授(教育センター 高等教育研究開発部)、牟田(モノづくり工房”響”)、志賀准教授(志学館大学 法学部)、西尾教授(大学院理工学研究科)、大迫(Coaching STEP代表・岳の学びや代表)、桑原教授(法文学部)、佐久間教授(水産学部)	1. 挨拶 (生涯学習教育研究センター長) 2. 「鹿児島大学生涯学習憲章(素案)」の検討と確定(小栗准教授) 3. 今後のスケジュール ★憲章案ver.5の提示、憲章案ver.6(第1次案)の作成

第5回	6月18日	火	13時～15時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)地域貢献室会議における「鹿児島大学生涯学習憲章(素案)」に対する意見について (2)今後のスケジュール 3. 修正作業・起草委員会の活動方針について・修正意見に対する起草委員会のスタンス・意見の記録方法・整理作業について 4. 第1次案の修正作業について ★憲草案ver.7の作成
第6回	7月8日	月	15時～16時30分	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)「鹿児島大学生涯学習憲章(第一次案)」への意見照会結果について (2)今後のスケジュール:第3次素案の作成で解散 (3)欠席委員の意見について 3. 第2次案の作成について ★憲草案ver.8の作成
第7回	7月26日	金	9時～10時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)スケジュール変更と今後の予定 (2)運営委員会における意見 3. 第3次案の作成と解説文(パブコメ用)について 4. パブコメについて ・パブコメの目的・範囲・方法等について 5. 「鹿児島大学生涯学習憲章」解説文の作成について ★憲草案ver.9とver.10の作成

	日程	時間	憲章事務局出席者(順不同)	ファシリテーター出席者(順不同)	内容
第1回 (分科会1)	5月23日	木 15時～17時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)	李准教授(農学部)、伊藤准教授(教育センター 高等教育研究開発部)、牟田(モノづくり工房“響”)、志賀准教授(志学館大学 法学部)、西尾教授(大学院理工学研究科)	1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 自己紹介 3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」のこれまでの経緯 4. 起草委員会の経緯について 5. 鹿児島大学生涯学習憲章(素案)について 6. 6月1日ワークショップについて (1)ワークショップの概要 (2)当日の参加者について (3)ファシリテーターにお願いしたいこと
第2回 (分科会2)	5月24日	金 10時～12時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)	寺岡教授(農学部)、大迫(Coaching STEP代表・岳の学 びや代表)、桑原教授(法文学部)、佐久間教授(水産学部)、福岡准教授(教育学部)	

鹿児島大学生涯学習憲章 第1次案（130625 現在）

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、と大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。

鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野に立って、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、現場の生活知や経験知と向き合い高めあうことを大切にします。そのことを通じて、学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解を深める機会を創出し、生涯学習を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

鹿児島大学生涯学習憲章（第１次案）解説

	案	解説
第１段落	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。	第１段落は、鹿児島大学憲章との関連を明確にし、生涯学習憲章を鹿児島大学として推進することを明記したものです。
第２段落	鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習に全学で取り組みます。	第２段落は、生涯学習憲章を策定するに当たって鹿児島大学の地域性を明確にするために述べたものです。なお、地域性の表現については、本学の位置がより特定できるような工夫をしたいと考えています。
第３段落	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。	第３段落は、生涯学習の理念を述べたもので、地域と大学との相互作用であることを唱ったものです。
第４段落	鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野に立って、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。	第４段落は、鹿児島大学の全構成員が生涯学習に取り組むことを明確にしたものです。
方針１	１．鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。	方針の１は、生涯学習が、学生を含む青年期の教育と成人教育をともに含むものであることと述べています。
方針２	２．鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。	方針の２は、生涯学習は、専門職のキャリアアップや社会人大学院などの職業教育と、公開授業受講生など知識教養のための教育の両方を含むものであり、それによる地域への貢献を明確にしたものです。

方針 3	3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活知や経験知と向き合い高めあうことを大切にします。そのことを通じて、学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。	方針の3は、教員や学生が、地域に向き、地域と交流することでお互いの知を交流し、高め合うことも広い意味での生涯学習と位置づけています。
方針 4	4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。	方針の4は、生涯学習憲章と学生憲章との関係を明確にしたものです。
方針 5	5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解を深める機会を創出し、生涯学習を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。	方針の5は、生涯学習を鹿児島大学として推進し、地域に貢献する大学づくりの柱に位置づけると宣言したものです。

以上解説を付しておきますので、参考にしてご意見をいただければ幸いです。

鹿児島大学生涯学習憲章を策定するにあたって

鹿児島大学では、平成 19 年に「鹿児島大学憲章」を策定しました。また、平成 22 年には、学生の手によって「鹿児島大学学生憲章」を策定しました。したがって、「鹿児島大学生涯学習憲章」は、本学では 3 番目の憲章となります。これは、鹿児島大学が地域とともに社会の発展に貢献する総合大学として、今後本学が、地域の方と一緒にどのように大学づくりを進めていくのか、その理念を定めるものとなります。

このたびの憲章の策定には、次のような目的や願いが込められています。

鹿児島大学は、大学ごとに定める第 2 期中期目標(平成 22 年度～平成 27 年度)として「生涯学習に対する全学的な取組を推進する」と明記し、同中期計画の中に「『生涯学習教育研究センター』の機能を強化するとともに、各部局等の特色を活かした生涯学習プログラムを実施する。」と記しました。

生涯学習とは、鹿児島大学の持てる資源を地域に開放する活動であり、本学はこれまでも、生涯学習教育研究センターを中心に、9 学部、10 研究科、14 学内共同教育研究施設等が、それぞれの特色を活かした生涯学習に取り組んできました。

一方、鹿児島大学は、今年度からこれまでの重点研究領域である島嶼、環境、食と健康に加えて、新たに水、エネルギーを本学が取り組むコアプロジェクトに位置づけました。これらはいずれもが、本学が豊かな自然と厚みのある歴史と文化をもつ鹿児島に立地することの強みであり、我々が誇りとするものです。

そして、今後本学が、中期目標・中期計画を達成し、大学憲章に謳う「地域とともに社会の発展に貢献する」大学づくりを推し進めるには、本学の教職員と学生が一丸となって取り組める生涯学習の指針が必要です。今回策定する「鹿児島大学生涯学習憲章」が、学内の意思統一をはかる指針となり、これまでに以上に地域に出向いたり、地域の方と学ぶ機会が増えることを期待しております。

今回お示しする憲章案は、素案を作成する起草委員会（5 月～7 月）による議論と全学で取組んだ生涯学習憲章策定ワークショップ（6 月 1 実施、学内外関係者 100 人規模）を軸に構想し、学内の意見収集をへて取りまとめられたものです。

鹿児島大学生涯学習憲章（案）
（平成 25 年 7 月 29 日現在）

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

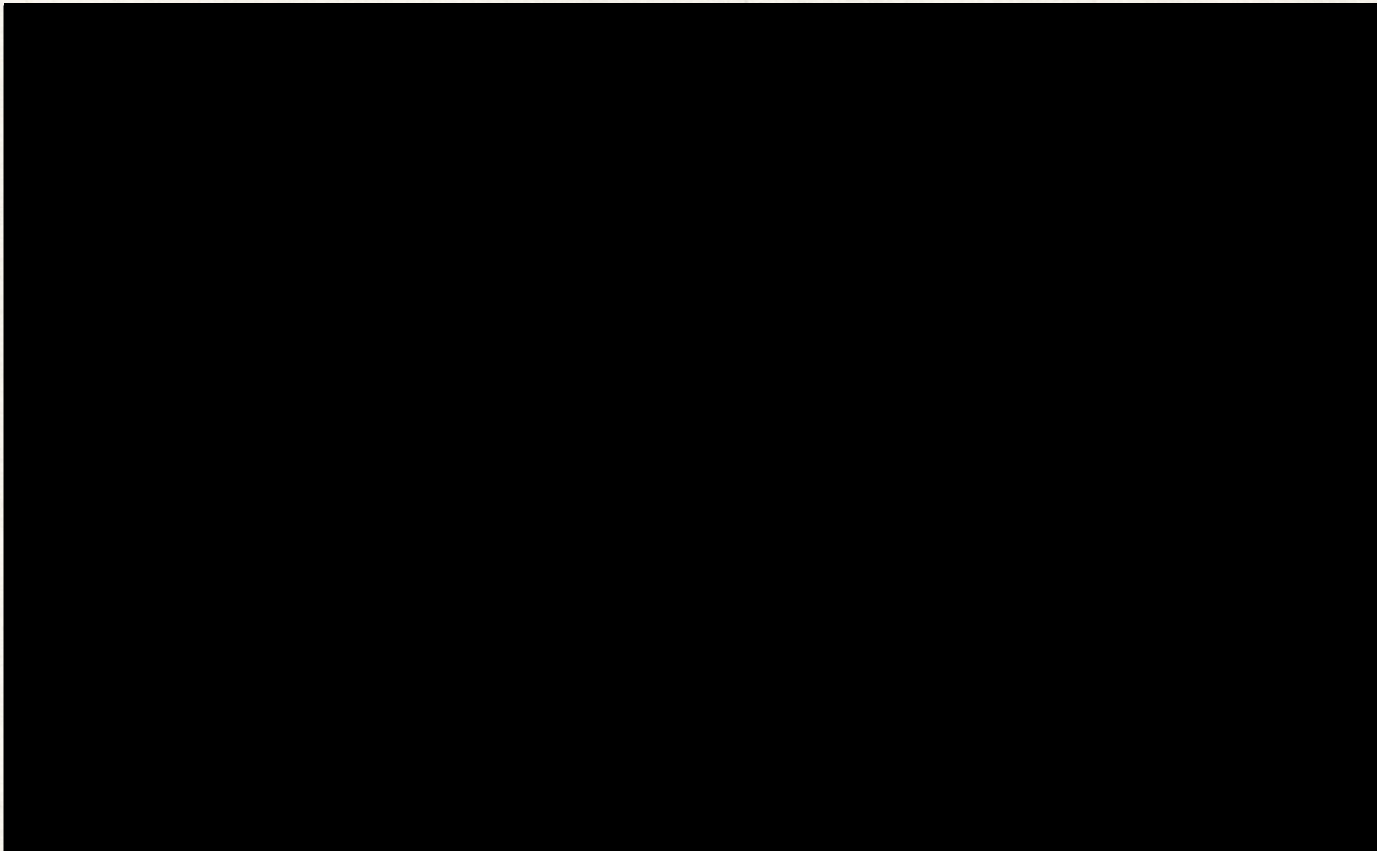
鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

「鹿児島大学生涯学習憲章」案の解説

	鹿児島大学生涯学習憲章（案）	解説
第1段落	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。	鹿児島大学憲章との関連を明確にし、生涯学習憲章を鹿児島大学として推進することを明記したものです。
第2段落	鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。	生涯学習憲章を策定するに当たって鹿児島大学の地域性を明確にするために述べたものです。
第3段落	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人とともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。	生涯学習の理念を述べたもので、地域と大学との相互作用であることを謳ったものです。
第4段落	鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。	鹿児島大学の全構成員が生涯学習に取り組むことを明確にしたものです。

方針1	1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。	生涯学習が、学生を含む青年期の教育と成人教育とともに含むものであることと述べています。
方針2	2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。	生涯学習は、専門職のキャリアアップや社会人大学院などの職業教育と、公開授業受講生など知識教養のための教育の両方を含むものであり、それによる地域への貢献を明確にしたものです。
方針3	3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。	教員や学生が、地域に出向き、地域と交流することでお互いの知を交流し、高め合うことも広い意味での生涯学習と位置づけています。
方針4	4. 鹿児島大学は、鹿児島大学生涯学習の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。	本生涯学習憲章と鹿児島大学生涯学習との関係を明確にしたものです。
方針5	5. 鹿児島大学は、柔軟で開達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。	生涯学習を鹿児島大学として推進し、地域に貢献する大学づくりの柱に位置づけると宣言したものです。



公開シンポジウム 「地域とともに描く 生涯学習の近未来像」 大学生涯学習の過去・現在・未来

9/24 火 南日本新聞みなみホール
14:30～17:10 参加無料

主催：全国国立大学生涯学習系センター研究協議会 鹿児島大学

後援：鹿児島県教育委員会 南日本新聞社ほか放送局各社（予定）

幅広い年代の方のご参加お待ちしております。

基調講演者 東京大学大学院教育学研究科教授 牧野 篤

「大学と地域はこれからどこへ向かうのか～「社会」をつくりだす生涯学習を求めて」

鹿児島大学生涯学習憲章の策定の報告

鹿児島大学は、日本の大学では初めての取組みとして「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定しました。

パネルディスカッション

コーディネーター

岩元 泉（鹿児島大学生涯学習教育研究センター長）

パネリスト

木村 純（全国国立大学生涯学習系センター研究協議会会長）

前田芳實（鹿児島大学長）

豊留悦男（指宿市長）

喜禎浩之（朝日酒造（株）代表取締役）

門田晶子（淵上印刷（株）代表取締役社長）

下野義弘（鹿児島県立始良病院総看護師長）

コメンテーター

牧野 篤（東京大学大学院教育学研究科教授）

文部科学省（予定）

「地域とともに描く、生涯学習の近未来像」

■日時 平成25年9月24日(火) ■場所 南日本新聞みなみホール ■参加無料 主催：全国国立大学生涯学習系センター研究協議会 鹿児島大学 後援：鹿児島県教育委員会 南日本新聞社ほか放送局各社(予定)

シンポジウムの趣旨

鹿児島大学は、日本の大学では初めての取組みとして「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定しました。この憲章は、地域とともに発展する大学づくりの柱として生涯学習を位置づけ、次のように生涯学習の理念を定めました。「地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。」。シンポジウムでは、鹿児島大学がめざす生涯学習の実現に向けて、具体的に何をどのように取り組んでいけばよいのかについて、現状の課題と今後の見通しについて、地域とともに考えていきます。

スケジュール

14:00～14:30 受付

14:30～14:35 開会挨拶

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会会長 木村 純

14:35～14:40 開催校挨拶 鹿児島大学長 前田 芳實

14:40～14:45 来賓挨拶 文部科学省

14:45～15:15 基調講演 東京大学教授 牧野 篤

～大学と地域はこれからどこへ向かうのか
「社会」をつくりだす生涯学習を求めて

15:15～15:25 鹿児島大学生涯学習憲章の策定の報告

鹿児島大学 酒井 佑輔

15:25～15:40 休憩(15分)

15:40～17:05 パネルディスカッション

17:05～17:10 閉会挨拶 鹿児島大学研究担当理事 住吉 文夫

パネリスト/報告者/総合司会者



木村 純
北海道大学教授
全国国立大学生涯学習系センター研究協議会会長 北海道出身。住民参加による地域の生涯学習計画化のプロセスに関する実践研究に長年取り組んでいます。



前田芳實
鹿児島大学長
鹿児島出身。鹿児島大学農学部部長、理事を経て本年4月より学長。教職員、学生、卒業生並びに地域社会が誇りとする大学を目指します。



豊留悦男
指宿市長
北京日本人学校教諭や小学校校長を歴任し、指宿市長に就任。行政、教育部門に携わった経験を生かし、市政発展のため挑戦しています。



門田晶子
測上印刷(株) 代表取締役社長
在米21年、アートディレクターとしてTV局勤務後帰国、祖父の築いた家業を永続するため日々奮闘中!



喜植浩之
朝日酒造(株) 代表取締役
黒糖原料のサトウキビの無農薬栽培を始めて13年、喜界島全体をオーガニックの島に取り組んでいます。



下野義弘
鹿児島県立始良病院総看護師長
鹿児島大学保健学と研究科修士課程修了の第1期生。現場の経験に大学の理論が広がること仕事の幅が広がることを実感中。



酒井佑輔
鹿児島大学生涯学習教育研究センター講師
ブラジル地域研究と社会教育学を軸に研究を展開。本シンポジウムでは、鹿児島大学生涯学習憲章の策定の報告を行います。



小栗有子
鹿児島大学生涯学習教育研究センター准教授
センター創設時に着任。自然や風土と人の育ちの関係を研究する傍ら、学習を組織する仕事に従事。本シンポジウムの総合司会を務めます。

基調講演者



牧野 篤
東京大学大学院教育学研究科教授
1960年愛知県生まれ。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。1992年より名古屋大学教育学部に勤務。2007年より東京大学大学院教育学研究科教授併任を経て翌年より同大教授。

専門は、社会教育学・生涯学習論。研究関心は、人が生活を営み、成長していくことに現れるさまざまな事象を通して、社会のあり方や人が幸せに暮らすために何ができるのかを考えることにある。現在は、東アジア地域における少子高齢化の進展と生涯学習に関する研究や、人が「学ぶ」ことのダイナミズム、まちづくりと生涯学習のあり方などについて探究している。また、多世代交流型コミュニティの形成などさまざまな社会実験・プロジェクトにかかわっている。

文部科学省生涯学習ネットワークフォーラム企画実施委員、同超高齢社会における生涯学習のあり方に関する検討会委員、三鷹市社会教育委員など。最近の著書では、『シニア世代の学びと社会—大学がしかける知の循環—』勁草書房、2009年、『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』大学教育出版、2012年などがある。

コメンテーター

牧野 篤(東京大学大学院教育学研究科教授) 文部科学省(予定)

コーディネーター



岩元 泉
鹿児島大学農学部教授
鹿児島大学生涯学習教育研究センター長
鹿児島歴64年、少しでも農業の現場に役立つ研究をしたいと願う。生涯学習教育研究センター長は昨年より兼務。

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会とは

全国の国立大学法人における生涯学習の振興や地域社会との連携の推進、研究に係る生涯学習教育研究センター等の機関を会員として構成しています。協議会では、センター等の円滑な管理運営を目的に、研究フォーラム、文部科学省との協議など活動を展開しています。今回のシンポジウムは協議会と鹿児島大学が主催し、以下の会員大学の教職員が参加します。
北海道大学、北海道教育大学、弘前大学、福島大学、茨城大学、宇都宮大学、富山大学、金沢大学、岐阜大学、静岡大学、滋賀大学、大阪教育大学、奈良女子大学、和歌山大学、鳥取大学、島根大学、徳島大学、香川大学、高知大学、長崎大学、熊本大学、大分大学、宮崎大学、琉球大学、鹿児島大学

会場へのアクセス

みなみホールは南日本新聞社4階にございます。

車でお越しの際は、南日本新聞会館東隣の立体駐車場「みなみパーク」をご利用ください。

【駐車料金】
昼間 8:00～20:00 100円/60分
夜間 20:00～8:00 100円/90分

※鹿児島新港方面からのお折入庫はできません

「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ

運営スタッフ

大学職員

研究国際部社会連携課	西 信博課長 黒木 哲朗課長代理
研究国際部社会連携課地域連携係	大園 久裕係長 鬼塚 剛生係員
研究国際部社会連携課産学官連携係	日高 達也係長 岩崎 絵理係員
研究国際部研究協力課研究協力係	富山 陽子主任 九鬼 隆史係員

学生・社会人スタッフ

鹿児島大学	早坂 央希 山元 勇人 高岡 朋寛 NGUYEN QUANG THINH 吉松 裕貴 田畑 未来
IBS 外語学院	土橋 照之
鹿児島国際大学大学院	賈 慶超
社会人	西別府 光彩 西元 文彬



あとがき

今回報告書を作成するにあたり、タイトルをどうするかで悩んだ。報告書を作成する目的や意味ははっきりしていた。むしろ、それらを表すためのしっくりいく表現が見つからなかったのだ。完璧とまでいかないが、われわれの気持ちにずいぶん近づいたタイトルになった。

「鹿児島大学生涯学習憲章への道－大学と地域をつなぐ架け橋－」には、前例のない未踏の地をたくさんの方と力を合わせて切り拓いたという事実を残すことに第一の意味がある。鹿児島大学生涯学習憲章がどのような議論や願い、苦闘を経て誕生したのかをしっかりと記録するということだ。憲章を生みだすために貢献したすべての方々の名前や発言内容をできるだけ残したいと考えた。名前が記載できなかった方も含め、協力いただいたすべての方へのわれわれの感謝の念と敬意の表れであると理解していただけるとありがたい。

第二の意味は、今回は決してゴールではないということだ。鹿児島大学生涯学習憲章は理念や方針を定めたものである。このタイトルは、これからも憲章の実現に向かって鹿児島大学が歩み続けることを表現する。副題の「大学と地域をつなぐ架け橋」も同じだ。憲章は、大学と地域のこれまでのつながり方に新たな指針を示している。

今回は、「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの記録（第Ⅰ部）と「鹿児島大学生涯学習憲章」起草委員会の記録（第Ⅱ部）の二つを作成した。第Ⅰ部は、2分科会、12班に分かれて2時間にわたる議論を行った。最後の発表からこぼれおちた内容も多い。紙面の関係上、この報告書に盛り込めなかったことは残念である。第Ⅱ部に関しては、赤裸々な議論や資料を隠すことなく報告書にした。その行為は、われわれの至らなさをさらすことになるが、鹿児島大学生涯学習憲章が何を踏まえ、どういう議論の末にでき上がったのかを詳細に記録したかった。そのことが、日本の大学で先んじて取り組んだ者の責務ではないかと考えたからだ。いつか役立つことがあれば幸いである。

鹿児島大学生涯学習憲章という発想は、本気で頑張っている人が大学や地域にもたくさんいるにもかかわらず、閉そく感が打開できないことに端を発している。今回手掛けたことが突破口になり、新たな社会、地域、大学づくりが進むことを切に願う。

平成 25 年 9 月 19 日

小栗有子 鹿児島大学生涯学習教育研究センター 准教授
酒井佑輔 鹿児島大学生涯学習教育研究センター 講師

鹿児島大学生涯学習憲章への道

-大学と地域をつなぐ架け橋-

第Ⅰ部「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの記録

平成 25 年 9 月 19 日

編集・発行 国立大学法人鹿児島大学
生涯学習教育研究センター

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30

Tel & Fax: 099-285-7294

E-mail: contact@life.kagoshima-u.ac.jp